
俺、不器用ですから

上条信者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺、不器用ですから

【Nコード】

N5852X

【作者名】

上条信者

【あらすじ】

これはこの前消去された小説を再構成したものです。

正直あらすじ書くのめんどくせえ。

主人公は変態というかダメな方向に強烈です。

そんな主人公が救世主（笑）として異世界（笑）に召喚（笑）されて結構自由に動きつつ最近のはやりの異世界転生物を嘲笑う物語です。

お前、飯食わせてくれたのに裏切っちゃダメだろ？

戦力として呼んだのに戦力として使われないでどう扱われると？

人とかデストロイできるようなDQNが元の世界でまともな奴なわけねーだろワロスWWW
多方面に喧嘩売りますが、互いに罵り合いながら感想を言い合える
といいなあ・・・と思っています。

短編の続きという名のプロローグ

「どうも、救世主です。給料頂く為に馬車馬の如く働きに來ましたこんちくしょう」

「グルルルル・・・」

「息くせえよトカゲ野郎。あ、嬢ちゃん危ないからその人に避難させて貰ってね」

「え・・・？」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「!？」

「ほら、お前やっぱ鍛えた方がいいってメタボさん」

「デブの矜持としてそれは無理っす」

「だって一瞬俺殴りとばしそうになったもの」

「ほら、そこは逆に考えるんだよ。デブだから変態なんじゃない、変態だからデブなんだ」

「よくわかりました変態」
ロリコン

「ごめん！間違えた！やり直さしてマジでっ!!」

ロマンチックなだけが恋ではありません。本物の恋とは、オートミールをかき混ぜる行為のように平凡で当たり前なのです。――――

――ロバート・ジョンソン

まなべ くとつ
間部功刀「つまりお前ら恋愛経験皆無なの透けて見えるからヒロインの書き方は考えろよってことだ」

メタボさん「君も結構ざっくり行くねえ……。てか僕メタボさんじゃなくて長谷部大治^{はせべ たいじ}なんだけど」

「まさかオープニングに900文字近く使う事になるとは……」

あ、ども。初めての人はこんちにわ。なんか見覚えあるな〜と言う人はお久しぶり。

まなべくとう
間部功刀です。

いや〜、まさか運営側の陰謀で消去されるとはね。

歌詞の無断転載だって、今度は「〜♪〜♪」って表現しときゃ大丈夫だよ。

ケケケケケケケ・・・。

え？訳がわからないって？

そりゃあんた、楽屋落ちだもん。

分からせる気ねーもん。

そんな訳で新生「俺、不器用ですから」が始まった訳ですけども、今回プロログということでこの空間、派手にしっちゃかめっちゃかにやらせていただきます。

つまり、スーパ―俺タイム。

フヒヒ W W W W W W W W W W W W W W W W

「盛大にメタってるところ悪いけど、このトカゲ処理しちゃわないとこのサイズの死体邪魔だぜ？」

「あれ？これも俺達の仕事なの？」

「あったり前でしょう。ナマモノ生物なんだから死体も残るし、放っておくと疫病もでちゃうんだよ。戦後処理までが散々暴れた俺達の責任です」

「ですよねー」

そんな妄想は目の前の現実には打ち崩された。

いつも疑問に思ってたんだけど、モンスターの処理ってどうしてんの？

放置？それともある程度処理したりすんの？

現代日本とかは道路で猫とか死んだりすると役所の人とかが処理してくれる訳だけど、ファンタジーは大体中世ヨーロッパ設定が多いからそこら辺の描写曖昧だよな。

俺達の世界だと近代ヨーロッパ並み。

モンスターの死体とかによる疫病うんぬんは流石に処理するけど道とかにはうんことか落ちてるレベルだな。

俺の国は違うけど。

メタボさんの国は結構そういうことあるっぽい。

奴隷とかゴミ問題とかな。

「ま、大体は焼却だけど、こいつどう見てもファイアドレイクだよ……」

「火属性か……、しかも火山地帯からどうやってこんなところに」

「ここ山地だから洞窟とかあったんじゃない？」

「溶岩にも耐性があるんじゃないや焼却できるかわからんね……」

「こっちには創世の魔神だけど、魔力ほぼからだからなあ……」

「……（ピクピク）」

普段はふるさいのにさつきからまったく喋らない魔剣、レーヴァンティン。

ちなみに命名俺ね。

「……ま、自分でも厨二くせえ……って思うけどさ。」

ちょうどラグナロクオンラインやってたからちらっと思い出しちゃって。

だって、だってさあ！

神話とかメツチャ好きやし！

男なら炎の魔剣ときて神話級って考えたら誰でも思い付くよなあ！？
だから俺は痛くない、まだ普通まだ普通。

「普通の人間はお前の年頃で厨二病になりません」

「ゴハッ！！」

やるなメタボさん、まさか地の文に普通に突っ込んでくるとは。

「あ、あの……」

「ん？」

「フヒッ？」

背後から誰かに話しかけられると、そこにはプロローグで涙ポロポロ流していたお嬢ちゃんが立っていた。

「……んだよ」

「バカ、萎縮させちゃうだろう。どうしたの、モンスターなら僕達
がもう退治したよ？」

「……ありがとうございました、みんなの仇をとってくれて」

「……」

「……」

めんどくせえ……。

堪らない程にめんどくせえ……。

「できること少ないですけど、お礼はなんでも」

「だってよ、メタボさん」

「そうだね、クトウくん」

「……?」

やれやれと首を振る俺とメタボさんに怪訝な表情になる少女。

「「」どうでもいいからとっとと失せろ」」

「ッ!？」

「別に俺達お前らの復讐の為に戦ったわけじゃねーし」

「お仕事だしね、給料もらってるから君達がだせる程度の報酬貰っても割に合わないし」

「・・・・・・」

俺達の遠慮ない辛辣な言葉の数々に、少女は信じられないといった表情だ。

余程のショックだったのか、その場にペタンと膝をつく。

俺達は彼女に背を向け、ファイアドレイクの死骸を処理するために正面に見据える。

「「だからさ」」

「お前もって泣いていいんだよ」

「ありがとうとかそんなこと言わずに、なんでもっと早く来てくれなかったんだって責めればいいのさ」

「ッ!?!？」

少女が背後で息をのむのがわかった。

だけど俺達はそれを無視して、さらに言葉を重ねた。

夕暮れ、俺達は到着したルカ子たちが瓦礫の下から死体や遺品を回収しているのを眺めながら腰を落ち着けていた。

廃墟、そういう風景だった。

最近の記憶だと日本でもあの地震が有名だが、当事者である分その認識度が半端なかった。

自衛隊の人とかはいつもこんな風な気分なんだろうかと思った。

「いやー・・・ビビったな」

「転移してきたらいきなり目の前火の海だったしな」

どちらともなくポツポツ話し始める。

その言葉には力も無く、ただ呟いているだけと言った感じた。

「なんで俺達こんなことやってるんだろうな」

「救世主だからだろ？」

「あーだったな」

「勝手に呼んどいて何ほざいてやがんだって思うけどねー・・・」

幾度となく疑問に思ってきた事だった。

なんで俺がこんなことを。

ふざけんな、こんなの奴隷と変わらない。

辛い、痛い、やめたい。

「けどよお・・・んなこといっても結局変わらないんだよなあ。国に属そうが放浪しようが、この事態に出会ったら多分見捨てなかっただろうしなあ・・・」

「だねえ・・・」

「まあ・・・だから、なんだ？仕方ないからさ、やるしかねえだろ・・・やるしかないんじゃないっすかねえ！」

んーと背伸びをしながら立ちあがって言うと、メタボさんも隣立ってニヤツと笑った。

「お前やっぱすげえわ」

「そうか？」

「うん、すげえ」

んな褒められつと照れるなおい。

「んじゃ、行きますか」

「行きますかあ」

これは、救世主達の物語。
理不尽で、傲慢で、冷酷で、卑劣で、無常で、不浄で、暖かく、和やかで、やさしく、オチも山も記録すら残らない、ただの物語。

短編の続きという名のプロローグ（後書き）

だいたいこんな作風。

「あああああ！ごめんなさいごめんなさい！」

人生は教師である。そこでは幸福より不幸の方が良い教師である。

リーチエ

フ

クトウ「せんせー、この場合は幸福なんですか不幸なんですか」

ルカトエーゼ「安心してください。間違いようも無く不幸です」

クトウ「でっすよねー」

「♪♪」

今の気分を現わすなら『flay away』になる。

正に飛んで行きたくなるような気分だろうか。

どうも、間部功刀^{まなべくどう}です。

今年で16になるティーンエンジャーだ、つか高校生だ。

高校生といったらラノベとかネットとかじゃ異世界にトリップした

り転生したり召喚されたり救世主になったり勇者になったりモンスターになったり兎に角夢あふれてハッピー☆な世代。

そんな俺が今置かれた状況は正にパンストなみぶっ飛んでいると言っている。

何せ召喚だ、しかも救世主らしい俺。

実に俺の感性を刺激してくれる。

故に今の俺のテンションは上々、フルスロットル。

今大理石の床っぱいものの上を歩いているのだが、俺の後ろを一人の少女が息を切らせながら小走りしている。

彼女の名前はルカトエーゼ・フォン・レーネンブルグ、王宮上級魔導管理官という実に俺の感性を震わせてならない人物だ。

もちろん日本に王宮魔導管理官なんて役職は無い、型月みたいに隠れてる人はいるかもしれんだけど、後イギリスとかにも居そうだな。

そして俺の魔法使い像を裏切らぬ身の丈よりデカイ杖を持ち歩くその姿に、この場所が地球ではない、もしくは俺の人生の常識を超えた世界なのだと実感させた。

だってあんなかつ俺なら死にたくなるね、憧れるけど。

ほら、ファッション雑誌のモデルの服装を真似て鏡で見たら似合わなかった時の感じと似てる。

・・・・あれは、ひどい事件だったな。

酷い事件と言えば俺がこの世界に召喚された時の話も酷い。

あれは多分一生誰にも離せない。

放課後の帰り道だったんだが、いつも通りバイトに向かおうと道があるいていると突然謎の穴が俺の足元に出現した。

予期せず現れた穴に俺は脚を突っ込んでしまい、抵抗も出来ぬ間にゾプゾプと呑み込まれていく。

『な、なんだこれ！？ 妙に何かに這いずりまわっているような感覚が気持ちいい！？・・・・あっ（ビクンッ！）』

あんなの反則だろjk・・・。

重点的にナニを狙ってくるなんて、なんてゲートだちくしょう。

お蔭で召喚された時下着の着替えが無いか聞いたら目の前の魔女っ子に（　。　。　。　）って顔されたよ。

そんなこんなで途中でテンションが上がって冒険にでかけようとしたら魔女っ子の杖が顔面に突き刺さり悶絶したりといろいろあったが、現在俺はこの国の王様がいるという謁見の間とやらに向かっている。

定番だよね、「魔王を倒してくれませんか？」的な？

どうせはい／いいえのどっちを選んでも“はい”しか選べないんだろうけどね、ゲーム的にも現実的にもな。

・・・まったくふざけてやがる。

俺こういうのを自主的にやるのはいいが強制されるのは大嫌いなんです。

せっかくのファンタジーをそんな現実で汚したくない！

現実はまだ沢山なんだよ！

妹が俺のエロゲの趣味趣向を全て把握してるなんて現実は大嫌いだよちくしょう！！

「なので失礼のないようにお願いしますね」

「え？　ああ、うんわかった」

いつの間にかデカイ門の前に到着していた。

魔女っ子が何かを説明していたようだが聞いてなかったので適当に返事を返す。

あ、しまった、分からない時はちゃんと聞き返せてバイトの先輩に怒られてたんだった。

すいません藤二さん、怒られると思ってとか素っ頓狂なこと言ってますいませんでした。

さて、自己紹介はインパクトが大事だからな。

とっておきの特技で自己紹介しよう、クラス会ではこれでドン引きされたが異世界ならまた違った反応が帰って来てくれるはず！

門が開かれた瞬間、猛ダツシュで中に入り歌い始める。

「♪! ♪!」

曲は伊藤由奈の precious。

海猿の主題歌な、そのサビ部分を熱唱しながら部屋の中央っぽいところまで走っていく。

そしてスライディングしながら天井見上げてガッツポーズ、つか天
上たけー。

まるで感極まったかのように涙声で熱唱しながらゆっくり立ち上がりラストスパート。

歌い終わった瞬間にポーズを決め、万感の拍手を待つ。

[illegible]

空氣が凍ったように動き出さない。

あれ？

あれえ？

この反応覚えがあるぞう？

なんだよファンタジー、大したことないな。

この程度で思考停止とはな！

・・・・・・・・・・・・・・・・すいません、おねがいですから
誰か喋ってください。

「あゝ・・・・・・・・えっと、あなた救世主、さん？でいいのかしら？」

「!!」

なんか一番奥にある王座っぽいところにいる少女が話しかけてくれた。

よくやった！アメちゃんあげるよ！

流石は幼女！君の純粋さに感動したっ！！

これ幸いと固まったままのポーズをとりカッコ付けた姿勢で自己紹介を始める。

「おぺっ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・噛んだ。

再び沈黙に包まれる謁見の間。

痛ましい物を見る目の王女様（仮）。

そして引くに引けずに必死にポーズをとる救世主（笑）。

・・・・・・・・・・・・・・・・死にてえ。

誰か俺を殺してくれよ。

「え、えゝ・・・っと、救世主様？、をお連れしました」

疑問形だよ！

もうすでに疑問形だよ！俺もそう思うけどね！

「え、ええありがとう、ルカトエーゼ。忙しいところを・・・」

「いいえ・・・」

ぎこちない会話が交わされている。

多分俺痛い子だ。

俺の扱いに超困ってるよこいつら。

死にたい。

こうなったら開き直ろう。

そうだよ、そうするしかねえよ。

良く見れば2人とも美少女じゃん、テンションあがる・・・、

目が・・・、クラスの女子の目だ・・・。

な、泣いてねーし！いじめられてもねーし！

なんだよクソ共！リアルなんてクソゲーだろうが！

まだファンタジーに席を置いてる俺は勝ち組みだろうが、だから俺は間違っていない。

「おい、お前ら」

「・・・・・・・・はい？なんででしょうか」

王女様に作り笑顔で返された。

「早く話を終わらせて俺を開放してください」

これ以上は耐えられない。

「あ、はい。ええっと、まずはようこそ、ハイ・エウルへ。勝手ながら、救世主様のお力をお借りしたく召喚させていただきました」

「こんな痛い子に敬語使わなくていいっすよ、むしろ罵ってもらった方が・・・・・・・・」

「そんな訳にもいきませんよ、形式的に。そのほうが楽だけどね。さて、あなたを呼んだのには理由があるんだけど、・・・・・・・・なぜか謁見の時間に大幅に遅れててきちゃったからもう時間がないのよね」

なんかすいません。

「という訳でこの国への最低限の保険だけでもお願いしたいんです」

「ん？保険？」

この言葉あんまり好きじゃないんだけどなあ。
やっぱ国としては救世主なんて代物が害をなさないようにしたいのか？

「因みに拒否権は」

「無いわね。力づくでもやるわ」

「なるほど、そういうのは嫌いじゃねえよ」

この幼女、ただの幼女ではないようだ。

幼女なのにおそらく重要な俺への保険なんてものを任せられてるあたり実力はあるのだろうな。

何しろ人柄にも惹きつけられる物がある。

こんな感覚初めてだぜ。

はっきりした物言いい悪印象はない。

「……俺人の下に着くつてのはあんまり好きじゃないんだけどさ」

「ん？」

「あんたのことは嫌いじゃないわ。自主的にならいいぜ」

「ふふ……、視たとこ学生のようにだけど、なかなか見所あるわよ」

貴方。流石は救世主ってことかしら」

「俺はヒーローになる男だからな」

互いに値踏みするように睨みあう。

おお、この感じいいわ。

敵じゃないけど互いが負けたくないみたいに思える感じ。

「……んじゃルカトエーゼ！儀式魔方陣を出しなさい」

「あ、はい！」

ちょっと唾然としていた魔女っ子、ルカトエーゼだっけ？

長いな、ルカ子でいいだろ。

いや待て、それだと某飛べよおおおおお！の科学シュミレーションと被る気が……。

ま、いいか。

ルカ子は俺と姫様の間に奇怪な式の書かれた布をバサッと広げる。

姫様がその中心に立ち、俺も招き入れる。

しゃがむように要求され、疑問に思いながらも俺は目線に合わせて膝をついた。

「んで？これからどうするんだ？」

「貴方はそのままでもいいわ。さて、汝我がペルムドンに忠誠を誓う以下略」

「なんだと」

チュ……。

くちびるが……おれにふれた。

目の前には目を瞑った姫様の小さな顔があり、唇には少し湿った感触が。

そこまで考えた時、下の魔方陣が強烈な光を放ち始める。

驚き立とうとした俺を、姫様は後頭部を掻き込みその唇を強く押し付けてくる。

一体何が起っているんだ。

やがて光が納まり、姫様が少し赤くなった顔をしながら俺から離れた。

「大したことないわね、キスってのも」

「てめえ俺のファーストキスになんて言い様だこのやろう」

その澄ました態度がムカついたのでデコピンしてやった。

するとキョトンした顔でおでこを押さえて俺を見つめる姫様。なんだ、謝らんぞ。

俺のファーストキスは貴様のような少女のためにあったのではない。

「ふふふふふふ、おもしろいわね貴方。気に入ったわ」

「そうかい」

「一応これで保険は終わりよ、何か質問はある？」

「あん？あー・・・そうだな」

「・・・冷静になって考えてみると、一番気になる不安があった。」

「・・・俺、元の世界に戻れんの？」

「解らない、としか言えないわね」

「・・・そっか」

「・・・何も言わないの？」

「それならそれで帰る方法探せばいいし、絶対と解るまではぜってえ帰って見せるね」

「そう」

やっぱこの姫様良いな。

不覚は聞いてこない、相手を気遣えるだけ俺は少し救われた。少なくともここに召喚されたことは悪くなさそうだ。

「んじゃ、そういうわけで俺はいくわ」

「ええ、部屋はルカトエーゼが案内してくれるわ。ルカトエーゼ、救世主様を」

「あ、はい！」

背を向け開かれたドアを通ろうとした俺に姫様の声がかかる。

「そうだ！貴方の名前！聞いてなかったわ！」

「………まなべ くとう間部功刀、俺の名前はまなべ くとう間部功刀だ！」

閉められるドアからちらっと見えた姫様の顔は、確かに笑っていた。
なんとなくまたテンションが上がった。

「よし！ルカ子、俺の部屋まで競走だ！」

「ええ！？また、勝手に！？」

曲は d o n ' t s t o p b e l i e v i n g。

「♪！♪！」

「ま、待ってくださいってばあ！」

ここから、俺の物語が始まった。

一話 こうして話は過去に戻る訳だが（後書き）

綺麗にまとめられたと思う。

二話　そ、そんな厨二を詰め込んだ世界なのか！（前書き）

矛盾点など随時募集

「えっ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・虐めるんですか？虐めるんですね？」

「ちげーよ。普通に情報収集に決まってるだろ。あんたらの言う事がホントかどうか俺には解らん訳だし、そこまで信用したつもりはねえよバカ」

「あ、そうなんですか」

「うん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん？って違いますよ！そんなことしなくてもちゃんと教えます！その為に今日一日貰ったんですよ！？」

「しらねーよwww」

「とことんフリーダムなのに妙に疑り深いですね・・・」

「そういう人生送って来たもんで。あ、違うわ。元来そういう性格なもんで」

「・・・・・・・・そうなんですか」

「・・・・・・・・少なくとも人のプライベートを見極めるくらいは人間

出来てるってところは信用してるけどよ、姫さんがすげー良い女だったし」

「えっ」

「いや、俺はロリコンじゃねえよ、シスコンだし」

「そ、そうですか」

「おいなんで目を逸らすおい。ちっ、まあいい、話は聞いてやるからとっとと部屋に案内しろよ」

「ええっ……」

「……んだよ、悪かったよ」

「あ、いえ、じゃあこっちです」

太陽が輝くかぎり、希望もまた輝く。

フリードリヒ・フォン・シラー

これまでのあらすじ。

俺、召喚。

この世界の説明、部屋で。

大体こんな感じ。

今、ルカ子さんが目の前の机の椅子を布団に座っている俺の方に向けていた。

結構真剣な表情してます。

こっちもそんな見つめられたことないからちよつと照れるぜ・・・。

「さて、どこから話しましょうか？」

「じゃあ、この国の事と大体の世間情勢かなあ」

他にも聞いておくべきことはあるが、まずはこれが解らんとどうしようもない。

情勢が解れば、なんで俺が呼び出されたのか解るしな。

「わかりました。ここは魔法が廃れきれず別の進化を辿る世界、ハイ・エウル。そしてハイ・エウルに存在する二つの大陸の内、主に人間が住んでいるのがこのグロウリアという大陸です。グロウリアは科学技術の発展で魔法の力が昔と比べ落ちてきていますが、人々は過去に消えゆく魔法を別の形によって残したのです。そしてグロウリアの中でも最東に位置し、魔の力が唯一残り続けている国、私達の住むペルムドン王国です」

トントン、と杖で床を叩くルカ子。

ほうほう、情報1、魔法が存在している。

これはさっき変な魔方陣っぽいので儀式を成されたので知っていたが、ここは特別その力が強いようだ。

情報2、ペルムドンつつーらしいな、この国。しかも王政か、時代設定やっぱ中世？

しかし科学技術なんて単語が出てきてるあたり近世っぽいな。

科学技術と魔法との合体か・・・胸アツだな。

「この国はもう一つの大陸、魔大陸エスノリスに近い為かマナが豊富で資源に富んでいます。生命の活動が活発で、巨大な樹海の中に存在しておりモンスターの数も非常に多く未開の地も残されているので、資源はあるけど人口が育ちにくい環境の国なのです。そのため昔から諸外国に狙われることが多かったんですけど、モンスターの多さと軍の精強さで未だこの国を荒らすことが出来た国はありません」

やばい、聞いたって何だが、テロップかなんかないと聞いてるだけじゃ訳分からなくなってきた。

メモ取りたいけど羽ペンはちょっと・・・。

そうこうしている内にもルカ子の話は止まらない。

そんなに俺の脳みそは高いレベルで作られてないんだよ！

英語苦手だよ！

ドイツ語はなんか発音がかっこいいから何個か単語知ってるけど！

さっきの話付いていけてますよ態度もフェイクだよバカ！

ゲーム脳だからなんとかわかったふりできたただだよちくしょう！

ああああああああああああああああああああああああああ、や

ばいそんな早く話されたらマジで聞き取れない！？

うわああああああああああああああああああ！！！！

こうして間部功刀のルカ子異世界教義は本人の残念な脳みその容量オーバーにより、必殺聞いてるふりが発動された。

「と、いうわけなんです。わかりましたか？」

「うーんだいたいわかったー」

後半、マジで早回しのビデオテープみたいにしかな聞こえなかった。それでも必死に喰い付いたおかげか、聞き取れた部分は少ないものの何とか収穫できた。

曰く、グリムリバーなる存在していなかったはずの謎の大陸が現れ、そこから大量のモンスターがグロウリアを侵攻したそうナ。

古のモンスターからなる軍勢に、中途半端科学は役に立たず、諸国は各地で敗戦を重ねたそうナ。

そこでこちらと同じように古の存在を復活させて対抗しようと、救世主なる存在を知った。

各国の技術提供の結果、救世主を召喚する一回ポツキリの魔方陣を完成させ、各地で大量の救世主が召喚されたそうなの。

救世主は予想以上の戦火を見せてくれた物の、被害も当然軽くは無く、今のところ膠着状態が続いている。

そんな中、戦火の被害から一番遠く、今まで物資支援に当たっていたペルムドン王国の近隣でもグリムリバーのエインシェント・モンスターが確認された為に、ついに救世主の召喚に踏み切ったと。

こんな感じの事をすげー詳しい内容で説明された。

すごい丁寧だし、配慮もなされてたと思うんだけどさ……。

こんなもん一片に覚えきれるかボケェ!!

なんかルカ子の「私、やりましたよ」的な笑顔がスゲームカつくし、俺が呼ばれた内容も当然ムカつく。

なのでぶっちゃけるついでにルカ子の鼻を摘まんでやった。

「ながっ!?! いたふあふあふあ!?! いふあいでふいふあいでふっ!?!?」

「あんな、なにそのすげーどうでもいい理由、俺完全に無関係じゃん。舐めてんの? ふざけてんの?」

救世主って、それ殆ど兵器だろうが。
救世主じゃねえじゃん。

「ふえい!」

「おお？」

ポコツと杖で頭を叩かれると、俺は宙を待ってベッドの上に放り出される。

ま、魔法とは卑怯な。

「……………わかっていますよ、あなた達を呼び出してしまった責任は」

「ふーん……………」

鼻を摩り涙目になりながら椅子に座り、暗い表情で語り始めるその姿に感じ取れるものがあった。

後悔、か。

……………めんどくせえなあ。

んなもん感じるくらいなら初めから呼び出してんじゃねーよ。

「おい、ルカ子」

「ルカ子！？それって私の事ですか？」

「いいか、俺はお前に言わなきゃならないことがあります」

「何故敬語」

「突っ込み無用」

コミュニケーション
とんでもなく対人関係能力に掛けるからじゃねえよ？
ビビってないからね？

「ええつとですね、私はこの世界に呼ばれたことを非常に遺憾に思っています」

「はい」

「俺にも向こうに家族がいますしね、正直これ以上休むと単位落とすから高校も休めないからすげえ帰りたいです」

「・・・あれ？言ってることがまとも？」

「おい、・・・まあいいか」

前回のあれは俺も痛いつて認めたからな。
あれなら完全に俺ガイキチである。

「けどどな？そんな立場にいる俺でもな、言うなら後悔なんてして欲しくないね」

俺が要らない子みたいだろう。

「・・・・・・・・すいません」

「あー・・・・・・・・んにゃ、そうですけど・・・・・・・・」

なんとなくどちらとも話が詰まる。

やばい、気まずいぞ。

どうしよう。

逃げたいっす。

・・・・・・・・・・・・・・・・さて、どうしたもんかね。

「あなたは・・・・・・・・覚悟が出来るんですか？」

「あん？」

ルカ子は顔をあげ、泣きだしそんな顔をしながらそれでも真剣な表情でこちらを見た。

不謹慎とか思ったりしたが、その表情はかわいいなと思ったりした。

「この世界はあなたが思っている程やさしい世界ではありません。

魔法は人を殺します。モンスターは人を殺します。そう言った者から命を掛けて人々を守ることを、私達は納得しています」

「・・・・・・・・」

「現実には容易く人を挫き、力はとても速やかに人を翻弄し、死は艶やかに人を魅せ付ける。それが間違えようも無くこの世界の在り方

で、世界の法則です」

「・・・・・・そうか」

「・・・・・・死ぬ覚悟はありますか？命を捨てる覚悟は？ゴミのよう
うにうち捨てられて消える覚悟は？誰も、あなたも名前も知らない
場所で、死ぬ覚悟はありますか？」

「・・・・・・」

大事なことを聞かれている、そう思った。
だから考えた、沢山考えた。

死ぬ覚悟？

無い。

妹も残してきた、死ねない。

止まらない覚悟？

無い。

ただのクソガキに何が出来るってんだ。

利用し利用される覚悟？

無い。

ただ摂取されるだけだろう、俺の頭じゃ。

「ないなら、私が何とかします。守って見せます、帰して見せます、
責任を果たします。ここはやさしくない、命がとても軽い場所だけ
ど、あなたの命を守って見せます」

だけど、

「私に任せといてください！」

こんなに泣きそうな顔をしている癖に、偉そうに胸を張っている小さな女にここまでさせる程、俺は自分が大切かよ？

女にここまでさせといて、今さら覚悟うんぬん抜かして逃げるのか？
・・・ならどうする？

このまま兵器として終わるのか？

冗談じゃない。

どう覚悟するべきか、ここはファンタジーだけど、確かに現実なのだから。

向こうでもそう生きてきたはずだろうに、なぜ出来ない？

・・・恐いからだ、死ぬのが恐いからだ。
なるほど、な。

それなら決まった、どうやって俺が覚悟するか。

「ルカ子、覚悟、できたぜ」

「えっ」

「ヒーローは逃げねえんだよ。戦って、立ち向かう、それが俺の憧れた姿だ」

ルカ子と同じように立ちあがって、驚いた表情の彼女に高らかに宣言した。

「俺は、不器用で、情けなくて、どうしようもなく臆病だが、この世界で、ここで、ヒーローになって見せる！」

俺の物語が、動き始めた。

二話 そ、そんな厨二を詰め込んだ世界なのか！（後書き）

こんなもんかねー

三話 訓練開始イイイイイイイイイイ!! 死ぬわ

「救世主様く、訓練の時間です、よ……」

「はっ、ふんっ、ぬおうりゃ!」

「……………」

「はいっ!とうっ!ねりゃあ!」

「……………なにをやっているんですか?」

「うをつ!? ……なんだルカ子か」

「その呼び方決定なんですか」

「だって名前なげーし」

「ルカ子て……」

「いいじゃん、かわいいかわいい」

「か、かわ……って、なんで裸なんですか?!」

「そらお前、スチュアートリトル大佐ごっこしてたからな」

「知りませんよ!? 誰ですか!?!」

「いや、適当。ようは一人軍隊ごっこ、設定は拷問部屋から裸で抜

け出すところ」

「本気で知りませんよ!?!」

「ところでこいつを見てくれ、こいつをどう思う?」

「変態です」

「おまつ、そこは『すごく・・・大きいです』って言わんと・・・!!」

金を失うのは小さく、名誉を失うのは大きい。しかし、勇気を失うことはすべてを失う。――チャーチル

どうも、間部功刀です。
三話目からは作者もめんどくさくなってきたのでルビ振りません。
読者にやさしくない作者ですまん。

……誰に向かって説明してるんだ俺。

結局昨日の宣言をルカ子に歯牙にもかけられなかった俺は、当然の如く燃え上がり、ルカ子が去った後どうすればルカ子に認めてもらえるか必死こいて考えた。

ヒーローになるという言葉、その場のノリも手伝ったかもしれないが俺にとっても軽い気持ちで言った訳ではない。

殺しのこの字も知らん素人の言葉だし、なによりこの世界の住人からしてみれば覚悟と呼べるものでもないのだろう。

しかしそれを一蹴されると言うのは男として捨て置くことはできない。

なので俺は考えた結果、バイトがてらに鍛えていた身体を固持する為に筋トレに走った、裸で。

その内に最初の目的がスポーンと抜け、楽しくなってきたので鏡に向かって正拳突きしたり飛び蹴りしたりポーズとったりしている内に朝を迎えてしまった。

その様子をルカ子に目撃され、丁寧に説明してやったのにも関わらず、何故か魔方陣で爆破されかけた。

自分でも結構鍛えられてしまってると思うんだけどなあ。

窓から逃げ出し、昨日去り際に今日の予定と場所の指定を聞いていたので現在そこへ向かっている、裸で。

全裸で。

大切なことなので二回言いました。

凍えるなマイサン、朝立ちで気合い入れろ。

そんなこんなで指定された訓練場とやらにやってきた。

ルカ子は置いて来てしまったが、俺のヒーロー^{変態}オーラにかかれば、人の意識を引きつける事など容易い。

早朝なのでチラホラとしか確認できないが、その全員が俺をポカンと眺めていた。

やめろよ、見せもんじゃねーぞ。

そんな感じで胸を張ると、慌てて全員目を逸らした。

ちっ、つまらん。

・・・・・・・・ん？なんだあれ。

中央に何やら立て看板が・・・『救世主貸切』って・・・まんまやん。

どうやらあそこで訓練するらしい。

相手の人も既にそこにいるし、取りあえず行ってみるか。
近づくにつれ、相手の顔も見えて・・・。

「エクセレント・・・」

すんげえ美人がそこにいた。

ルカ子は日本人の俺には見慣れない赤毛だったのだが、この人は違う。

美人外人ってこんな感じって俺の印象を裏切らないキレ目で整った顔立ち。

ボーイッシュに短く切られた金髪で緑眼、正に西洋の美人。

そんな美人が俺を（。D。）って顔で見ている。

やがて美人さんは（；。D。）ってなって俺に話しかけてきた。

「き、貴様なぜ裸なのだ!？」

ふむ・・・、中々深いな・・・。

「俺が変態^{ヒーロー}だからさ！」

ようやくルカ子が追いついた。
運動不足だな、この程度の距離で息切れとは。

「とり、あえず・・・服、着てください・・・」

「うっす」

ちょうど肌寒くなってきたところだ。

ルカ子から渡された服は柔道の道着服のような厚手で、肌触りもまだ召喚されて一日なのに懐かしく感じた。

ルカ子も来たところで、美人さんと自己紹介といきますか。

「おっす、間部功刀っす！救世主っす、おっす！」

「・・・・・・・・クネール・イヌ・ベルフェグルエだ。貴様の訓練を担当することになった。主に戦術などを教える」

「おっす！質問があります！」

「・・・なんだ」

「姦計はありますか？」

「ない」

「なん・・・だと・・・」

この世界の魔法少女は脱がないのか？
なんてことだ・・・、クネールさんは少女っぽい年齢に視えないけど。

「ルカトエーゼ、あれは本当に救世主なのか？」

「はい、残念ながら」

「・・・私はあれを鍛えなきゃいかんのか？」

「・・・はい、残念ながら」

「ねえねえ、鍛えるって何を？股間？」

「・・・」

「お察しします」

天を仰ぎ、頭が痛いと言うように目頭を押さえているクネールさん。
冗談通じねえなこの世界の人達。
つか俺裸足だった、これでやんのか？
いや、逆にこっちの方がいいのか？
うんうん俺が悩んでいると、クネールさんが諦めた表情でこちらを
見て質問する。

「何か聞いて置きたい事はあるか？」

「え、じゃあ、クネールさんの年齢は？」

「・・・・・・・・・・28だが」

「あ、結構いつてるんですね」

「・・・・・・・・・・！！！！」

ピシッと空気に亀裂が入った音がした。

あ、あれ？

もしかしながらもまズった？

「クトウとか言ったな、貴様武器を持ったことは」

「な、ないっす」

いつの間にかクネールさんの手には刃の若干厚い両手剣が握られていた、種類のにはクレイモアか？

あのサイズを片手で振り空気を裂く様に、背筋に大量の冷や汗が流れ落ちた。

「そうか、ならそのまま避け続けろ」

「え、ちょ、まっ」

なんか訓練が開始。

「ま、ちょ、ひっ、すい、ません、でし、た！」

「ほう、中々やるじゃないか」

あれどうみても真剣だよな。

キラッ☆って光ってるもんね。

あれから俺は必死にクネールさんの剣閃を避け続けていた。

何時間避けているのか、それとも何分なのか区別はつかないが、俺の足腰は確実に限界に近付いていた。

なんせここまで身体が緊張した経験は初めてだ、喧嘩とかよくしてたけどその比じゃない。

息が乱れ、肩が揺れ、顎が開く。

それに比べて奴さんは随分と涼しそうな顔だった。

くそっ、何が救世主だ。

これじゃルカ子も認めてくれねえわけだぜ。

なら、気合い入れろ俺。

ここ萎えちゃ本気で締めえだぜ。

そうやって足に力を入れ直した時だった。

「もう少し本気で行くぞ、避ける」

「え」

一步、あと一步進んでいたら、俺の首は吹き飛んでいた。しかしそれは反応できたからじゃない。

足が竦んで進めなかったからだ。

「ほう、偶然とはいえ避けてみせるとはな？ 素人にしては良い素材だ」

クネールさんがなんか言ってたけど、俺は今それどころじゃないかった。

さっきのが可愛く思えるほど大きく、心臓が跳ねた。

身体は震え、眼は見開き、歯並びが合わずにカチカチ情けなく顎が震えた。

恐怖、した。

俺は今、クネールさんの剣に、おそらく殺気も無く文字通り訓練通りに振った剣を心底恐怖した。

それだけが頭の中を渦巻いていた。

何が救世主だ、何がヒーローになるだ。

情けない、こんなにも情けない。

多分もう動けない、足が震えて動かない。

いつでもふざけてカッコ付けてきた思考は止まってしまっている。

ああ、これが、恐怖。

俺はようやく理解した。

自分はどうしようもなく矮小で、どこまで行ってもこのままなのだと。

間部功刀は、ヒーローにはなれない。

「ふざ・・・ける、な・・・っ！」

ガンッ！

俺は震えて止まらない身体を、自分の額を右手で殴りつけた。
痛み自体は大したことない、喧嘩で慣れてるから。

恐怖は、俺から逃げて行かない。

このまま立ち上がるためのモンまで持ってかれそうだ。

ゴッ！

もう一度。

ガッ！

もう一度で、ようやく止まった。

自分の顔がすごい腫れてるのが分かったが、どうでもよかった。
ふざけんな、成れる成れないじゃない。

人は結局てめえの欲望を愛すのだから。

やるかやらないかだろうが！

「いい眼だ。いいだろう避けて魅せろ」

「ヒーローは・・・ねえ・・・ねえんだよ・・・」

クネールさんが俺の頭を勝ち割る為にクレイモアを振り上げた。
避ける？冗談じゃない。

ヒーローは避けない。

「・・・・・・・・ふざけているのか？」

「ヒーローは避けねえ。避けねえんだよ。傷ついても、恐くても、
立ち上がる」

「・・・・・・・・避けると言ったが撤回だ、そのまま眠っている」

刃が返され腹の部分でぶん殴られた。

ゆっくりと地面が近づきながら、俺の意識は暗くなっていった。

おまけ

クネール（以下ク）「まったく、面倒な奴を呼び出してくれたものだな」

ルカトエーゼ（以下ル）「……」

ク「まさか本気で振っても避けられるとはな、救世主として一だけ自分を創り替えたんだ《……》こいつ？」

ル「これは、危険ですね。国との契約だけでなんとかなるか……」

ク「一応もう一つ保険がいるな」

ル「……そうですね、姫様に打診しておきます。最終的には封印の方向になるでしょうけど」

ク「だな、素人にはこの力はキツすぎるだろう」

ル「？楽しそうですね」

ク「いやあな、こいつを自らの手で育てられると思うと叩き甲斐がある」

ル「あー……」

ク「おい、そんな目で私を見るなよ。純粹にこいつの精神力は素晴らしいぞ。単純に恐怖に勝つだけでも、私達は数年かかったじゃないか」

ル「そう・・・ですね」

ク「クククク、明日から暇しなさそうだ」

ル「・・・・・・大丈夫ですかねえ」

三話 訓練開始イイイイイイイイイイイイ!! 死ぬわ(後書き)

今んとこ4000ずつかー・・・。

あんま重要じゃないからなー。

5000は掛けるようになりたいなあ。

四羽 あながち間違ってない、餌的に。

「なあルカ子、あれ何よ」

「服屋ですね」

「あれは？」

「ルルっていう小動物とかと一緒にお茶を楽しんだりする甘味屋さんです」

「猫喫茶みたいなもんか。じゃ、あれは？」

「あそこはおいしいご飯が食べられるバイキングですね」

「すごいな、異世界」

「全部救世主さん達が伝えた文化ですけど、この世界でも庶民や王族にも広く伝わっているんです」

「ああ、だからさつきルル喫茶に姫様がいたのか」

「え、今なんて言いました？」

「や、だから姫様が居るって」

「……………ちょっと失礼しますね」

「あ、おい！……………行っちゃったな。な・ら！俺も隙に

動いちゃってもいいよねWWW」

「すみません今戻りました」

「はええよ」

「なんかあなたから不吉な波動を感じたんで」

「お前は俺の母ちゃんか」

「手のかかるという部分では・・・」

「マジで？」

男というのはいつもそうだが、我が家から離れている時が一番陽気なものだ。

—— ウィ

リアム・シェイクスピア

どうも、間部・・・功刀です。

今、僕は森の中で迷子です。

すごい心細いっす。

事の発端は今日部屋に来たルカ子の一言。

『今日はモンスターを狩りに行きますよ』

リアルモンスターハンターになれとのことでした。

別にそれはいいんだよ。

最初はケルビくらいだろうと思ってたし、今の俺だとシシガミ様レベルだけど。

クネール姐さんと並行してルカ子の魔法授業も積み込まれてたしな
んとかなるだろうと思ってたんだ。

しかし初めて城の外を出るという事で俺のテンションはウナギ登り
だった。

初めて見る店、初めて見る異世界の風景、街の人々の活気。

これらは積み込み勉強の受験生の心を癒してくれた。

ま、結局ルカ子に邪魔された訳だが。

モンスターハンターは樹海でやるらしいから、街を出る為に門を出
た。

街はぐるっと壁で囲まれており、樹海の中に存在しているこの国の
都市ならではの構造らしい。

んで都市門を抜けたんだが、その先にはスゲー自然が広がっていた。
富士の樹海とかならみたいない感じなんだろうが、残念ながら俺はシ
ティー育ちだ。

こんな見事な自然は見たこと無かった。

これによってリアルモンスターハンターのテンションはマックスだ。
だってホントに凄かったたんだもん。

『いやっほおおおおおおおおおおおおおっ!!』

そういう訳で解ったんだが、俺はアホだった。

結局ルカ子の静止を待たずに俺は森の中を爆走。
迷子だ。

そして、

ハアアアアア・・・

ピンチだ。

現在私はリアルモンスター軍団に囲まれています。

ウルフです、オルガロンです。

メツチャ興奮してて俺の周りを徘徊しています。

俺の手元にはさっきそこで拾った腐って苔の覆った看板。

手札は身体強化と武器。

敵はデカイ狼モンスターの群れ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

死んだな。

「初っ端からレベルを無視した敵と遭遇ってクソゲーくせえな・・・」

グルルルルルルルルルルル・・・

メツチャこええ。

逃げられんよなあ、これ。

ちよつとケツからうんこ漏れちゃった。

これ以上俺のプライド（人としての）は失われることは無い。

だから、やるだけやるだけだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおかかってこいよおおおおおおおお
お！！！！」

「伏せてください!!」

その声を聞いた瞬間、俺は言う通りにその場に伏せた。

何かの弾け飛ぶ音や、モンスターたちの悲鳴が聞こえた。

俺は情けないことにそれらを見る事はできなかった。

身体が震えて動けなかったから、恐くて見てられなかったから。

そうしている内に音が徐々に小さくなって行き、やがて完全に音が止んだ。

恐る恐る顔をあげると、そこには焼け焦げた狼や一部の焦土化した森。

そしてとてもホッとした顔のルカ子が居た。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言の重圧。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

現在俺は正座中だ。

あの後ルカ子が死体の処理とかも黙々とやっていたので俺も黙って手伝ったのだが、終了後はこのように黙って見つめられ続けられている。

意図は何となくその組まれた腕から察することが出来るので、俺はその威圧に耐えられずにその場に正座してしまった。

ていうか女の子は怒らすと恐ろしいという事が妹や母で理解してますから、黙ってその無言の指示に従った。

そうして、俺は正座している訳だが。
どないしよう。

「クトウさん」

「はい・・・」

「私はとても怒っています」

「すみません」

はい、予想通り怒ってました。

「ひとつ、遭難の危険性もあったのに勝手も解らない土地に一人で突撃したこと。ちゃんと私の指示に従ってと、勝手に動かないで下さいと言ってますよね？」

「はい・・・」

「ふたつ、正規の軍でも中隊規模で処理するモンスターに見つかるとような大声で行動していたこと。街から外はそういう世界です。個人宅でも特別な柵門が使われているんです。これも私に従ってください」

「はい・・・」

「みつつ、モンスターに囲まれたからといって素人が特攻？ありません、あなたヒーローになるんでしょう？だったら少しでも生き残れる道を探してください」

「・・・」

「まあ要するにですね・・・帰ったらみっち

り勉強し直します!!!!」

「はい・・・」

そんな訳でした。

「救世主様、帰りますよ」

「・・・」

みっちりその場で叱られました。

今回は俺も悪いのですげー反省した。

こんな軽い悪ふざけが死に繋がるのがこの世界なんだ。

「救世主様？」

「あんよお・・・それやめねえ？」

「えっ？」

だからこそ、俺は言って置かなければならなかった。

これは俺の目標を正しく認識する上で必要だったから。

「モンスターに襲われた時思ってたんだ、俺は・・・弱い」

「・・・」

「この前まで、俺はただのガキだったんだ。平和なくせに不幸と嘆いて、プラスのくせにマイナスばかり数えていた、ただのガキだったんだ」

ちようどいい切り株を見つけて腰かけた。

ルカ子は俺の正面に立ち続けた。

「クネール姐さんの時も思ってたんだ。恐かった、すげえ恐かった。

だから俺はヒーローでも救世主でもない、ただの情けなくて、愚鈍で、弱々しい、唯のクソガキなんだ」

「・・・・・・・・」

「だから、俺を救世主様なんて呼ぶなよ」

ああ、なんて、愚かな。

こんなこと、ただの愚痴以外になりえないというのに。

なぜ俺はこれを口にするのを止められなかった。

こんな事言ったら、本当のヒーローに成れないかもしれないじゃないか。

なのに君は、君だけは。

「お師匠様が言ってました。この世界で最も難しい魔法は言葉だつて」

俺を、励ますというのか。

「言葉は天で渦巻く混沌を世界に下して認識させるモノです。それ故に放ってしまえば存在は確定してしまいます。だから、私達は、私はあなたの教育係だから、マナベクトウという言葉がヒーローになりたいと望めば、救世主^{ヒーロー}にだってしてあげられるのだから」

ルカ子は俺の手をギュッと握り、言葉を紡いで行く。

俺はというと、情けないことに、本当に情けないことに眼から汗が流れていた。

「私はクトウという言葉を特別にするために、あなたを教えるのです。だから、諦めないでください」

「・・・ああ」

歯を食いしばって、それだけはなんとか声に出した。

俺は弱い。

だからこそ、強く成りたかった。

でも、強くなりたいだけだった。

戦士は護る物がなければ戦えない。

矜持だろうがなんだろうが、護る物が無ければそれはただの人殺しだ。

だから俺は、ルカ子のこの決意を護ってみようと思った。

今日の遠出は、少し成長できたように思いましたまる

四羽 あながち間違っ
てない、餌的に。
(後書き)

お疲れ
)

五話 新キャラ登場です（前書き）

もう少し全体を加筆したいなあ・・・。
でも時間ない・・・。

五話 新キャラ登場です

「だりゃあ！」

「よっ」

「チェリオッ！」

「ふっ」

「チェストオッ！」

「！ほお・・・」

「ぐっ・・・ぜあ！」

「頑張りますねークトウさん（書き書き）」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おとおお！ー！」

「ああ・・・ダメだ」

「ゴハッ！？」

「あ、痛そう（書き書き）」

「お前、さっきの良かったのに」

「クネールさんも楽しそうだなあ（書き書き）」

「ぜえ・・・ぜえ・・・まだ、ま・・・だ・・・！」

「そういうのは嫌いじゃないんだが、今回はこれで時間切れだな」

「ッー！・・・ありが・・・とう・・・ざい、ましたッ・・・！（バタリ）」

「・・・・・・・・まったく、楽しい奴だな。ルカトエーゼ！」

「はいはい（ペタペタ）」

「いつもすまん。私の回復魔方陣は軽い物しか治せんし」

「困った時はお互い様ですよ、正直量が追いつきませんけど」

「その分は強くなっているさ」

「・・・・・・・・そうですね」

千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。

宮本武蔵

地面が湿っているのが、肌触りで解った。

「ッ!!」

その瞬間バツと身体を跳ね起こした。

「きゃっ!」

「あん?」

悲鳴が聞こえ、声の主を探すと尻もち付いたルカ子だと解った。

予想していた状況と違う事態に少し戸惑うが、やがて一つの事実を理解した。

「あ、俺また気絶したのか」

「そうですよ、今治療中なので動かないでください」

「ん」

素直にその場に座り、ルカ子の治療を受ける。

治療といってもルカ子の魔方陣を身体中にペタペタ貼って貰ってるだけなのだが、この魔方陣の効能が凄いのだ。

はつきり言うとな俺の身体は全身打撲裂傷アオジントンと正にボロボロであるのだが、これだけの全身の傷を数刻で完全に治してしまうのだ。

クネール姐さんに言わせれば、『流石』らしいのだが、俺はこの世界の魔法使いはルカ子しか見ていないのでよくわからなかった。

いつもはクネール姐さんが俺が起きたら批評をしてくれた後ルカ子と勉強会なのだが、今日はどうしたことかクネール姐さんが見当たらない。

「あ、クネールさんは今日は他にもお仕事があるのでこれで上がるそうです。代わりに私が伝言で伝えというて欲しいと頼まれています」

「そっか」

あの日以来、なんとなくルカ子と話しづらい。

原因もよくわからんのだが、ふざける気が起きない。

ルカ子の前だと何となく話せなくなるのだ。

そしてそのことを不快に思っていない自分がいる。

こんなことは初めてだった。

「ええっと……『痛みや攻撃に対しての恐怖が抜けたからか動

きが良くなったが、無駄に突撃し過ぎだ。攻撃や移動のペースを考えろバカ者』だそうですね」

「昨日と同じじゃねーか」

「昨日と変わりませんからね」

「・・・・・・」

そしてルカ子の方も何となくだが、垣根が少し降りた気がする。ツツコミに容赦が無い、というより最初より遠慮が無い。喜ばしい、のだろうか。

嬉しい、と思う。

ま、考えて解らんことで俺がどうしても仕方ないか。そう思ってこのふわふわした気持ちをどこかへ放る。

「んじゃ、この次はベンきょーかー。だりいぜ」

「もう、真面目にお願いしますよ！」

少なくとも不快じゃないんだが・・・・・・、物足りないな。俺らしくねえというか・・・・・・。

変態ネタもしてないし。

そんな思いを抱えながら、俺はルカ子と共に部屋に戻った。その途中で珍客が待ち受けているとも知らずに。

「待ってたです！このブタ野郎！」

「・・・・・・・・・・」

「？何黙ってやがるですこのペド野郎！」

ルカ子と共に勉強会の行われる俺の部屋に向かっていたら、建物の屋根の上にアホが居た。

銀髪が腰に届くツインテールになっており、ネコ目な黒眼、身長はルカ子よりも高く158くらい？

あぶね、俺163だわ。

そして棚引くスカート。

「なあ、ルカ子。あのバカは何だ」

「……私の後輩で、ネリア・ブロン・クイッシュローゼという子なんです」

あ、バカは否定しないんだ。

「何ごちゃごちゃ抜かしてやがるです！はっ！そうですか、貴様今ルカ様に卑猥なセクハラ発言を働きましたですね！私にはお見通しです！」

「俺はお前のパンツしかお見通しじゃねーわ」

この高さでこの角度なら、当然の如く丸見えだった。
因み紐で黒、今夜のおかずはこれで決まりだ。
残念な体型の癖に中々大人なチョイスだな。

「っ！！？……座ってれば見えないです？」

「どうせなら降りてこいよバカ」

「くっ、貴様の言葉に従うのは癪ですが……大人しく舞ってやがるです！」

そう言ってこちらに何かを投げつけてくるツインテ。
キャッチしてみるとザルと鉢巻だった、……。ザル踊りでもやれ
ってか。

とりあえず捨てる。

「よし、行くぞルカ子」

「ええ?!」

「ツインテより俺の魔法の習得の方が重要でしょうが」

「……。はい、わかりました」

「さあああああああああああああああああせるかあああああ
あああああああああああああああああ!!!」

廊下ならでもあるような規定を大いに無視しまくった全力疾走&
急停止で俺達の前に再び現れたツインテ。
どれだけ全力を使ったのか肩で大きく息をしていた。

「よ、漸く、追いついたです」

「あ、お疲れ、これ飲む?」

「あ、どうも」

疲れた様子のツインテにさり気なく飲み物を渡してやった。
塩を大量にブチ込んだ奴を。

訓練後の為に俺が用意してる奴を強烈にした奴だ。

「ゲッハッ！ごふ！がはっ！な、なんですかこれえ・・・」

「塩水だな」

「己、貴様ルカ様に近づいて何をするぎなんでゲホッ！！」

「お前な、男と女が一つの部屋の中のことなんか決まってるんだ
ろうが」

「ッ！？」

「お勉強です！他に何もありません！」

「なんかそういう対象じゃないんだよねルカ子」

「がはっげほっ！ぜえ、認めませんです！」

咳き込みながらも自分の信念を押し通そうとするツインテ。
どうやら俺がルカ子と一緒に居る事が気に入らんようだな。
それなら対処法があるじゃないか、久しぶりに俺らしいな。

「おい、ツインテ！」

「ネリアはツインテじゃないです！」

「ルカ子を掛けて決闘を申し込む！」

「はあっ!?!」

「ちょ、クトウさん!?!」

戸惑いの声を上げるルカ子。

すまん、今の俺の状態を現わすなら、こういうことなんだ。
俺に、俺が戻ってきた。

「受けるか？」

「……ふん、精産器の癖に決闘とは……いいでしょう、
受けるです」

「ネリアちゃん!?!」

「すみませんルカ様、だけど、引けないんです」

「奇遇だな、俺もそう思ったとこだよ」

「このブタ屑男には――――」

「この痴女には――――」

「ルカ子は渡さない！（です！）」

ニヤツと互いの顔を睨みつけ、仇敵の存在をライバルとして変質させる。

ここに、ルカ子争奪戦が決戦。

「ルールは相手の一番大事な場所に触れた方が勝ちだ！」

「なんですそのルール！？」

「だってお前強いだろ？」

感じ取れる存在がオルガロンよりも強烈なんだよね、違う意味でも。たぶん普通に喧嘩したらぜってえ勝てない。そんなわけでハンデを要求した訳だ。

「!なるほど、バカではないですか」

「ああ、ただのウンコマンだ」

因みに訓練場に引き返した、あの場でやったら通路通る人の邪魔だし。

訓練を指導してたクネール姐さんがポカンとしていた。

「俺の大切な場所は解っているな、ナニだ」

「うっ・・・!わ、わかったです」

「で、お前は？」

「へっ？」

「だあらてめえのテクニカルポイントはどこかって聞いてんだよ」

「うぐっ・・・!」

やばいこの女堪らん。
はらいたい W

「ごほっ！んんん！さて、決闘を始めようか W W W W」

「うう、汚されてしまったですルカ様」

「ええゝ・・・っと、それじゃあ両者前へ」

「おっけー」

さてと、準備するか。

「ちょっと待ってください、クトウさん。なぜ脱ぐんですか？」

「え？何か問題が？」

「大在りですよ?!」

「それよりこの試合早く終わらせないと勉強の時間がなくなっちゃうぞ」

「・・・・・・解りましたよう」

しよぼしよぼと返事をするルカ子。

よし、調子戻ってるな俺。

「バ、バカじゃないですか?!」

「いいや、俺は救世主^{へんたい}だ」

「私はよく変だと言われてたですが、お前の頭は大変です!」

なんだと、失礼な。

自覚はあるけど。

「両者とも位置に着いてください。よーい、始め!」

「やってやるぜ!」

「ちよ、手をワキワキさせながらこっちくんなんです!?!」

結果。

「やあああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！？」

「ぐもはっ!？」

パニックに陥ったツインテの強烈なボディブローが、訓練でダメージを重ねていた俺の身体を軽々と吹き飛ばし場外。
その後は泣きながら去っていくツインテ。
こうしてこの謎の決闘は終了したのだった。

「クトウさん」

「・・・・・・なんででしょう」

「不器用ですね」

「はあ？　なんだよ急に」

再びルカ子のペタペタ魔方陣を貼って貰っていると、ルカ子が話しかけてきた。

しかしそれは俺の予想していた物とはまったく違いました。

何故敬語。

「女の子、実は苦手なんでしょう？」

「・・・・・・・・・・」

「3秒以上目を合わせないし、私からじゃないと絶対触れないし、何より変態的な行動セクハラはするのに傷つける行為は絶対にしませんしね？」

「うっせ・・・・・・・・」

なんで、わかるんだよ。

「先生ですから、生徒の癖は早く見つけ出さないといけないんです」

「人の心を読むな」

驚くじゃないか。

「ふふ、すいません。それでも私、本当に学校の先生だったりするんですよ？」

「ふーん」

やばい、俺今顔赤い。

でも膝枕されてるから逃げられない。

「今日は外で青空教室でもやりますか」

「……そうだな」

気持ちいいな、と素直に思った。
どちらがとは流石に言えないけど。

ル「はあ・・・訓練、しましうよ・・・」

五話 新キャラ登場です（後書き）

次は短編補完だよ！

短編集的なものを突然やりたくなったんだ（前書き）

そんなわけでここまでの日常をば。

短編集的なものを突然やりたくなったんだ

クトウくんの城の中での評価

とある城に住まう衛兵。

「変態だな、でも話してみたら面白い奴だったよ」

とある街に住まう衛兵。

「変態だが、中々骨のあるやつだったよ」

とある城に住まう料理長。

「変態だ。しかし食いつぶりは気持ちがいいな」

とある城に住まう掃除係。

「変態ですね。でも、見知らぬ女性には親切ですよ。顔も悪くないです」

とある城に住まう武官。

「変態だよな、お前もそう思うだろう？ だけどクネールさんが認めるだけの根性はあるよな」

とある城に住まう文官。

「変態以外の何物でもないですね。しかし意外と仕事教えると早く覚えてくれるんですね。特に決算とか」

とある城に住まう給仕。

「顔いいのに変態ですよ。正直中々優良物件だと思いますよ、変態ですし」

とある城に住まう女性管理官。

「はい、変態ですね。で、でも少しくらいはかっこいいところもゴニョゴニョ……」

とある城に住まう教導長官。

「変態だな。もう少しあくが抜ければ育てがいがあるな」

とある城に住まうツインテールの魔術師。

「脳みそド腐れゲロ豚変態野郎です。死ねばいいです」

とある城に住まう国王。

「変態だよな。でも面白いと思うわね、だって私にデコピンした男なんて初めてだし（黒い笑顔）」

とある街に住まう店主。

「ああああああああああああああああああああああ！！？ あの変態か！？ ルカトエーゼちゃんに近づいてるあのクソ野郎か！？」

とある街に住まう青年。

[illegible]

「!!!? あの変態か!?!? ルカトエーゼちゃんに近づいてるあのクソ野郎か!?!?」

とある街に住まう少年。

「ああああああああああああああああああああ
！！？ あの変態か！？ ルカトエーゼちゃんに近づいてるあのクソ野郎か！？」

とある街に住まう奥さん。

「変な子だけど、ルカちゃんにちよつかい出してる家の旦那よりマシだね」

とある街に住まう女性。

「変態ね、だけどルカちゃんにちよっかい出してる彼よりマシね」

とある街に住まう少女。

「変態だけど面白いわ！ ルカちゃんにちょっかい出してゐるアツ君よりマシだよ！」

最も難しい事は三つことは、秘密を守ること、他人から受けた被害を忘れること、暇な時間を利用すること――――

――――
M・キケロ

ネリアと晚餐

「おい持ってきたぞ」

「おおー！来たですか！とつとそこに座るです！」

ツインテがバンバンと自分の隣を叩いて座る様に促してくる。
月をバックにしてみると中々シユールだ、月を叩いているように見えるから。

銀髪が月の光によく映えて、一瞬かぐや姫なんて言葉が思い浮かんだ。

「酒酒酒酒酒〜♪」

言ってることはそこらの飲兵衛な親父と変わりなかったが。

「ほれ、今日はエビチリを再現してみたぞ」

「エビチリ？なんですかそれ？」

「まあ、食ってみろよ」

「言われずともです！」

俺が手渡した皿をひったくり、旨そうに口に頬張ってゆくツインテ。その姿はとも俺の一つ下とは思えないほど子供っぽく見えた。

ま、俺が16だから当然っちゃ当然だが。

さて、何故前回の最悪の出会いから俺達が仲良く飯を食ってるかというのだ。

ある日俺がふと窓を見ると、何やら向かい側の屋根に奇妙なツインテールがすげー悔しそうに俺とルカ子を監視していた。

夜になってもその気配が消えないので、いい加減ブチ切れた俺がその屋根に向かって出来上がったばかりの身体強化で一っ飛び、ツインテに事情を吐かせた。

どうやら俺がルカ子に余計なことをしないか有給貰って監視していたようだ、暇なこって。

そしてその監視用装備をみると、いくつかの酒におつまみとカップラーメンっぽい何かという不健康極まりないラインナップ。

仕方なく俺が厨房借りて料理を作って持って行ってやったら、最初は渋っていたものの一口食べればはいこの通り大喜びで頬張る始末。そんな訳でその日から監視者気取りのツインテに毎日料理を持って行ってやることになった訳だ。

代わりに俺も酒を飲まして貰っているので、要は体の良い晚餐の理

由作りだ。

俺も妹もザルなので、結構楽しみながら飲める。

未成年だが、バイトの先輩とかに付き合わされたりした経験が役に立ったようだ。

「んー！ピリツとした味わいにプリッとした食感！やるじゃねーですか！」

「そらどーも」

バシバシと俺の背中を叩くツインテ、こいつ絡み酒だからめんどくせえんだよな。

月を眺めつつツインテと晩酌、正直微妙と言わざる得ない。

これがクネールさんとかだったらもうちょっと燃えるんだが。

ルカ子？なんかあいつそういう対象にならないんだよね、あの後もなんか会話に詰まるし。

で、ツインテだが、こいつこの年で女捨て過ぎだろってくらいだし。しない。

「くはーっ！この為に生きてるなあーです！」

こんな感じで。

確かにうまいけどさ。

俺は酒も食事も静かに食べる派なんだよ。

絡み酒超うぜえよ。

見てる分は楽しいけど。

「お前そんな恰好ルカ子に見られたらどうするんだよ」

「今の時間帯で起きてるのはお前くらいです。つたく、私の身にもなれってんです」

「知るか」

俺は確かにエロゲとかの為に寝る間も惜しんでたから某借金執事如く睡眠時間でも、今、つまり深夜でも起きてても大丈夫だけどさ。こいつの気合いの入れ方には引く。引くけど面白い奴だから付き合う。ちょっとルカ子とギクシャクしていたので、こういう気を使わない異性は俺にとって希少だしな。

「パシヤツとな☆」

「うにゃ!?!」

「んふふ」

「ちょ、今何したです!?!」

「んゝ何かなゝ。あれれゝこんなところに酒に目のくらんだきさな
い女が写ってるぞおゝ（C.V. コナンくん）」

「んなっ!?!」

こんな感じでからかうとメツチャ楽しい。

「ぐっ……どうしたいんです……」

「んん、そうだなあ、どうして貰おうかね？」

「ま、まさか下着を!？」

「てめえの下着とか誰得だったの、俺は好みはクネール姐さんだっ
つってんだろ」

俺とこの世界に来ていたスマホに着いた紐を指に掛けてクルクル回す。

同時にニヤニヤ、声真似でC.V. コナン君。

これでムカつかない奴はいない。

最近コナン君の子供っぽくない演技にはイライラさせられるからな。
ツインテもブルブルと俯きながら拳を握っていた。

「ねえねえ、どんな気持ち？　こんな間抜け面を撮られてルカ子に見せつけられるのってどんな気持ち？」

「つ！！！！！！！！！
がっ・・・ががががが
がつ！！！」

正直、この後良くボコられるけど面白いっす。

「どうりゃあああああああああああああああああああああ
！」

「っ！これしかないか！」

俺は目を見開いた。

「どうりゃあああああああああああああああああああああ
！」

あのクソ弟子の謎の機械が屋根から落ちて宙を舞うのが見え、私は躊躇わずにその身を投げ出し機械を掴みとった。それと同時に身体を包む浮遊感。

(あ、やっちゃった)

身体は女の子の自分が自ら言うときい落ち込むのだが、これなら神とも戦えると自負できるくらい丈夫だ。

だけどこんな風は無茶をすると、いつもルカ様が泣いてくれた。ルカ様を心配させちゃ駄目なのに。

ルカ様に嫌われちゃったら私は生きていけないのに。なのに、また怒られてしまう。

身体の浮遊感は徐々に地面への落下へと変わっていくのが分かる。そしてそれを自分ではどうしようもできないのも。

身体の丈夫さは神様級だが、結局神ならざる身の私は、空を飛ぶこともできないのだ。

また、ルカ様に泣かれちゃう。

嫌なのに、そんなことをさせちゃう自分も嫌なのに。

私はどうして繰り返してしまうんだろう。

ルカ様の為にやっているはずなのに、行動がいつもから回ってしまふ。

あのクソ弟子にしたってそうだ。

あいつを排除しようとしたら、ルカ様にとっても怒られてしまった。

あいつが救世主なのはわかる。

二重にも施された封印の強さを見れば一目瞭然だ。

だけど、私だってできるのに、今のあいつより役に立つのに。そのことが許せなかった。

だから姫様からあいつの魔法戦闘を鍛えて欲しいと言われた時チャンスだと思った。
これかっこつけければ、あいつをボコボコにして少しくらいは気も張れると思ったから。
なのにあいつは、

「おい、大丈夫かよ」

ムカつく程に善人だった。

あぶねえあぶねえ。

もう少しで落ちるとこだった。

にしても身体強化のバリエーションには基本とはいえバカにできない物があるな、やっぱ。

俺は今のところ身体強化しかまともに使えた試しが無いのだが、ルカ子曰く『才能がありません』らしい。

ひでえ。

それでもなんとか落下寸前のツインテの腰を掴んで足の指で屋根を挟みこんだ。

うん、これも結構ギリギリ、いやキツイ。

やっぱ俺じゃこれが限界だよな、足の腱がメツチャブルブルしてる。どうしようか。

「なんで・・・」

「あん？」

「なんでお前は・・・」

なんかツインテが話しかけてくる。

ごめん、それ長くなりそうですか？

自分で早く上がってくれないとキツイんだけど。

「なんでお前が救世主なんです？」

「しらねーよ」

あ、やべ、つい本音が。
ま、いっか。

「救世主だからってルカ様とイチャイチャしていい訳ではないです
！」

「え、俺ルカ子とイチャイチャしてたの？」

「えっ？」

「えっ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

あ、臆がそろそろ限界。

「あれをイチャイチャと言わずになんというですか！」

「いや、俺正直女の子に苦手だし。青春とかしたことないし」

「ルカ様もなんか満更でも無いしです！」

「恋愛とか解らん。初恋とかしたことないから、多分ルカ子も違う
と思うなあ」

「はっ？ ふざけてるです？」

「ふざけてねーよ。そんな風に考えていつも思い出すのはさ……」

……母ちゃん、だよな。

「……」

「だから、何黙ってんだよ。お前がんな気にするこっちゃんえだろ」

「……」

「あ、それとさあ」

「……なんです？」

「ごめんなさい」

「へっ？」

足限界。

ついに限界の訪れた俺の指が屋根を離してしまった。
そして当然の如く落下していく俺とツインテ。

[illegible][illegible]

因みかなり高い、10メートルはあると思う。

身体強化してるとはいえ俺の練度じや重傷間違いなしのレベルだな。スマホも完全粉碎かな？

もったいねー。

「ちよ、おま、もうちよつとがんばれなかつたです?！」

「うっせえよ、お前がべちゃくちや喋らずとつとと屋根に上がつてればこんなことには・・・！」

落下しているにも関わらず空中で舌戦を繰り広げる俺とツインテ。

結構余裕である。

「ま、慌てなくても私は落下しても全然大丈夫なんですけど」

「大丈夫ってあれだろ？ 周囲被害が半端ねえじゃねえか」

つかもう地面なんだけど、くそつ、こいつを下敷きにする時間がな
い！

なんとか着地するしかないか。

そう思って身体強化を今できる限界まで強度を上げた時だった。
目の前に魔方阵ができあがった。

「っ!？」

「なんです!？」

空中では身動きがとれず、魔方阵への激突は止められない。
せめてもの防御に腕を交差した時だった。

ボヨン

そんな気の抜ける感じで空中に跳ね返された。
そのまま屋根まで跳び上がりなんとか着地、事なきを得た。
急ぎ地面を見ると、あの魔方阵は既に消え去っていた。

「? 一体何だったんだありゃあ」

「まったくです。ま、助かったからよしとします」

「そりゃそうか」

「それで、これはどうするです?」

掲げたツインテの手には俺のスマホ。

「それは破壊するなりなんなりでいいわ」

「えっ？」

「えっ」

「・・・・・・は？ いや、これ大事なものじゃないですか？」

「いや、俺が悪かったし、悪ふざけが過ぎたわ。すまん」

悪いことした時はちゃんと謝らんな。

ギリギリまで引っ張るけどな。

「・・・・・・」

「お、酒余ってんぞ。どうするよ」

「・・・・・・はあ、悩んでた自分が馬鹿みたいです」

「そうそう、悩むと白髪が増えるらしいぜ」

「銀髪だから関係ねーです」

「そらそうか」

そんな宵的一幕。

おまけ

「まったく、また無茶して。私が魔方陣書かなきゃどうなったと思ってるんですか。また2人で飲みだすし。あ、またネリアちゃんが絡んでるます。むむむむ……、何故か苛立ちます」

向かいの窓から屋根で晩酌しているバカ共を監視している魔導管理官より。

短編集的なものを突然やりたくなったんだ（後書き）

結構長く書けたな。

六話 強く成る過程は全て飛ばします（前書き）

だつてめんどくさいんだもん

六話 強く成る過程は全て飛ばします

「シッ！」

「はぁ！」

「隙ありだな」

「これをこうしてあれをこうしてああしてこう！」

「シイイイイイイイイイイイイイイイイイット！！3対1なんて無理だぁ！」

「これくらいで根を上げてんじゃねーです！」

「ざけんなツインテ！てめえら最近ガチでやるじゃねえかよ！」

「リミッターは外してないからセーフだ」

「そりゃないぜクルーネ姐さん！」

「これはどうですかね？」

「火柱！？ルカ子貴様殺す気か！？」

「だって避けられるんですもの」

「避けなきゃ死ぬだろアレ！」

「最初の頃は直撃して本当に死にかけていたのに、随分と持つようになったものだなぁ」

「なぁに感慨深そうに回想しながらハルバート振り回してるんすか！？」

「いいからとっとし……避けるです！」

「死ねって言おうとしたよね！今死ねって言おうとしたよね！？」

「これはダメですかね？」

「いやぁああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

「結構余裕だよなあいっ」

自分が行動したこと全ては取るに足りないことかもしれない。しかし、行動したというそのことが重要なのである。――――

――ガンディー――

冒頭からも解ったと思うが、俺は訓練中だった。

だった、というのは、ツインテの拳が俺の顔面に突き刺さっているからだ。

身体のダメージは限界、つまりこれで試合終了である。

バカアン！

風船が破裂したような派手な音と共に俺の身体が殴り飛ばされた。

散々ボコボコにされてきたため、身体に支障がでるような痛みは無い。

うまく跳んで衝撃も減らせたし、受け身もなんとか取れた。

しばらくすれば回復できるだろうが戦闘は今日はもう無理。

あれから魔術の練習がてら、ルカ子からペタペタ回復魔方阵を貼って貰えなくなった。

なので痛みでばやける頭で思考しながら、回復術式のイメージを固めて行く。

前にルカ子に習ったのだが、魔法とは自然界におけるマナを活用する技術の総称で、学問としては大きく二つに分かれるらしい。

まず俺が身体に回復を促している魔術。

己の身体を媒介とし、内に秘めたマナと大気中のマナとを操る術。

魔術を使う為には強烈なイメージと才能、魔との繋がり必要な為、モンスター被害などが少ない国や地域では使える人が少ないそうだ。魔術を言い現わすなら、個人使用の格闘術と言ったところだろうか。次にルカ子が主に使う魔導だ。

これは人工的に創りだした術式回路を使って、間接的に魔法を行う

導き。

魔方阵と呼ばれる機関を創り、そこにマナを込める事で、科学的に誰でも魔法を使う事が出来る方法。

ルカ子の言っていた魔法と科学が合体した姿だ。

言うなれば、魔導師は魔方阵を創る職人だろうか。

他にもマナを活用する術は全て魔法と呼ばれるのだが、おおまかにはこの二つが一番多いらしい。

「お疲れさまでしたクトウさん」

「おう、お疲れ」

ルカ子が寝転がってる俺の隣りに現れた。

膝を着き、土に汚れるのにも構っていないようだ。

こいつ、やっぱ調子が狂うというかなんとか。

「うん、大分良くなったな。2か月前が嘘のようだよ」

「あー・・・もうそんな経ってるんすか」

この世界に来てもう2ヶ月。

これだけ経てば、向こうの方は一体どうなっているだろうか。

妹は、一体どうしているのか。

覚悟を決めた癖に、今さらながらホームシックにかかりそうな気分だぜ。

「なに湿っぽい顔してんですこの変態」

こいつが居なけりやな。

実際一番俺が接しやすい異性つつたらこいつだ。

「黙れ、そして腐れ」

「んな状態で悪態疲れても悔しくもなんともないです」

なんとも腹立たしいことに、奴はわざわざ屈んで俺のほっぺを突いてきやがった。

これがクネール姐さんとかだったらわくわくなのに、目の前のクソツインテはとても意地悪くニヤニヤと笑っている、最悪だ。

「ふう、我々相手に一人で10分か、破格だな」

「逃げるだけなんです」

「それでもだよ」

うう、訓練中褒めてくれるのはクネール姐さんだけだぜ。
結構年いってるとか言ってごめんなさい。

「さてクトウ、そのままでもいいから聞け」

「え、はい」

なんだろ突然。

いつもは立つまで回復してから批評なんだが。

「で、どう思う？ 私は及第点だと思うが」

「そうですね、この少なくともそうそうは後れをとらないでしょう」

「……ムカつきますが、さっき一撃当たっちゃいましたからね。合格にしないとやるです」

あれ、なんだろう。

みんな俺の事褒めてる？

いつもは『お前後ろ向きになると動きが悪くなるんだから攻める攻めろ！』とか、『魔術は己のイメージを完成させなければ十分な存在を持ちません。だから死んでも完成させてください』とか、『魔術師名乗りたいなら周りと自分のマナを空気を吸うようにコントロールするです！ ああもう、そればっか意識してるから足が止まるんですこのグズ！』とかばっかだったのに。

やばい、ちょっと泣きそう。

でも合格とか及第点とか一体何の話よ。

ルックス？

肉つき？

それとも俺のケツ穴の緩さの改善は……されてないな。

未だにお腹攻撃されるときどき漏らすもんな。

しかも結局魔術も身体強化以外まともに使用できなかったし、・・・
・・・マジで才能ねえ。

まだ救いなのは俺が救世主としての魔力の量の多さと、身体強化の
バリエーションを全て教えてくれるだけの師がいたということだろ
うか。

これが無かったら完全に俺落ちこぼれたったな。

・・・泣けるぜ。

そんな俺が合格とは一体何のことだろうか、ホントに。

「実は訓練を終えられるかどうかの試験を受けられるかどうかテス
トしてたんです」

「マジで?」

「はい、結果は見事合格ですよ」

「・・・マジで?」

それなら、今までやってきたことは無駄じゃなかったのだというこ
とか。

俺は、また一步ヒーローに近づけるといふ事なのか。

・・・笑ってない、俺は笑ってないぞ。

「だが、勘違いするなよ?」

「ひよ?」

「もしこれに合格できなければ」

「さらに厳しい地獄くんれんが待っているという事を忘れないことです！」

ああ、そうか。

俺はもう、強くなるとか、まだまだ弱いとか、そういう環境で訓練してた訳じゃなかったな・・・。

こいつらもうホント容赦なく俺の劣等感ごとボコボコにして鍛え上げてくれた。

ツインテは別だけど、他二人にはもうなんか逆らう気がしない。

おかげ身体と逃げ足は強くなったと自負してるが、正直魔術とかは魔法関連は微妙だな。

今まで魔法の環境が無い場所から来た奴がイメージ固めろって言われてそうそうできることではない。

文字通り、常識という垣根が違う。

俺はこれをまずブチ壊さなければならなかった。

ちよっと人間的に壊れてると思っていたが、さらに壊れた。

このことに関しての説明はルカ子から説明されていたのだが、今さらビビることでもないし、めだかボックスでも人間は互いに洗脳し合ってるようなものだっつってたからそこまで抵抗も恐怖も無かった。

あるいは既に壊れ始めていたのだろうか。

ま、別にいいけどね。

この世界の常識に染まってしまっただけで永住するにしても、時々帰るくらいはできるだろうし。

魔導の方はなあゝ。

まだ字が読めないから魔方陣すら描けない。

ここは文化の違いが立ちはだかって来た。

俺の英語の成績とかはお世辞にもいいとは言えない。

そういえばなんで文字は分かんないのに会話はできるのだろうか？
.....ファンタジーでそれ考えたら終わりだな、やめようやめよう。

にしてもイイ笑顔だよな、お前ら。

ルカ子、お前がそこまで嬉しそうな笑顔初めて見たぞ。

「試験内容は明日の朝に姫様が謁見の間にて伝えるそうなので、今日はこれで終わりです」

「マジで、勉強も？」

「ええ」

それは嬉しい、身体を休める時間ができるなんていつ振りだろうか。朝から昼まで訓練、昼から夜まで勉強という生活をしてたからな。時々モンスターの駆逐とかに参加してたけど、後方で見学させられてばっかだった。

なので純粋な休みというのはこれが初めてと喋っている。

ならば急いでベッドで寝たい。

身体を全力で休めたい。

うわ、一度気を抜くとドツと疲れてきたぞ。

「んじゃ、もう行っていい？」

「ええ、いいですよ。ゆっくり休んでください」

「やった」

フラフラと立ち上がる。

なんとか歩く程度は回復したようだ、これなら一人で部屋に戻るだろう。

これ以上話すのも億劫になってきたので、歩きながら手を振ってその場から離れた。

クネール（以下ク）「で、どうおもう？あいつ」

ルカトエーゼ（以下ル）「ええ、身体の方はあの年代の人としては完成に近いと思いますよ」

ク「さんざん動き回らせたから当然だな。そこはいいんだが、問題は持って別だろ、ネリア？」

ネリア（以下ネ）「・・・正直氣にくわないですが、です」

ク「あいつは正にセンスの塊だよ、思い付きが足付けて歩いてるといつてもいいが、あいつの成長速度は目を見張るものがある。型に嵌れば伸びるだろうな」

ル「魔術の適性は低いですけど、身体強化という術への理解の早さとバリエーションへの考案は我々にはない発想がありますからね。文字はなかなか覚えられないですけど」

ネ「マナの概念を経った着込んでる最中はどうなることかと思ったですが、意外とすんなり受け入れてものに始めてますです」

ク「中々おもしろい出来上がりになったな」

ル「あるいは、とんでもない物を目覚めさせてしまったか」

ネ「そういやクネールさんは救世主の奴と闘ったんです？どうでしたです」

ク「・・・ああ、あれは反則だなと思ったよ。もしあのままで鍛えていれば、必ずめんどくさいことになるのは明白だったよ」

ネ「どんだけです!？」

ル「封印の方も嚴重に施してありますから、そうそうは破れないと思うんですけど、何せ救世主ですからね。世界の意志をどこまで抑えられるか」

ク「無事、合格してくれるといいんだがな。そういえばルカトエーゼ、試験の内容とは一体何だ。今のあいっなら余程なら遅れは取らんじゃないかと思うが」

ル「うーん、姫様も教えてくれなかったんですよ。明日教えるからって」

ネ「……それ、なんか怪しくないです?」

ル「……」

ク「……」

ネ「……」

ク「……死ななければいいな」

ル「……いざとなったら私が止めます」

ネ「……同情するところでしょうかです」

六話 強く成る過程は全て飛ばします（後書き）

感想がほしいです！

あとお気に入りあざーす

七話 戦地だって、やばくねえ？

「朝、四時だぜ……」

「我慢してください」

「ねむっ……」

「我慢してくださいってば」

「いやだってねみーもん、まだ深夜だろ」

「私なんて突然書類作業手伝わされて寝てないんですよ」

「お前の睡眠時間がどうかしらねーよ、俺はねみーよ」

「とにかく、謁見の間での不敬ってホントはメチャクチャ罪になるんですからね？この前みたいなのが許されたのだってクトウさんが救世主だからですよ？」

「罪深い男だぜ」

「ほんとにお願いしますよ、主に私の胃の為に」

「わーたわーた、今回は大人しくしてるよしてますでしょ」

「……本当にですね？」

「『beyond the bounds』歌ったらダメかな？」

「だーかーらー」

他人を負かすってのはそんなむずかしい事じゃないんだ・・・もつとも『むずかしい事』は！いいかい！もつとも『むずかしい事』は！『自分を乗り越える事』さ！――――岸部

露伴

「んー・・・あーう・・・？」

「姫様！起きてください姫様！」

ども、間部功刀です。

今試験内容を聞きに姫様の居るあの忌まわしき記憶が残る謁見の間にやってきたとです。

そしたら姫様含め大臣っぱい奴らまで全員コクコクと眠りこけっちゃってます。

一体何が起こったのかわからんとです。

クトウです・・・クトウです・・・。

ネタはこれくらいでいいか、さて、ホントに何が起こったし。

寝てない大臣っぽい奴も居るが、必死に目を見開いていることから
余程眠いんだろう。

この国つてもしかしてブラック？

結構、いやかなり心配になって来た。

どうなってしまうんだろうか、俺の試験は。

この場合ってかなりヤバそうな案件を押し付けられるよな、漫画と
かだと。

リアルモンスターハンターくらいは覚悟してたけどさ、これ以上や
ばい案件って。

「あーおにいちゃん」

「何この子かわいい」

お年頃の女の子って感じの寝ぼけ姫様。

思わず鼻を押さええそうになった、中々やるじゃねえっすか。

「しけえんのほうはねえーじちゅはーぐりゅむどりあのほうとこ
どーでおねがいしてやいのー」

「うん、すっげえかわいいんだけど言ってることわかんねえ」

「!?!? どういうことですか姫様!」

「あ、解るんだ。ルカ子すげえ」

おい、読みにくい文章で読者離れとかよくあるんだから！
なんとかしろよ作者！

「グリムリバーの軍勢が北西の我が国とグルムドリアの合間の山地からやってきてるって向こうから連絡があったのよ」※実際はもっと眠そうです

「グリムリバーが！？」

「そう、グルムドリアのバカ共も遂に救世主を召喚したって聞くし、救援要請もでちゃってるから放っておけないでしょう？だからここ3日くらいは徹夜で特攻作業だったんだけど、もうちょっとかかりそうなのよね」※実際はもっと眠そうです

「だから、クトウさんに足止めをと・・・？」

「そういうこと」※実際はもっと眠そうです

「ならせめて私にも同行を・・・！」

「それは無理ね。私たちもう限界だし、貴方には軍編成の最終調整とかやって貰わないとね。なんせ初めての遭遇なんだし、極めて努めて承って慎重に微細に入り浸るまで、しつかりやつとかなきやいけないんだからね」※実際はもっと眠そうです

「くっ・・・！」

読者の方々、君達は恵まれてるな。

文章変わったろ？読みやすくなったろ？

でもこっちじゃ聞きとれねえよ。なんて言っただのかまったくわかんねえよ。

俺の話なのに俺置いてけぼりだよ。

助けてくれよ、ストレッチマン……。

ま、結局どうしたってやることは決定なんだろうからやるしかないか。

えっと、グリムリバー……聞いた事ある。これぶちのめせってか？おけおけ、任せとけ。

とりあえず未だに議論し合っているルカ子とおネム姫様に話しかけるとしよう。

「まあ、そんな焦んなよ。大丈夫大丈夫、お前らに鍛えられた頑丈さは伊達じゃねえから」

「そういう問題じゃありません、死ぬかも知れないですよ!？」

え、マジすか。

いきなり恐くなってきたんですけど。

なあんて思うと思ったか。

あめえよ、ルカ子。

この二ヶ月お前俺の何を見てきたんだ？

「今さらだろ、それ。そんなもんで一々ビビるかよ」

「でもっ」

「いいか、ルカ子」

ガシッとルカ子の肩を掴んで顔をグイッと近づける。

「強くなる為に、お前にもクネール姐さんにもツインテにも手伝わってもらった。けどな、最後の一步はてめえで歩かなきゃ意味が無いんだ。偶然でも援助でもましてや救済でもなく、ただ純粹に俺の意地と意志でな」

「・・・・・・・・」

「だから、行ってくるわ。早く追ってこいよ師匠」

「！本当に・・・気を付けてくださいね？」

「ああ、解ってるよ」

「ふふ、まるで恋人みたいね」※実際はもっと眠そうです

良いシーンで茶々を入れる姫様。

ルカ子真っ赤になって俺を突き飛ばす。

「ちちちちちち違いますよ！」

「そうだそうだ！俺は女に対して『オ○ンコ舐めてえ』とか思ったりするけどルカ子には全然そういうのがわからないし！それに恋人って近くに居るとドキドキしたりするんだろ！俺はなんかルカ子と居ると胸が苦しくてギューってなるぞ！こんなんが恋人な訳ねーだろうが！」

「へあっ？」

「あん？」

何故かルカ子から疑問符をいただく。

あれ、俺なんかおかしいこと言った？

「イチャイチャしてるとこ悪いんだけど、ホント時間無いからこれから出発ねー」※実際はもっと眠そうです

「えっ？」

この前飲みに行った衛兵さんがガシツと俺の両脇を掴む。

この人モンスター殲滅しに行った時の乱戦で助け合って仲良くなったんだけど、なんでも実験中の反魔術結界使用の鎧のテストパイロットらしく、こいつに掴まれたら魔術を発動できなくなるというチート。

名前ブライアン、イケメンだ。

「おい、ブライアン。親友を死地に送り込むとはどういうことだ、せめて貴様秘蔵の酒とか土産に渡せよ」

「すまん、これも仕事だ。秘蔵の酒は今度帰って来た時に用意してやるよ」

「包装だって大声で叫ぶぞこの野郎」

「だからごめんって、がんばって？今回マジでやばいんだって」

「・・・・・・・・ちっ、解ったよ」

軽口に付き合わないくらい切迫してるのか、彼の表情にはあまり余裕が無かった。

「一体何が起こってるのやら・・・・・・・・」

覚悟は既に完了しているが。

「無人の馬車か・・・すげえ」

要人用の魔導馬車による隣国グルムドリアへの直行便。

これ揺れも少なくてしかも無人。

科学技術でもかなり手のかかる機構を、いとも容易く可能にしてしまふ魔法の力に感嘆する。

すごい、これはすごい。

楽しいなこれ。

子供みたいにそわそわと馬車を移動し、窓を覗いたり、ソファを跳ねまわったりした。

昼には着くらしいので、この国意外とでかいんだな小国じゃなかったのかと考えてふけったりと暇を潰す。

それでもその内一人の車内はかなり暇なので眠ってしまった。

そして事件は俺が起きた時に起こった。

「・・・なんだこれ」

馬車の窓にはべっとり貼り付いた何かの液体。

とりあえずナンパ野郎に身体強化で長距離ドロップキック。

「すちゃちっ！」

「でゅはあっ！」

カッコよく着地して、髪をかき上げながら少女に向き直る俺。

「フッ、大丈夫ですかマドワアゼルおわぁッ!？」

突然胸に衝撃が走り、思わずひっくり返る俺。

痛みを我慢しつつ良く見れば、少女が俺に抱きついているではないか。

しかし俺は別の衝撃によって胸に伝わる柔らかい感触とか、太ももの柔らかい感触を気にすることができなかった。

「やっぱり・・・やっぱり・・・お兄ちゃんはヒーローだよ・・・」

「・・・美衣か？」

なぜならその娘は俺の妹だったからだ。

え、何この超展開？

「將軍！あれをご覧ください！救援の烽火です！」

「……まったく、こんな時に面倒な。解った、私が行って終わらせる」

喚か。

そこまで気付いたが今さら引きさがっても許してくれなさそうだったので、俺は冷や汗かきながら偉い奴が来てくれるまで暴れまわることにした。

両手剣を避け、振り切って一瞬力の抜けた顎に掌底を叩き込んだ。

あ、またやっちゃった。

ていうかこいつら練度は悪くないんだけど焦って連携できてないのがなあ・・・、実践不足だなやっぱ。

魔術もそんなツインテみてえに人間やめてないし、あれに比べりゃ見える見える。

振り上げた瞬間に抜き手を三回叩き込んでやったぜ。

あ、またやっちゃった。

そんなことを奴等がもう数人と減るくらい繰り返した時だった。

「そこまでにして貰おうか」

なんかすごい装飾された鎧を着込んだイケメンが現れた。
漸く偉い人が来たか。

「貴様が何者かはあえて問うまいよ。今の我々には時間が無いんでな、しばらく独房で眠って貰うぞ」

「あ？それが他国の救世主に対する態度かこの野郎」

「・・・・・・・・・・なに？」

偉い人が少し戸惑ったように抜きかけていた剣を停める。

「だから、俺、救世主、よろしく」

「・・・・・・・・・・いやいやいや」

うん、まあそうだよな。

自分の国の、・・・・・・・・救世主、を奪取する為に暴れ回ってた奴が他国の救世主とか思わんな。

俺もそう思う。

「何故このようなことを？」

「こいつ、俺の妹な訳よ」

「なんと・・・・・・・・、不思議なこともあったものだ」

「で、こいつが男にセクハラを受けているのを見て思わずブチ切れちゃったと」

「・・・・・・・・・・なるほどな。いや、失礼した」

剣を鞘に戻し、こちらに頭を下げる偉い人。
それに合わせて俺も頭を下げた。

「んにゃ、俺もすいませんでした」

「何故謝るのだ？」

「いや、俺もちよつと状況にそぐわない事しちまつたし」

「……不思議な奴だ。私はグラハム・イエル・グウェスルだ、貴国の助力を有り難く思う」

「ああ、よろしく頼むわ」

ガシツと互いに握手する。

よし、これでケジメだな。

うんうん、と一人納得している時だった。

ガシッ！

うん？

なんだ、美衣、なんで俺の頭を握ってるい ええええええええええ
ええええええええええええええええええええええ！！？

「ちよつと、バカ兄貴。一体どういふ事なのか説明しなさいよ」

「ああああああああ！！？だからお前あれだよ！戦争戦争！多分そんな感じ！」

「はあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ！？」

「いぎやあああああああああああああああああああああ
あああああ！！？」

途轍もない握力で頭蓋骨を握り潰されるのでは思うアイアンクロー。

「一体どうなってんのよおー!!」

「うぐおおおおおおおおおおおおお!!!」

昼下がりの真つ青な空に、妹の叫びと俺の悲鳴が響き渡った。

七話 戦地だって、やばくねえ？ (後書き)

こんな感じで投稿して行きます。

八話 戦争という名の地獄

「編隊組んでないつつつても壮観だなこりゃ」

「神の眷属か・・・」

「あれが神って面かよ。どうみても悪魔的だぞ」

「悪魔も元々神の眷族だったんだよ、この世界ではな」

「へー、てかこれだけ広い大陸だったら宗教も分かれそうなもんだが」

「文化にもそこまで違いは無いしな、流石に地域差はあるが」

「へー。っと、そろそろか」

「何か言い残すことは？」

「んにゃ、何か言い訳っぽくなりそうだし。そーさな、腹上死というものをしてみたかったな、と」

「ぶはWWWWW」

「男なら誰でも思うよな？」

「なるほど、どれ、俺も」

「うん？」

「一度、ア〇ルセックスというものをやってみたかったな、と」

「ぐは W W W W W W W W」

「どーよどーよ W W W W W W」

「最高だぜ相棒」

「団体様も歓声を上げてるぞ」

「そっか、なら」

「「いくらでもアンコール受け付けてやんぞゴラァ！」」

不幸を治す薬は、ただもう希望よりほかにない。
———
ウィリアム・シェクスピア
———

冒頭より少々遡って。

「は？まって、もっかい言って？」

「間違いは無い。これが現状だ」

「…………マジで？」

俺は愕然とした。

え、マジで？俺そんなヤバいところに居んの？

「もう一度確認の為に伝えるぞ。現在我々が駐留している街から北西より大型モンスターの群体がこちらに向かってきていることが大陸対策支部より報告された。数は約500と、大型モンスターの群体としては異常な集まりを見せた為グリムリバーのモンスターと断定。我々の戦力は200、殆どが実戦経験のない貴族のお坊ちゃん共だ」

頭が痛いとしても言うように椅子に座り込むグラハム將軍。

俺の方がいてえよ。

なんで報告と情報は正確なのに200しか引っ張ってこねえんだよ。

「上がバカでな、首都から軍を動かすのを嫌ったのだ。それで私に避難支援任務とかこってあわよくば死んでくれという指令を出してきやがった。くっそたれ」

「しらねーよ、そこ無理でも持ってこいよ」

「それでも精一杯なんだよ。表向きは避難支援だったからな」

「え、えげつねえ・・・」

こんな国俺ならグレる。

美衣をどうやってこっちに引きこんだものか・・・。

「しかも避難は最低一日かかるうえに地形は防衛に向かない平地と
きた。どう見ても詰んでる」

「ああ、そりゃ詰んでるな」

無理ゲーってレベルじゃねーぞ。

「我々だけならば、な」

「・・・ちっ、美衣はダメだ。ありゃ召喚されたばっかなんだ
ろ？なら、なんでもすっから連れて行くのだけはダメだ」

「すまん、今回はその僅かばかりの可能性にも縋りつきたい状況な
のだ」

「・・・」

「・・・・・・・・」

黙って睨みあう俺とグラハム將軍。

しかしその沈黙は話題の人物により断たれた。

「いくわ」

「っ！？てめっ、何言ってやがんだ！」

「行くわよ、私には状況はさっぱりだけど、話聞いた限りじゃ死ぬかも知れないでしょ？そこに兄貴は行くんでしょ？なら私も行くわよ」

「バカッ！お前じゃ足で纏いただけだろうが！」

「バカはどっちよ。あんまり私を舐めんじゃない。たった一人の家族が死地に行こうとしてて、それが止められないってことくらいは分かるわ。そして私は待つだけで満足する女じゃないの。足手纏いになってでも、あんたの胸倉掴んで離さない女よ」

「ぐがっ・・・・・・・・！」

くそっ、なんてこった。

こいつがこうなるとテコでもブルトーザーでも動かねえぞ。

しかも言い返せない自分が情けない。

腕力の強さなど容易く越えてくる女という存在に俺は改めて争う事

は無駄と理解する。
つええ、女マジつええ。
しかもかつこいい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・絶対後衛か後方、これ絶対」

「いいわよ」

「グラハム、これでいいか？」

「ああ・・・」

少し笑いを堪えているグラハムにワンパンくれてやった。

場所は変わって、俺が乗って来た要人用馬車の中。
作戦を移動しながら説明とかどこの特殊部隊だよ。

「今回は少数精鋭での電撃ゲリラ戦だ。この馬車の機動力を使って敵を翻弄しつつこちらに意識を向けさせ、ペルムドン近くの谷へと向かう」

「おk、了解した」

俺とグラハム將軍、そしてグラハム將軍の部下たちが馬車の屋根で胡坐を搔いていた。

総勢5人の精鋭ね……。

美衣は数に入れねえし、単純な戦力差は100対1か。

今回はルカ子たちが俺達の信号を拾って助けてくれるまで敵を引きつける時間稼ぎ策だ。

持久戦は師匠達の熱心な訓練の甲斐あってか逃げるのは得意中の得意だ、そうそう遅れは取るまい。

「いいか、魔力を無駄にするなよ。動けなくなったら死ぬと思え」

「將軍……自分は……」

「大丈夫だってデイドル、俺達ならやれるって」

「ああ、大丈夫だ」

だから火急速やかにこの疎外感を何とかしてほしいものだ。

確かに俺は新参でしかも別勢力というチームワークを乱しかねない不安定要素だが、今回の作戦で同じ土の肥やしと成るやもしれん仲なのだからもう少し会話してくれないか。

まともに喋ってるのってグラハム將軍だけだぞ。

いや、仕事用の口調ならバイトでできるけどさ。

ここ最近訓練ばっかで軍とか男と話す機会が極端に少なくて何話していいか分かんね。

今も拳を握ったり離したりするふりをしてメツチャ聞き耳立ててる。

よし、俺もタイミングを見て参加を・・・！

「みんな、ありがとう、この戦い必ず生き残ろうぜ！」

「良く言った！」

「調子のいい奴だぜ！」

「帰ったら酒奢れよ！」

「え？」

「え？」

「え？」

「ん？」

励まし合っていた時の和気藹々とした空気が霧散し、部下の方々一斉に俺の方を見る。

それに笑顔で答える俺。

「あ、そういえば救世主様がいるんでしたね」

「全然しゃべらないから忘れてたぜ！」

「そうだね」

「よし、お前ら現地までフルマラソンな」

「敵影確認！距離約2000！」

「遂に来たか！」

「闘いの狼煙をあげろい！ヒーハー！」

こいつらの事は三バカと呼ぶことにしよう。

三バカのテンションが高くてウザい。

なんか逆に冷静になって来た。

覚悟は決まってたけど、実践はやっぱ緊張度が違うわ。

しかしグラハム將軍流石だな、さっきから目を瞑って精神統一でもしてるのかピクリもしない。

「將軍どうしますか！？」

「・・・・・・」

スクッと立ち上がって馬車の先頭で剣を引き抜くグラハム將軍。

「開戦は私が飾ろう。よく見ておけよ！」

「流石は將軍！」

「かっこいいっす！」

「そこに痺れる憧れるう！」

「おい最後の」

何故貴様がそれを知っている。

その疑問の言葉は突然のマナの異常な収束によって遮られた。

どうやらグラハム将軍が魔術の基本にして奥義が一つ、収束魔法弾を造るらしい。

将軍と言われているだけあり、その収束の仕方はルカ子の魔方陣にも見劣りしない完璧な出来だった。

少なくとも俺にはこんな芸当無理だ。

だってピンポン大の収束魔法弾すら造れなかったのだから、はあ・・・

属性はルカ子と同じ火。

階級は星の輝き級スターライトと言ったところか。

・・・・・バカじゃねえの？って言うくらい的大型魔法弾だった。

やがて収束は圧縮へと変わり、星の光が地へと降りたつ。

「逝け――――

――――
踏み砕く脚」
ティタン・ノック

夕焼けと錯覚するほどの光が放たれ、おそらく敵の居る場所へと着弾した。

それと同時に遙か先の場所から巨大な爆発が響いてきた。

臓腑を震わすその轟音は、この絶望的な闘いの中で希望とも言える光を放っていた、が。

「すまん、今の俺の魔力打ち止め」

『はあああああああああああああああああああああああああああああああ！！？』

どうやらあれは絶望へのカウントダウンの点滅だったようだ。

「ちょっ、持久戦だって自分で言っというて何してんのあんた！？」

「いいだろう！？何が電撃ゲリラ戦だよ！てめえら似非クリエイターの戦略戦術ごときが敵に通用すると思ってるのかよ！街の配置とか谷の位置とかどうなってんだよ！訳分かんねえよ！」

「バカッ！それ以上は危険だ！この作品的にも他作品的にも！」

「どうせみんな死ぬんだ！こんな詰んでる戦い作者の頭程度で切り抜けられるはずが無い！」

「グラハム將軍！ご都合主義が残ってます！」

「作者の思い通りに描かれる非現実的な展開が！」

「お前らもそこでハードルあげてやんなよ！」

ギャーギャーとうるさくなる馬車の天井。

これ以上は収拾のつかないメタが繰り広げられようとしていたその時だった。

「あ、將軍。今ので増援きたっばいです、前と後ろと左右から」

「囲まれとるやん」

もうだめぽ。

「よし、とりあえずさっきの攻撃で手薄になった前方にてめえらの全力を叩きこめ。極めて強引に突破する」

「じゃあ親父が持たせてくれた超高級攻撃魔方陣を」

「じゃあ俺も先祖代々から伝わる秘儀を」

「あ、なら俺も俺も」

「何このノリ」

もはやカオスである。

雷やら雷風やら竜巻やらに吹き飛ばされるグリムリバーモンスター、略してグリモン。

生き残った奴等の攻撃を何とか主に余力の残ってる俺がいなして突

破することに成功。

そのままグリモン達が俺達の後を追う形になった。

ぶっねえ！マジ危ねえ！

あんなサイクロップス共に囲まれて袋にされたら一瞬でミンチだぞ！
いなした手足がまだ痺れるっつーの！

「よっしゃお前ら！作者も今後の展開に頭を抱える排水の陣だ！気
合い入れて行くぞ！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！』

でもこの雰囲気嫌いじゃないかも、ダメっぽい感じが。
グルムドリアも悪い奴ばかりじゃないかもなあ。

その後は少々の小競り合いを続けながら何とかペルムドンへと続く
溪谷へと到着したが、こちらの被害も尋常ではなかった。
現在戦力になるのは俺とグラハム將軍の2人、残りは魔力切れや負
傷によって戦闘不能となったので馬車の中に放り込んだ。
死亡者がいないのが正に奇跡だった。

「さて、どうする？ 隘路なら敵の数を制限できるが逃げられなくな
るぞ」

「俺に聞くなよ」

「そうだったな」

たく、こいつの無策のせいでえらい目にあっただぜ。
楽しかったけどさ。

なんか不思議と絶望はなかった、目の前にいっぱいいたった
からな。

もしこれを狙ったのだとしたら……いやねーな。

今も冷や汗かきまくってるもの。

隘路で……時間稼ぎ、ね。

思い付く手は一つ。

でも確実に俺達の命は保証できない。

しかし最初の戦闘で結構数が減ってるし、ここまで走らされて疲れ

てる。

頭の良い指揮官とか居なくてマジでよかった。

「……………やるかやらないか、勝つか負けるか、生きるか死ぬか。」

賭け時だな。

「おい、こんなのどうよ」

「うん……………なるほど、おもしろいじゃないか」

「おい、マジで死ぬぜこれ」

「しかし、これ以上はジリ貧だしこの馬車の魔力も尽きかけだ。もとよりこんな作戦で数人助かるだけで儲け物だぞ？」

「……………付き合ってくれるか？」

「もちろんだとも」

「無茶言うなよ、さっきから俺のテンション駄々下がりだよ」

谷に響き伝わるグリモンの群進と呻き声の嫌なデュエット。

「編隊組んでないつつつても壮観だなこりゃ」

「神の眷属か・・・」

「あれが神って面かよ。どうみても悪魔的だぞ」

「悪魔も元々神の眷属だったんだよ、この世界ではな」

「へー、てかこれだけ広い大陸だったら宗教も分かれそうなもんだが」

「文化にもそこまで違いは無いしな、流石に地域差はあるが」

「へー。っと、そろそろか」

「何か言い残すことは？」

「んにゃ、何か言い訳っぽくなりそうだし。そーさな、腹上死というものをしてみたかったな、と」

「ぶはW W W W W」

「男なら誰でも思うよな？」

「なるほど、どれ、俺も」

「うん？」

「一度、ア○ルセックスというものをやってみたかったな、と」

「ぐは W W W W W W W」

「どーよどーよ W W W W W」

「最高だぜ相棒」

「団体様も歓声を上げてるぞ」

「そっか、なら」

「「いくらでもアンコール受け付けてやんぞゴラァ！」」

そんな訳で次回に続くぞゴラァ！

八話 戦争という名の地獄（後書き）

今度ともよろしくう！

九話 戦闘描写が難し過ぎて生きてるのが辛い

「ごめんな、美衣……」

「……行くぞっ!!」

「しゃあっ!」

「塞いだあれは壊されるなよ!あの馬車が頑丈と言っても限界があるからな!」

「おう、わかったっ!」

「邪魔っ!すんなあ!」

「てめえのそのでけー肉棒粗挽きにしてやんよ!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお!!」

「るおあああああああああああああああああああああああ
ああああああ!!」

「生きてるか!」

「生きてっぞ!」

「今通信魔方阵で連絡が入った!端的に言えば三時間だ!三時間で
救援だ!」

「了解！」

「しかし防いだ道の整理もあるからな！絶対気を抜くなよ！！」

「おう！」

「生きるぞお！」

「しやあああああああああああああああああああああああ
あああ!!!」

人間、志を立てるのに遅すぎるといふことはない。――――

――――
ボードウィン

埃をはらうように振るわれた大木と地面の隙間を滑り込んで避ける。
そのまま勢い殺さずに立ち上がると同時に走りだすと、ほんの一瞬
までいた場所に人間一人軽く踏み潰せる巨足が振り下ろされる。

振動に足を取られ転びそうになるのを堪えていると、頭上から大木が振り下ろされるのが陰でわかったので、転びそうになる勢いを利用して地面に吸い付くような体勢で何とか走る。

身体の着地を気にせず思いっきり飛んだ。

何とか大木の着弾までには握り付近に出来る隙間に飛び込むことが出来た。

急いで立ち上がり、地面から離れようとしている大木に飛びつく。

そのまま木偶の坊が大木を構えなおすまでしがみ付き、引き戻す運動が最高速に到達する瞬間に木偶の坊の顔に向かって跳んだ。

モンスターに感情があるかどうかは知らんが、かなり間抜けなツラして大きな顰められた目ん玉に、肘鉄を喰らわせてやった。

悲鳴を上げて仰け反りながら倒れる木偶の棒をクッションにして再び地面に降り立った。

ここまで、二分。

はつきり言うとかんなりギリギリ、二回は死にかけた。

おいおい、三時間以上とかマジで言ってるのか？

冗談じゃねーっつの。

こんなん三十分も持ったっつーの。

でもやってやるしかないのだ、ここで俺が倒れば、あの塞いだ道をあいつらは無理矢理でも通っていくだろうし。そうなりゃ美衣が危険だ。

「くそったれがあ！」

攻撃はもう狙えない。

あんな無理矢理な動きは俺の身体に負担をかける。

持久戦を主眼に置いているのに力尽きては本末転倒だ。

幸いにも俺の事を警戒しているのか、不気味な呻き声をあげながら

木偶の坊どもは俺を囲みつつも近づいては来ない。

このまま膠着状態が続いてくれると嬉しい、休憩入れないとマジでキツイ。

1、2、3、4、5、6、来たか。

ギリギリの最小限の動きを意識して、俺は散歩するように前に一歩踏み出すと、後ろから風。

6呼吸、十分だな。

次はバク転するように数メートル跳びあがると別の大木が通り過ぎる。

恐い恐い。

本気で恐い。

あんなもんが直撃したら、一溜まりも無くお終いだ。

いくら身体強化を施しているとはいえ、俺のは大魔力を一気に使いきるスーパースายア人を超えたスーパースายア人ではなく、効率化を図ったスーパースายア人2の状態なのだ。

攻撃力より機動力をとった結果だ。

着地と同時に回転するように2歩半下がる、振り下ろされる大木。

三度、たった三度の攻撃でかなりの神経を磨り減らした。

幸いツインテのような重みもスピードもあるバケモノ級の攻撃ではないが、当たれば負けという構図は中々精神的にくるものがある。

一撃の重みのプレッシャーにどこまで耐えきれぬかが鍵だ。

ルカ子たちの訓練によってメンタル面もフィジカルも比べようもない程鍛えられてる。

後は俺がミスらなければデカイのは当たらない。

横に足を大きく開いて身体を前に倒し蹴りを避ける。

急ぎ立ち上がり、振り切られた足のかかとにタックルを喰らわせ木偶の坊のバランスを大きく崩す。

質量の違いが痺れた肩から伝わり、思わず顔を顰めた。

まったく、異世界モノのチートな主人公たちはこれ以上のドラゴンとかを下位と蔑みつつ楽々と殲滅していたりするが、実際相手取ってみると種族差というものは度し難い。

クマにそこそこ鍛えた程度の人間が戦って勝てるかつーんだよ、無理だよ普通。

チート主人公は魔力（笑）が使えるからいい物の、何故か俺は全然ダメだったしよお。

何かあれだ、容量はでかいけど出口は蛇口程度みたいな感じ。

何とか一拍置けたので素早く二回程呼吸をすると、強張っていた身体の緊張が程良く解け、モチベーションが上がった。

ダッシュでその場を離脱し、再び囲いの中央へと躍り出た。倒した訳ではないのでさっきと数は変わらない。

俺では決定打に欠けるうえに持久戦で攻撃のリスクは背負えない、自然と先程の繰り返しになる。

唯一つ違うのは、先程より明らかに俺が疲れているという事だ。

誰かを護る為の戦い。

それがこれほどまでに疲れるものだとは知らなかった。

なるほど、これを背負って戦えるのか、ヒーローと言う存在は。

「おもしれえじゃねえか」

ニツと口角をねじ上げた。

そうだ、これがヒーローだ。

俺が求めた最もわかりやすい力だ。

萎えそうな気がどんどん内から湧き上がる想いに消されていく。
やってやる、やってやるよお！

「かかって来やがれてめえら！」

先程の戦いで興奮したのか、妙な唸り声をあげる木偶の坊どもに世界のフィンガー・ファツキューをくれてやった。

「はあ・・・！はあ・・・ぜえ・・・！はあああつ！」

避ける。

とにかく避け続ける。

俺に許された行動はそれだけだ。

それ以上は俺の領分を越えている。

グラハムの存在すら頭から追い出してお避ける。

おそらく、もしグラハムの死体がそこに転がっていたとしても俺のやることは変わらない。

引き付け、避ける。

ただそれだけ。

「おおおおおっ!!・・・ぜえぜえ・・・だりやあ!!!!」

しかしどれほど続けただろうか？

手足は灼熱のように熱く、頭と視界は霞みがかって来た。

限界は近い事も理解していた。

既に時間の感覚はない。

一瞬一瞬が命の削る戦いだ、神経は全て戦いに向けている。

だが、それすら危うい。

先程から攻撃が掠る様になってきた。

生傷があちこちにでき、だがそれを気にする時間も与えんと敵の攻撃が遅い来る。

先刻よりは疲れたのか勢いが衰えたものの、敵を400としても1対200の数の差だ。

元気な敵は腐るほどいる。

狭い隘路は敵が囲みに動くスペースがあるとはいえ、攻撃できるの
は一体程度、ローテーションで動けば延々と攻撃できるが、一斉に

襲い掛かってくるよりはマシだ。

動きも疲れで雑になってきた。

魔術の組も甘い。

気力だけは緩めず、敵を睨み続けた。

後方に跳んで攻撃を避けた。

カクンツ・・・！

「しまっ・・・！」

着地と同時に限界の着ていた膝の力が抜け、思わず転んでしまった。
そして頭上よりやってくる大木。

「・・・っ！！！」

右腕を盾に思いっきり歯を食いしばった。

ゴキイツー！！

「が・・・あ・・・！！！！？」

痛みから素早く頭を切り替え叩きつけられた身体のどの部分に負傷があるか集中して考えた。

(肋骨・・・5本・・・右腕・・・粉々に折れてる・・・背骨・・・大丈夫・・・内臓・・・肺と胃にダメージか・・・！)

追撃を身体を無理矢理跳ね起こして避けると、着地と同時に激痛に耐えきれず膝をつく。

「はぁ・・・！はぁ・・・！」

間違いなく重傷。

動ける傷ではない。

ならば動けるようにするだけだ。

身体強化のバリエーションが一つ、新陳代謝の向上。

ルカ子から習って訓練後に使ってきた自己治癒を高める術式を使えば、この程度の怪我なら処置可能だ。

あいつらとの訓練ならホント死の一手手前まで逝ったことあるからこの状況でも割と冷静。

問題はそんな時間が存在しないってことだ。

だが、使わないよりはマシだ。

術式を組み、発動。

しかし同時に攻撃も来る。

1、2・・・！

瞬時に術式を切り替え避ける。

2秒では内出血も治せないが、呼吸できる程度には回復。まだまだ回復とは呼べないありさまだが。

攻撃の衝撃で土埃が宙に舞う。

敵もこちらにも、一瞬だけ姿を見失う。

これ幸いと、再び回復の方へ術式を変えた時だった。

どうやら勝利の女神は俺の事がお嫌いのようだ。

目の前に大木で造られた棍棒が現れた。

「――ツ！！？」

一瞬、全ての感覚が消える。

やがて浮遊していることが分かり、それが永遠に続くような錯覚を経て、地面に叩きつけられた。

「あっ・・・！があ・・・！？」

頭を強く打ったため、視界がぼやけていて、まるで万華鏡のようだと場違いなことを思う。

そして次第に感覚が戻っていくと、両腕がうまく動かないことに気がついた。

あの一瞬でどうやら反射的に防御したらしい。

見事にご臨終なされていた。

息もなんか溺れたようにしずらい、どうやら肺に肋骨が刺さったらしい。

一つ一つ理解して行くと共に、己が生き残る可能性がもう殆どない事がわかる。

だが、心は穏やかだった。

今にも死にたいほど痛いのに、その心だけは、いつも通りの思考が働いていた。

（あの木偶の棒にもオスとかメスとかいるのかねえ）

なんというか、逆に覚悟が決まった。

こうもどうしようもない状況だと、穏やかに最後を向かい入れてもいいと思える。

訳が無かった。

（許せねえな。クソいてえじゃねえか。男はメスにして女は全員孕ませてやる）

ぐつぐつと静かに燃えたぎるマグマが、俺の心を焦がしていた。だが、その身体はもう指一つ動かさない。

（ごめんな、美衣。バカな兄ちゃんだよ）

最後の抵抗も、ゆっくり近づいてくる足音によって掻き消されていく。

（ごめんな、少女よ。俺、ヒーローになれなかったわ）

俺は、身体力を抜いて、ゆっくりと目を閉じた。

「……………ッ!」

地面を大きく弾きながら回転しつつ起き上がる。
踏み下した豪脚が地面を揺らす。

「・・・・・・・・」

半歩身体をずらした。
振り被られた大木が脇を通り過ぎて行く。

「・・・・・・・・」

不思議な感覚だった。

まるで夢を見ているような、一俺が俺を眺めているような《・・・・・・・・

見てきた未来を辿る様に、敵の攻撃を避けて行く。

軌跡は緩やか、しかし移動はキレがある。

これが重傷者と疑うような動きだった。

そして、俺はある場所を目指していた。

ゆるり、ゆるりと。

後退しながらも、その位置に辿りつく為に。

確かにその身からは血は流れ、骨は軋み、血反吐を吐いていた。
だが、踊るようなその動きは一向に止まらない。

遂に、俺は辿りつく。

この動きを持っても、これ以上身体は動かない。

動く必要も無かった。

「大丈夫ですか？クトウさん」

「ちっ、まだ生きてやがったですか」

「よう、元気そうで何よりだ」

なぜなら、今の俺をみてまったく動揺していないクソ師匠達が現れたからだ。

「おせーよ、クソ共」

ここで俺の意識は途切れた。

九話 戦闘描写が難し過ぎて生きてるのが辛い（後書き）

と思ったけど、なんか書けたので。

次回は知らない天井編。

十話 ベッドの上よりこんにちは

「コペルニクスショック!？」

「あ」

「あん?ここどこだよ」

「・・・・・・・・ペルフォニア」

「・・・・・・・・お前誰だよ」

「・・・・・・・・」

「新キャラだ、無口っ娘だ」

「・・・・・・・・」

「え、何この紙?これ読めって?」

「・・・・・・・・」

「『無口って呼ぶな!』・・・・・・・・いや無口やんお前」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・『無口じゃない、慎重と言え』。・・・・・・・・いや、ねーよ。無口以外の何物でもねーよ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・『うるさいバカ』。筆談めんどくせーよバカ」

「・・・・・・・・（プイッ）」

「はいそっぽ向かれましたー。・・・・・・・・あれ、これ日本語じゃね？」

「・・・・・・・・」

「『ようやく気付いた間抜けめ』。ついでに激痛も蘇って来たよバカヤロー」

「・・・・・・・・（アセアセ）」

「『大丈夫！？』。大丈夫じゃない、死にたい」

「ッ！？・・・・・・・・！（アセアセ）」

「『だだだいじょうばbbbbbbbb』。落ちつけよ、そして医者を呼んでこいよ、俺の精神が激痛でマッハだよ」

「・・・・・・・・！！（ダダダダダ）」

「・・・・・・・・なんだあいつ」

君の人生に女が入ってくる。素晴らしいことだ。出ていってくれた
らもっと幸福なのに。――――ポール・
モラン

「スペシャルエ・・・（ガバツ！）」

あり？なんだここ？

てかこれ冒頭でもあったよな。

・・・冒頭ってなんだ、何言ってるんだ俺。

えーと、俺は間部功刀で16の身長163でヒーローで変態でクソッ垂れで今現在ちょっと腹の調子が悪いを確認できて全身包帯だらけだ。

・・・うん！いつも通りだな！

訓練してた頃もこんな感じだったもんな。

介護してくれた人が女の人だったからおむつ替えてくれる時はオツキしてしまいました。恥は無い、後悔も無い。

今回の違いと言えば精々簡単には治せな・・・。

あれ、なんか違和感。

具体的に言えば股間辺りから。

なんて言うか、常におしっこしているような違和感って感じ。

ちょ、なにこれなにこれ。

ガタガタ・・・。

「おうふっ」

激痛に顔を顰めるも、なんとか首を動かして違和感の正体を確認しようとした。

そこにあるのはベッドのわきに備えつけられた袋から股間に伸びている管のようなもの。

「なん・・・だと・・・！」

そこで俺は気がついた、この違和感の正体に。

いつ洩らしても大丈夫なように・・・チンコに管突っ込んでやる・・・。

なんてことだ。

よくわからないけど、なぜかとても敗北した気分になる。

男としての本能だろうか。

あ、でも結構これはこれで・・・。

いや待て！何を言っているんだ俺！

いいか、お前は看護師さんが「はい、おしっことりますよー」って言うてくれる機会を失っているんだぞ！？

はっ、ならまだ大丈夫だ、俺にはまだ排泄物リサールウェボンがあるじゃな・・・！
再び感じる違和感。

こう、ケツにピタリというか固い感触。

ま、まさか・・・！

「お、お丸がケツにセッティングしているだとおおおおおおおお
おおおおおおおおおお

「！！！！」

俺はこの世の理不尽を呪いつつ、叫んだ時の激痛によって意識を失った。

そして話は冒頭に戻る。

「・・・・・・・・！！（アセアセ）」

「クトウさん、大丈夫ですか？」

「あー……ルカ子か？大丈夫じゃない、呼吸が辛い」

「肺に骨が刺さってましたからね、外科で何とかしないといけなかったんでそこは魔方陣とか使ってないんですよ」

「ヘーソウナンダー」

「鎮痛剤を打つんで、我慢してくださいね」

「………！（アセアセ）」

「『私はどうすればいいのか』？座ってろ」

「………！（スクッ）」

素直でよろしい。

ルカ子はこの間も俺に手慣れた様子で注射を打っていた。

「はい、これで終わりですよ」

「あんがと。で、こいつ誰よ？」

「ええと、グルムドリアに隣接しているペルムドンとは別のリフレリアという隣接した国家があるんです」

「そこの救世主さんと」

「・・・・・・・・！（コクコク）」

「『どうだまいったか！』。何にだよ。そのリフェなんたらから来た救世主さんがなんでここに居るんだ？」

俺の苦悶の表情が消えて安心したのか、筆談のペースが上がった無口っ娘。

全体的にフリルの多い服装をしており、日本語の筆談だったくせに金髪のブロンドで緑眼という日本人離れた容姿。

顔は整っており、服装も伴って可愛い系。

無口を通り越して筆談なんてものに頼るがその内容は結構遠慮が無い。

「・・・・・・・・なんつーか、この世界にあって来た奴等に相応しいキャラの濃さだ。」

「・・・・・・・・（カキカキ）」

「『あなたのお名前は？』。名乗る時は自分からにしない、礼儀です」

「・・・・・・・・！（カキカキ）」

「『佳織・フレデリカ』？ドイツ人のハーフか？」

「・・・・・・・・！（カキカキ）」

「『よくわかったね』。俺、ゲルマン民族信仰してっから」

「・・・・・・・・・・！（カキカキ）」

「『本とか読んで覚えたの？』。ああ、エロ本だけだな」

「ッ！？」

なんか普通にいい子だな、なんで筆談か知らんけど。

真っ赤になって伏せてるとホント人形みたいに可愛いというか。

思わずセクハラしたくなってくるというか。

その邪な考えを見抜いたか知らんが、ルカ子が咳払いして注意を促す。

「えっと、私も時間が無いので、すぐ仕事に戻らなければならないのですが」

「あ、そら大変だね。治療ごっそっさんでした」

「いえ、そちらはついでで、本題は別にあるんです」

「え、何？」

「記憶喪失という事は何いでしょうが一応聞いて置きます。クトウさん、あの激戦はどこまで記憶にありますか？」

「？」

激戦っつーと・・・・・・・・あり過ぎて良く分かんない。

「すいません、覚えがあり過ぎてどれか分かりません」

「?・・・ああ、クトウさんにしてみればそうでしたね」

今の言い方ちよつとイラッ☆、と来るな。

事実だからしょうがないけど。

くそっ、いつか絶対おっぱい揉んでやる。

そして決め台詞をだな・・・、

『これが俺の必殺技だ、惚れるなよ』

こう決める訳だ。

最高じゃね W W W W W

「クトウさん、ぶっちゃけちゃえばグリムリバーのモンスターとの対戦の事後報告ですので、今の会話無駄です」

「ええ!?!」

「無駄です」

「そこわざわざ繰り返すなよ!?!」

なんか俺の妄想ごと切り捨てられたようで精神ダメージがパネエ。

「まあ、それは短編の方でやるとして、問題はこの子のことです」

「丸投げだー・・・」

がんばれ作者。

「・・・この子実は、召喚先の国から逃げ出してきてるんです」

「あん・・・？」

「・・・」

そりゃ・・・一体どういうこったよ？

ギャグ思考をシリアス思考に切り替え、ルカ子が続きを話すのを待つ。

「戦闘中にグリムリバーのモンスターがどこかへ引き寄せられるように突然引き上げていったので、追撃してみたらこの子がいたんで保護して事情を聞いたんです」

「んで？」

「・・・どうやらこの子」

「・・・・・・・・・・！（ギュッ）」

フレデリカが耳を塞ぐ様子に、俺はこの先の事実が決して軽いものではないだろう事を確信した。

「召喚された国の王に・・・・・・・・レイプされかけたようですね」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・！（ギュウッ）」

・・・・・・・・・・やべ、ちょっと眉間に皺寄ってんな。

「・・・・・・・・まあ、詳しい事は聞かねえけどよ。そいつどうすんの？」

「・・・・・・・・匿う事は難しいでしょうね。彼女救世主ですし、国との契約も当然交わしているでしょうから、居場所の特定もそうは掛らないでしょう」

「ふーん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・（フルフル）」

・・・・・・・・たく、一難去ってまた一難か？

くっだらねえ現実ばかり押しつけやがって。

「で、お前はどうすんの？」

「・・・・・・・・・・？」

「いや、お前は どうしたいのかって聞いてんの」

「・・・・・・・・・・」

俺は、まだそれを認める程愚かでも賢くも無い。

どうするかなんて二の次で、助ける理由も付け焼刃。

だけどそれでも構わないとは言わない。

人は結局、自分の欲望を愛すのだから。

その時思ったことを、やりたいようにやるだけだ。

だから俺は助けてやろうかな？って思うだけ。

後は、目の前のコイツしだいだ。

「偉そうなことも優しい言葉もかける気ねえから率直に聞くけどさ、あんた助けてほしい？」

「・・・・・・・・・・！（コクコク）」

「なら、言わなきゃ伝わんねえぜ？お前なりの言葉で伝えなきゃ、俺は助けていいか分からない」

「・・・・・・・・・・」

「で、お前どうすんの？」

俺の言葉に目を見開き、筆談さえ忘れてただじっと俺を見つめ続けるフレデリカ。

やがて口を開き、そこから嗚咽しながら何かを吐き出し始める。

「たす・・・けて・・・？」

涙を流し、つつかえながらも言いきったフレデリカに、俺は気負いなく自然に答えた。

「ああ、任せとけ」

ヒーロー第二の試練ってか？

「もう、勝手なこと言わないで下さいよ」

「いいじゃん、言うのはタダだろ？」

あの後フレリカは筆談でお礼を言いながら退出し、ルカ子と共に今回の事後処理に関する報告を受けていた。

「・・・私はもう行きますけど、本当に、あの子どうするつもりなんですか？」

「・・・策はあるよ」

「まさか殴って説得するとか言うんじゃないでしょうね？」

「・・・はは、まさか！」

凶星でした。

「……向こうは国王ですからね？グリムリバーがついにここま
で侵略してきた状態で国際問題とかやめてくださいね？本当は連携
組んで動かなきゃならないんですからね？」

「だあああああああもううつせえよお前！」

ルカ子の苦言を叫んで誤魔化す。
ヒーローの試練は中々度し難い。

「……それにしても、女の子苦手なのにやさしいんですね。ク
トウさんは」

「そらお前、女の子だからな」

女の子は大切にするものだって、母ちゃんもサブカルチャーも言っ
てた。

「ふーん……」

なんか納得いかない、そんな顔のルカ子。

しかし俺は何が言いたいのか解らないので、微妙に居心地が悪い。
ルカ子がこういう態度でるのは初めてで、俺はそれをいつも通りに
ふざけてスルーすることが出来ない。

モヤモヤとした感情が、再び俺の胸を支配した。

とりあえず視線は逸らす。
三秒ルール三秒ルール。

「……ふふ、まあ、許してあげましょう」

「……んだよ、たくっ」

悪態をついてみたものの、すげーカッコ悪いと自分でも思った。
まるで母親に怒られているような気分だ。

「じゃあ、ゆっくりしてくださいね。お疲れさまでした」

「……ああ」

部屋から出ていくルカ子の背中に、俺は聞こえるか聞こえないかの
返事を返した。

ったく、一体何なんだよ。

そう思っていたら、鎮痛剤が切れて来てまたナースコールでルカ子
を呼び出した。

十話 ベッドの上よりこんにちわ（後書き）

まさか入院体験が役に立つとは……。

あれ、ホント男としての何かを持っていってくれる。

俺は即答で尿瓶で！ってお願いしたのに。

そろそろストック切れるな……。毎日更新はどうしたものか。

短編という物を作るよ（前書き）

自重はしねえよってことでよろしく

短編という物をやるよ

クトウ（以下ク「君と一緒に居たい」

ルカトエーゼ（以下ル「だって好きですから」

ネリア（以下ネ「ぎゅーっと抱きしめて欲しいです」

クネール（以下クネ「ずうっと、一緒に居たい」

ブライアン（以下ブ「邪魔されたくなしね」

佳織（以下カ「・・・・・・・・『ルランランランラ』」

姫様（以下ヒ「・・・・・・・・いや、姫様ってなによ。作中に名前出てないからってこれはあんまりでしょう」

ク「だって聞いた覚えねえし」

ヒ「ま、それもそうね。ならば改めて名乗りましょう。私の名前は、ファルネーゼ・アーリア・ドネ・ペルムドン。ペルムドン王国の王」

ブ「姫様あー！！最高っす！」

クネ「ブライアン、興奮しすぎだ！」

ブ「ぐはっ！？す、すいません、隊長。興奮しすぎました・・・」

ク「ブライアン、ちょっとお前も来いよ（ボソボソ」

ブ「ん？どうしたんだいクトウく・・・って何認識阻害魔方陣で姫様のパンツ覗こうとしているのさ！ぜひお伴させてくれ！」

ク「クソッ、この位置だとギリギリ見えねえ・・・！」

ブ「あ、剣の反射でいけんじゃね？」

ク「おお！お前天才だ！」

ネ「いや、バカでしょう」

ファルネーゼ（以下ファ）「なんでばれないと思ってるのかしらね」

ク「ぐはっ！ごめっ、すいませんでしたっ！」

ブ「あだだだだだ！？何するんですか隊長！？後もう少しでパンツが！」

クル「お前クトウが来てから性癖隠さなくなったよな」

ブ「俺、自分に自信がついたんです！」

クル「そうか、それはよかったな」

ブ「みぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！？」

ク「あだだだだだ！？ルカ子にフレデリカさぁん！？俺このままじやお尻が二つに割れちゃうよっ！？」

「元からじゃないですか」

力「・・・・・・」(コクコク)

ク「『お仕置きだべ』？それならもつとエロい感じで頼むぜえええええええええええいやあああああああああああああああああああああ！！？」

カーニバルファンタズムって面白くない？

by
作者

クトウが素手で戦ってるわけ

ク「最初はちゃんと木剣とかで武器の練習もしてたよ」

ブ「え？ならなんで武器使わなかったの？」

ク「ツインテが完全にナイフも使わん格闘家だったのが気に入らなかったから」

ブ「へー……えっ？」

ク「えっ」

ブ「・・・・・・・・・・・・・・・・いやいやいや、あーたあの人達に素手で訓練って。バカじゃねーの」

ク「いや、だってかっこいいやん」

ブ「素手でどうやってモンスター倒すんですか？身体強化って普通補助だぜ？精々ゴブリンより自力が上がる程度だよ？」

ク「おいツインター」

ネ「そうやって呼ぶなっつってんです。何の用です？」

ク「あのデカイ岩って砕ける？」

ネ「は？あれですか？」

ク「そうそう、あれあれ」

ネ「んじゃ、はっ！」

ドゴン。

ク「あんな感じ」

ブ「いやー・・・ねーわ」

ク「でも身体強化っておもしろいんだぜ？その気になれば神経系だけじゃなくて身体そのものに干渉できるように成るし」

ブ「例えば？」

ク「触覚を延長して空間を感じとったりして索敵魔術とかの代わりにしたりとか」

ブ「あー・・・何となくわかった」

ク「ツインテみてえな単純な強化の限界くらいはあいつらとの訓練で自覚しとるわ」

ネ「おーい、私はこれで帰るですー」

ク「おー」

ブ「・・・・・・・・んな発想今まで無かったな。お前実は凄いかも知れんぞ」

作者はどうやって話を創っているのか？

ク「なんだよ、また俺かよ」

カ「・・・・・・・・」

ク「『がんばろうぜ相棒』だあ？お前、俺の相棒名乗りてえなら下ネタとかそういうのも許容せんといかんぞ？」

カ「・・・・・・・・」

ク「『流石に毎日会ってれば馴れる』。はい、こんな感じで話を創る上での登場人物はどこか非道德的な部分があります。つまり変態です。その方が作者的にはギャグで会話を書きやすいからです」

カ「・・・・・・・・」

ク「『本文はどうやって書いているの？』。あらすじにも書いてあると思いますが、この小説は作者が歌詞の無断転載と罰則で削除を喰らった為に泣く泣く思い出しながら書き上げ行ってる物です。プロットなんて物を作り置きする程真面目な人間でもないのです、大体の

あらずじをうろ覚えでノートに書きだして即興で書いてます。その為前の作品とは細部とかは別物と言っている感じです。大体のストーリーを箇条書きにしておいて後は即興、そんな感じです」

カ「・・・・・・・・」

ク「『話を書く上で気にすることは？』。基本的にありません。あとすれば文字数です。後ギャグとネタと自分でも予測がつかない今後の展開です」

カ「・・・・・・・・」

ク「『この作品を書いた理由は？』。ファンタジーを書きたかったからです。後最近の異世界召喚ものに対する飽食で、もっとぶっちゃけた路線ないのか？と思ったことです」

カ「・・・・・・・・」

ク「『主人公の人物像は？』。皆のエミヤさんを元に性格的を嘘つきとアホな感じを追加してごっちゃにした感じ、エミヤさんの部分がヒーローを目指してる部分しか残っていない改悪版な奴」

カ「・・・・・・・・」

ク「『私の登場が予定が無かったってどういう事』。そもそも存在すら十一話で突然沸いて出てきた、前の奴でもいなかった作者にとつての完全なイレギュラー。今後の先が見えない原因」

カ「・・・・・・・・」

ク「『ヒロインの書き方』。ありません。言ってしまうえば完璧な女なんてもの男の幻想だよって事と、他作品読んでお前ら姫とか最強の魔術師とか強いキャラもってんのに性格のあくが弱くね？って思ったこと。それが元になってあいつらは出来ています。そもそも救世主だからって恋する要素なくね？それ恋してるんじゃないってステータスとして見てるだけじゃね？ってことです。別に気は使っていないけど、ニーチェさんにはお世話になりました」

カ「・・・・・・・・」

ク「『最後に、読者に言いたい事』。感想ください。罵りは罵りで、FPSのように殴り合って仲良くしましょう」

結局クトウってどんくらい強いのか？

ク「結構強いな」

ツ「私達が二ヶ月鍛えたらそれなりに強くなるです」

クル「結構強いと思うぞ」

ル「……皆さん、もうちょっと具体的にいきましょうよ」

ク「えーめんどくせえな」

ル「そういつてもこの小説、一話一話が短編みたいで連続性が薄いからよく話が飛んでて解り難いんですから」

ク「師匠＞越えられない壁＞俺・ブライアン＞フレデリカ＞ザコ共、こんな感じでいんじゃないか？」

ル「でもこの前の戦闘で死にかけてたじゃないですか」

ク「あれは単純に数の差だろ。一対一ならあんな木偶の坊なら倒す手ぐらいあるわ」

ル「まあ、私達と比べるのもあれですしね」

ク「俺はまだ人間やめてねえからな」

ツ「失礼なです」

ク「師匠の中で一番人間離れしてんのおめーだから」

ツ「はぁ？わたしのこの可愛い姿の何処が人外です？」

ク「胸の無さ」

ツ「死ぬ覚悟はいいです？」

ク「ぐはっ!？」

クル「ま、その作中でもでるんじゃないか？」

今さら登場人物紹介！

間部功刀・ヒーローを夢見るティーンエイジャー。将来の夢、ヒーロー！付きたい職業、ヒーロー！明日の目標、ヒーロー！対人関係にいろいろと問題あり突発的な行動で周りを掻き乱すことが多々あるのでよくその奇行から頭がおかしいと言われるが本人は自分の息子のトランザニクスせいと訳のわからない供述を繰り返している。最近では自慰でケツ穴を弄ると意外と気持ちいいことが分かり性癖に幅が広がったと本人はご満悦。巷にあふれる主人公とは一線を引く主人公。

「ヒーローになったら女共と浣腸プレイをしてみたいな」

ルカトエーゼ・フォン・レーネンブルグ・クトウを召喚した王宮魔導管理官。魔導師として腕は一流と言え、救世主を召喚する術式の大本編み出したのも彼女。クトウはなんだか手のかかる弟のようでしかしそうでないような同世代の男の子としてモンモン。そんな彼女の本质と過去はいずれ。クトウの頭のおかしさは最近ようやく慣れ始めた。でもエロ関連はまだ恥ずかしい。クトウがなんとかなくセクハラするのは躊躇う人物。師匠でヒロインな人。

「正直クトウさんの手の焼き加減は半端じゃないですよ」

ネリア・ブロン・クイッシュローゼ・クトウの師匠でヒロインな人その二。クトウが最も話しやすい異性、噛みついて殴り合えるところが高評価。王宮魔術師で姫様に頭が上がらない。ルカ様は自分

を救ってくれた人として崇めると同時に大好きである。百合じゃない。クトウは彼女のことを人外と思っているが、彼女自身はその評価はあまり気に入っていない。クトウはセクハラ野郎として嫌ってるけど自分を恐れない態度をとってるのは嬉しい。女としてはダメ子ちゃん。

「ルカ様神。クトウは早くぶち殺したいですが、あの料理を失うのも惜しいです」

クネール・イヌ・ベルフェグルエ・クトウの師匠でヒロインな人その三。クトウの好みどストライク。過去の影の見え隠れしなくもない女性。処女。流石にこの年で恋愛経験がないのは不味いなど思いつつも特に気にしていない。でも年は気にしている。うわ、ちゃんにするやめっ

「おい、酒持ってこい」

とりあえず主要人物だけ。

ク「結局短編で十話の顛末がどうなったかやらなかったけど大丈夫なのか？」

ル「誰もこの作品のあれこれなんて気にしてませんから」

ク「・・・・・・・・・・だな」

ル「はい、また機会があればって事ですネ」

ク「ところでルカ子、髪型変えた？ちょっと短くなってね？」

ル「この前の戦いでちよつと髪燃やしちゃいました」

ク「うわすげー気になる」

ル「またの機会と言う事で」

ク「即興も大概にしとけよ作者」

十一話 狩りじゃあああああああああああ！！

「・・・・・・・・・・んで、なんでお前ここ居る訳？」

「・・・・・・・・・・」

「『助けてくれるって言った』。ああうん、言ったね。任せろつつたね」

「・・・・・・・・・・」

「『だからいつでも助けて貰えるように』。へー・・・・・・・・、でもくっ付くと血とか付くぞ。鼻血とかまだ止まってないし」

「・・・・・・・・・・」

「『構わない』。・・・・・・・・ああそう」

「・・・・・・・・・・」

（何かすげー懷かれちゃったんですけど）

「・・・・・・・・・・（スリスリ）」

（・・・・・・・・依存、か？それとも・・・・・・・・）

「・・・・・・・・・・（ギュ）」

（だとしたら俺は・・・・・・・・）

「・・・・・・？」

（スルーだな、うん。俺は別にどうでもいいし）

やってみせて、言って聞かせて、やらせてみて、
ほめてやらねば

人は動かじ。話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。

——山本 五十六

「シュー」

「・・・」

どうも一日ぶり、俺だ。

今脇に女を侍らすという人生最大のイベントが訪れているが、それと同時に人生最大の珍妙なイベントに遭遇していた。

「ミュ？ミュミュ？」

「……………！（ソワソワ）」

何かイタチのような小動物が俺の部屋のベッドの上で丸まっていて、俺達の様子をその小さなまん丸いクリクリとした眼で首を傾げながら眺めていた。

その様子は猫派の俺にはそこまでなかったが、佳織（そう呼ぶように強要された）にはストライクだったようだ。さっきから触りたそうにソワソワと俺と小動物の間に視線を彷徨わせている。

こら、野生だったら病気が恐いんだから駄目です。

そういう意味を込めて首を振ると、途端に泣きそうな顔になる佳織。ええーそこで泣いちゃうんっすかー。

元々女の子が苦手な俺には涙は禁じ手だろう。

そんなことされたら言う事聞かないじゃないか。

そういつて再び視線を小動物に戻した。

「ミュ？」

「ミュー」

「ミュミュミュ？」

シヨボンと落ち込む佳織。

ダメつつたらダメです。

ていうか、ここまですれば俺でもわかる。

「一体何が起こってるんだ・・・」

何か、厄介事が起こっていると。

「よく集まってくれたわね、これからその原因を話す必要は無いわよね？」

「姫さん、状況は分かってるんだが、原因がさっぱりだ」

「ああ、じゃあ説明しとくわね」

部屋を脱出後ルカ子とかと合流して緊急招集の令が出されたことを知り、急ぎ謁見の間に召喚された。

「あの小動物はモロって言って、この時期になると繁殖して数が増えて毛皮をとってコートとかにするんだけど、今年はその数が異常に増えてるのよ」

「なるほど、アウト・ブレイク増殖爆発ってことか」

「んで、この城にまで入られたら流石に仕事にならないから、今日から数日間駆逐作業を行いますって事」

「……………っ！？（アセアセ）」

「あ……………了解」

「……………！？（フルフル）」

「すまん、仕事だからさ」

「・・・・・・・・（ガーン）」

ショックを受けたのかその場で膝を着く佳織の肩をポンポンと叩いてやる。

俺もかわいいあれをグロい姿にするのはちょっと抵抗があるが、ここまで増えると疫病とかが恐いしさ。

お仕事なんだよ、仕方ない。

そう思わなきゃやってらんない。

めんどくささ的にも良心的にも。

「はぁ・・・」

空気の読めない神様は、今日も空を晴天にしてくれやがりましたと。

「じゃあクトウさん、お願いします」

「・・・・・・・・いやぁ・・・・・・・・これは・・・・・・・・」

クトウです。

割り当てられたのは捕まえたモロの焼却処分やったとです。

生きたまま丸焼きです。

檻の中からせつない鳴き声で泣かれると精神的にくるものがあるとです。

やめろ、そんな切ない眼で俺を見るな。

無理だよルカ子、俺には無理だ。

「もーしょうがないですねー」

「ならお前ならできるといのか!？」

「やってみせましょうか？」

そういつて懷から魔方陣を一枚取りだすルカ子。

「ほい」

そして迸る火柱。

「ミュ？」

チュドーン！

「ようは情が沸く前にとつとやっちゃえばいいんですよ」

「なんてことしやがる！」

その攻撃、情け容赦無し。

バチバチバチバチ……

「うわあ、肉の焼ける匂いだ、ジュースイー……」

「手っ取り早く焼きたいなら魔方陣貸しましょうか？」

「いやいやちょっと待ってくれ」

俺は先程から見えてる光景をルカ子に見るように促した。

「ミュー」

「ミューミュー！」

そこには燃え盛るモロに向かって鳴く檻に入ったモロの集団。

パチパチ・・・

「お前！！見ろ！あの心掻き穿る悲痛な鳴き声を！同属を殺されたあいつらの鳴き声を聞けよ！」

「んじゃ、とりあえず渡しときますね」

「すみません本当に勘弁してくれませんか」

「でも減らさないと疫病とか広まっちゃいますよ、現状ただでさえ面倒なのに」

「いやだってもう無理やし。あれは無理やし。絶対無理やし」

みんなだってわかってくれるだろ？

「おい貴様・
・
・
・」

背負っていた袋を地面に下し、這い上がるようなドスの効いた声を
出す姐さん。

その姿から滲みでた覇気に思わずおしっこチビリそうになる。

「お前は何を甘えたことを言っているんだ？ さっきから聞いていれ
ばそんなにこの鼠どもがかわいそうか？ いいか、ここに居るのは災
悪だ。癒しなど幻想に過ぎん。御託を並べる前にとつとこの鼠ど
もを処理せんかバカ者！」

「ひいひいひいひいひいひい！」

「あー・・・クルーネさん現実主義者で狩りだとアツくなりやすいですよねー・・・」

「遅い！もっと速度を上げろ！」

「あわわわわわわわ」

すまんなモ口達、俺は自分の命の惜しさにお前らを処理させて貰います。

シフトを交代して今度は狩りサイド。

何故かさっきも狩りサイドだったクルーネ姐さんも付いて来ている。

「動物たちの必死の抵抗に対してこちらも真摯に殺しで応える。互いに命をかけての攻防とはやはりどのような形になっても心躍るな！」

さいですか。

どうやらこの人、戦闘狂である。

てか俺まだ骨がくっ付いたばかりでまだ病み上がりなんだけど。

「なんだ、私といるのが不満かクトウ！」

「不満か満足かと言われたら微妙と答えますが。つかテンション高
いっすねクルーネ姐さん」

「そりゃお前、狩りだからな！」

「そっすか」

「モロの親玉の方も動きだしたようだしな」

「モロの親玉？」

「あれは殆どがオスでな、群れの親玉は一匹のメスなんだ。それを
殺^やれば今回の騒動は自然と収拾がつく」

「あ、なるほど」

「問題はメスの違いがハツカネズミ並みに分かり難いという点だな」

こうやって会話している間にも、姐さんと俺はモロを捕獲し続けて
いる。

姐さんは槍でデストロイした方が早いと主張していたのだが、それ
は俺の精神衛生上よろしくなかったので継りについてお願いしたらし
ぶしぶ了承してくれた。

その時若干姐さんが赤くなっていたのは気のせいだろう。

「何か特徴とかないんですか？」

「ミュー」

「そうだな、唯一の違いと言えば・・・」

「ミャ」

「そう、こんな感じの鳴き声なんだよ」

「鳴き声が違うんすか」

「そうそう」

「ミャー」

「・・・こんな感じで？」

「・・・こんな感じでだ」

「ミャゝ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺達が一匹だけ鳴き声の違うモロを凝視していると、そのモロは一目散に逃げ出した。

「追ええ！！なんとしても捕まえろお！」

「イエス！ マム！」

長い長い一日の、最終決戦が始まった。

「ちいいいいいい！！ そこら辺で声は聞こえるのに違いが分からん！」

「どれもこれも同じ姿っすからね！」

事態が早く収集して俺の精神とついでに今も泣く泣く頑張っている
佳織の為には、この際一匹や二匹デストロイしてしまおうと・・・
すいません、結構ガリガリ来ます。

だから早く見つけて殺しちゃまわないと！

だが逃げたメスモロを追い掛けてみるとそこは繁殖する為の巣だったようで、大量のモロに溢れかえっていた。

ここまで多いとそこらかしこから声が聞こえてきて判別不能である。しかしあの猫みてえな声が聞こえる事が救いか。

ここで逃げられれば追跡は不可能、再びシフトを組んでモロ狩りを続けなければならないだろう。

それは流石にもう限界である。

俺の精神的な意味で。

「くっ、こうなったら・・・クルーネ姐さん！しばらくメスモロを逃がさないようにしてください！」

「む？何か手でもあるのか！」

「ええ！」

「ふっ、了解した！」

振られるクレイモア、飛び散る血飛沫、溢れ出る嘔吐。

「七口口口口口口口口口口口口口口」

「おいしいおいしい！それが奥の手か！？」

「ちゃいますちゃいます！ちょっと精神的に限界が！」

「ならばしつかり気を引き締めんか！」

やべえやべえ、集中力切れちゃったからまたやり直しだよ。
さて……………術式、構築開始。

部分強化、部位、聴覚、脳機能、判別処理、最大強化！

打ち据えられたような爆音が、耳の中で暴れ回った。

しかしそれを冷静に受け止め、聞こえる音を調整して行く。

そして、モロの鳴き声の中から、メスの鳴き声を聞きだした。

「見つけた」

術式を変更し、さっき拾った小石を手首のスナップで銃弾のような
勢いで弾きだす。

「ギュッ!?」

小石は正確にメスのモロを打ち抜き、その胴体に致命傷を与え、一
瞬のうちに絶命させた。

気分悪。

しかし、今回の仕事はこれで終わりだ。

「はあ、なんだかなあっすね」

「そうか？ 私はそうでもないが」

「鬼だ・・・ここに鬼がいる」

「報告帰りに一杯やるか？」

「うう・・・今日は飲みたい気分っす・・・」

「そうかそうか、手柄はお前だからな。今日は私が奢ってやろう！」

「素直によろこんでいいのかなあ・・・」

佳織は泣いてた。

やけ酒に付き合った。

この日はどっと疲れました。
終わり。

十二話 お祭り、それは男のテンションを否応なしにあげる儀式

「という訳で、処理じゃ追いつかなかったモロをお祭りという名目で大量消費しちゃおうという訳です」

「祭りで？」

「祭りで」

「ククク、アツハハハハハハハハハハ！！」

「ど、どうしたんですかクトウさん」

「正に、狂宴の時」

「狂宴！？」

「祭りじゃ祭りじゃー！そうだ、グラハムとかも呼べるかな！」

「ええっと、人口の少ない我が国では処理しきれないので、諸外国の人達を招待とかいろいろ宣伝はしましたけど・・・」

「しゃあっ！これでソウルブラザーズ揃い組だぜ！じゃ、俺ちよつと行ってくる！」

「え、ちよつとクトウさん！？」

「とつと祭りの準備を終わらせなくっちゃー！」

「……行っちゃいました。もう、せつかく佳織ちゃんとも一緒に
行こうって誘おうと思ったのに」

夢は大事です。そうでなかったら、お金が大事です。――――

――――
魯迅

冒頭より数日。

遂に、祭り開始。

[illegible]

しかも俺が準備までした祭りだ、テンション上がらない訳が無い。

その名目が「モロの処理口」だとしてもだ。

だとしてもだっ！

こうして無事に人が集まってくると、準備したかいがあるつてもんだ。

俺は待ち合わせ場所でブライアンとグラハムを待っている。

グラハムとはあの戦いの戦後処理をしてる時に師匠陣の容姿などの話で盛り上がり、晴れてソウルブラザーズに加入した。

あいつも中々な漢^{へんたい}だったな。

それにしても来ないな。

予定の時間より三十分早く来ていたのは流石に早すぎたか。

そう思っていると、何やら向こうの方が騒がしい。

人だかりができており、その中央で誰かが叫んでいるようだ。

妙に気になったので、人だかりを掻き分けて進み中央へと足を踏み入れる。

「貴様の力ではアツいロックは似合わんようだなあ！」

「貴様こそバラード向きで声が渋いんだよ！」

「よかろう、なら童心の心を蘇らせるあの名曲で決着をつけようではないか！」

「あの名曲……あれかっ！」

「いつもと違うような気がして毎日どこかを走り回った！」

「道端のうんこを棒で突いた！小便の長さを競い合った！」

「でもいつからかやめてしまつて世間の常識に閉じ込められた！」

「そんな檻から抜け出す為に！空を仰いで思いつきり叫んだ！」

「チンコ！チンコ！チンコ！チンコ！チンコ！チンコ！チンコ！チンコ！チンコ！」

「チンコオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「!!」

「何やってんだバカ共」

「「チンコオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」」
「」

「ああ、成程、何か気に入らんかったからお前ら公衆のど真ん中でチンコ!チンコ!連呼していたと」

「おう」

「ああ」

「そういうことなら俺も呼べよバカ共」

とりあえず理由を聞き出してみたら、『互いに何か知り合いじゃない気がしない気持ち悪い感覚に陥って、それを解消する為に歌い合ってた』との事だったので、歌で勝負付けるならいいかと思つて俺も参加することにした。

「じゃあ、まず俺からな！」

「あ、その次僕で！」

「ふむ、最後は私か」

え？ お前も十分迷惑？

今さら何を行っているんだ君わ。

曲はバンプで『ラフメイカー』だ！

もちろん歌詞は編集して訳のわからんフレーズにしてるからな！

「涙で濡れちゃった部屋のドアが！」

「ノックされて軋んだ音を立てた！」

「誰にも会えないへちやくむくれた顔なのによお、何だよ、誰だよ

この野郎」

上から俺、グラハム、ブライアンだ。

実際の歌詞とは大分違うが、これも規則だ。

だが規則は破る為にあるのだよ、こうした反則なのかセーフなのかギリギリのラインを見定めるのもおもしろい。

あ、運営さん。

[illegible]

作者は徹夜明けです。

「名乗っていいの？じゃあ名乗るけどさ、俺ラフメイカーつつーんだよ、よろしく」

「笑顔要らない？笑顔にできたら部屋に泊めてくれよ、寒くてさ」

「ラフメイカーだ！？冗談じゃねえぞこのクソ野郎！んなもん呼ぶほど余裕ねえんだよくそがつ！！」

テンションがだんだんと上がってきて歌にも熱が入る。

この三人、無駄に歌がうまい。

お蔭でこんだけ騒いでるのに捕まらないで人だからができあがつた。

こいつら一回でラーニングしてくるとかマジありえねえ。

次の曲もバンプ、俺的には傑作。

『K』。

「週末の通りを黒猫が早走り」

「ご自慢の鍵の尻尾をきどり振って堂々と歩く」

「黒猫はその姿から、訳もなく暴力を受けていた」

いや、これホントいい曲だぜ。

『カルマ』とか『天体観測』とかもいいけど、やっぱバンプはこの頃が最高だぜ。

因みにあいつらは『カルマ』派、聞きやすいからだそうだ。

全員のどを強化して、大きく声を響かせ、力いっぱいサビを歌い上げる。

「走って、転んで、傷だらけ。そして追い打ちをかけるように暴力を受けた」

「だが負けるわけには行かない。聖なる夜に似合うのは、涙じゃなくて笑顔だから」

「そして遂に、俺はこの手紙を届け切った」

「手紙を読んだ彼女は黒猫に振りかえり」

「庭に墓をこさえてそこに埋めると」

「墓標の彼の名前に一文字加えた」

歌いきった一瞬の静止の後、歓声が沸き上がった。

「いい歌だった」

「ああ、やっぱり君の国の歌は最高だな！」

「どもども」

俺完璧にラーニングするまで結構かかったんだが、こいつら才能の塊かつ。

しかしこのイケメン達は変態という呪いと罪を背負っている。さて、この人だからどうしよう。

「んで、これどうする」

「派手に行けばいいんじゃないか？目標は月だ」

「ああ、そりゃあいい。どうせならとことんやったらどうだ」

まったくこいつら、ノリが良すぎるぜ。

そう言われたら派手な曲で行かないとな！

やっぱ派手でノリノリな曲つつったら洋楽だろ。

g l e eをリスペクトしてこの曲で行くぜ！

『don't stop believing!』

「ちっぽけな街の少女。孤独な世界を抜け出して」

「夜汽車に乗って、どこかへ旅立った」

「サウスデトロイトで育ったシティーボーイ。夜汽車に乗って、どこかへ旅立った」

「煙草の煙に満ちた部屋」

「ワインと安っぽい香水の匂い」

「笑みを交わせば、夜と一緒に過ごせる。そんなことの繰り返しさ」

いいねえ！ノッて来た！

張り切って行こうぜえ！

祭りはこうでなくちな、やっぱ。

「ふー！最高だったな！」

「ああ！まだ歌い足りないくらいだぜ！」

「なあに！祭りはまだ続くんだ！もっと広い場所探そうぜ！」

そんなこんなでもう二曲くらい歌った後、代役を立ててその場を退散させてもらった俺達は、モロの肉を使った串焼きやら酒を飲んで一休みしていた。

祭りをこんなにも楽しく過ごせたのは初めてだ。

ソウルブラザーなんて呼び方してるが、ようは友達とかそういうものにまだ慣れていなかったから恥ずかしかったのだ。

今回の大量のモロの犠牲によって、少しでもこうして親睦を深める事ができたなら、あの辛い鳴き声に耐えたことも無駄じゃなかったと思える。

男同士のバカ騒ぎってのは、やはり異性との関係とは違った特別な意味があるのだと初めて知った。

これが親友か・・・。

「ん？何をしんみりしているんだ、君がこのチームのリーダーだろうに」

「年は一番下だけど、僕達のは中心は間違いなく君だしね」

「いや、なんか照れ癖えんだけどさ。俺みてえな奴でもさ、その・・・」

「なんだなんだ歯切れが悪いな！おかみ！モロ串と酒を追加だ！」

「この店の一番度の高い奴ね！」

「俺達、親友だな」

「・・・」

「・・・」

急に驚いたというような顔で固まる2人。

対人関係の浅い俺でも、その停止の意味を表情から悟った。

運ばれてきた酒を照れ隠しに一気に飲み干した。

「おいおい！今さらだぜそんなの！」

「そうだ！俺達は親友だ！ほら、もっと飲めよ！僕の奢りだ！」

「・・・へっ、それじゃお言葉に甘えて！」

「「イエー！一気一気！」」

「よく見とけよてめえら！間部功刀！いかせて貰います！」

機嫌の良くなった俺は、ジョッキに入った酒を一気に飲み干した。
あと、気絶した。

「おええええ！ぼろろろろろろろろろろろろ！うえあつ
！」

「おい、大丈夫か？」

「キツかったら早めに言えばよかったのに」

ブライアンからハンカチを受け取り、それで口を拭った。

それにしても酒の強いほうの俺が吐くなんてどんだけ度が強いんだあの酒。

まだ吐き気が止まらろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ。

もう二、三回繰り返して漸く楽になった。

「オーケー、楽になった」

「歌の方はどうする？」

「俺とブライアンが関係者だからな、場所の確保なら結構融通してもらえと思うが」

「とりあえず、広場に向かおう。イベントは皆そこでやってる」

そういつて広場に向かおうと立ち上がった時、向かい側からルカ子の杖がちらっと見えた。

「お、あれルカ子か？おーい！ルカ子ー！」

「っ！？ク、クトウさん！？」

おお、やっぱりルカ子だったか。
その脇には佳織もちょこんと侍っており、どうやら2人で祭りを楽しんでいたようだ。

百合か・・・いいものだな。

ツインテはルカ子大好きなのに、百合じゃねえんだよな・・・。

「何か勘違いの視線を感じます」

「・・・・・・・・」

「『こんなところでどうしたの?』。いや、今から面白いことに
広場に向かうとこだったんだよ」

「・・・・・・・・?」

「『おもしろいこと?』。おう、面白いぜ。少なくとも時間を有意
義に使えることは保障するぜ」

「えー・・・と、実は私達見回り中でして、その・・・」

「なん・・・だと・・・」

これはゆゆしき事態だ。

「てめえら! 緊急会議だ!」

「「おう！」」

バツと、円陣を組んで緊急会議の体勢に移るソウルブラザーズ。

「問題はいかにしてルカ子たちをこちらに引き込むかだ」

「しかしクトウ、引き込んでどうする？」

「歌わせる」

「なるほど、それは問題だ。どうやって引き込む」

「ふっ、僕に任せてくれ。頼みごとなら隊長で馴れてる。ただ踏ま
れて悦に浸っていたばかりいたわけじゃない」

「ほう、どうやって説得する？」

「いいかい？まずは……………」

ふむふむ……………ブハッWWWな、なるほど……………。

「完璧だ」

「お前、冴えてるぜ」

「お褒めに預かり光栄です、リーダー」

ニヤツと悪ガキのような笑みをこぼす俺達。
作戦は決まった、ならば後は実行するのみ。

「いくぞ！」

「「おう！」」

円陣を解除し、一目さんへルカ子へ向かう。

「ルカ子おおおおおおお！すまなかったあああああああ
ああああ！」

「公衆の面前でいきなり土下座！？」

そしてルカ子の前でスライディング土下座。

「え、ちょ、何やってるんですかクトウさん！？」

「ちゃんとお支払しますから……！面倒とか責任は僕が責任をと
ってこいつにとらせますんで……！」

「ッ！？」

「ええ!？」

まさかの土下座に驚愕する2人。

「どっちとも……俺が責任とるから……ちゃんと責任とるから……だから……!」

「おかあーさんあのおにちゃんにいつてるのー?」

「しっ、早く行くわよ」

「妊娠? しかも2人も?」

「あの変態、ついにやったかー……」

「急激な勢いで誤解が広まりつつある!？」

「ッ!？」

そして最後の止め。

「こいつの、こいつの未来を閉ざさないでやってくれないか……!」

「わかりましたよお! 行きますからもうやめてくださいよお!」

「おう、頑張れよ（スクッ）」

「やれやれ、やっと陥落か（スクッ）」

「お前悪魔だな（スクッ）」

ミッシェンプリント
攻略完了。

「あなた達って人はっ」

「・・・・・・！」

「『あんまりだ、謝罪を要求する』？あーサーセンサーセン」

後はこいつら舞台まで引き摺ってくだけだな。

「無理です！無理ですって！」

「~~~~~！！！！？」

「衣装着替えてここまで着といて何言ってやがる！」

「なんで広場に来るだけだったのに歌う事になってるんですか！？？」

「この前歌教えた時言ったら！いつか一緒に歌いましょうねってよ
お！」

「まさかこんなに観客が付くとは思わないじゃないですか！」

「~~~~~！！！！」

「『恥ずかしい、無理』！？んなもん知るかあ！歌い始めりや何と
かなる！アカペラ隊！」

「「了解！」」

曲は『ワールドエンド・ダンスホール』。
こいつらにはこれしか教えてないしな。

それにこの曲で初めて佳織が三分も声出した。

これを皆の前でやれば、少しはリハビリになるかもしれん。そうならなかったらならなかっただ、俺が責任とる。

さっき言った通りな。

[illegible]

「ああ！？曲始まっちゃった！？」

「~~~~~ツ!!!？」

反省はしていないし後悔もしていない。

B
Y.
俺。

「冗談の混じった境界線の、階段を跨いだそのまた向こう！」

「~~~~もお！知りませんからね！全然良い事ありません！だから手を引いてくれませんか！」

「!? ツ!? ～～～～～散々失敗した踊りを、その祭壇の上で踊れるんですか？」

よし、佳織も歌った！

後は俺がノらせて盛り上げるだけだ！

「ポップステップ踊ろうぜ！世界の端っこでワン・ツー！」

「ちょっと崩れ落ちそうになる、終末を感じてみませんか？」

「パツと消えてしまいそうな、瞬間の事を残しましょう！」

おおおし！ラストスパートオ！

『バイバイ、またね、と終わる世界に呟いた』

歌に興奮を誘われた会場は、さらにデカイ歓声で埋め尽くされた。
ルカ子も佳織も、居心地悪そうにしながらも、その顔に頬笑みが見
て取れた。

うっし、成功か、よかった。

特に佳織が笑った顔を見れたのはよかった。

思い付きの発案だったが、うまくいったようだ。

そう思った時、観客を見まわしていた佳織の表情が、こちらに危機
感を盛大に煽る程強張った。

まずい、本能的にそう思わせる程、急激に青ざめていく佳織。

その視線の先を追うと、大勢の観客の中でも、一際目立つ格好をし
たジャラジャラ宝石を着けた男。

その男の唇が、確かに『見つけた』と動くのが見えた。

十二話 お祭り、それは男のテンションを否応なしにあげる儀式（後書き）

今後の展開の為、明日の更新ができないかもしれません。

十三話 相変わらずバトルって考えるのがメンドイ(前書き)

今回はアパン無しで行くか

十三話 相変わらずバトルって考えるのがメンドイ

「おお……。遂に見つけたぞ、我が姫よ」

身長189、体格、体重共にヘヴィ級、動きには明らかな戦闘経験を窺わせるのに余裕と威厳を持った態度、慢心ではなく余裕、……。ちっ、こいつ、強いぞ。

会場へと一飛びで登場したそいつと佳織の間に佳織を背に隠すように割り込む。

「……貴様、王の妃だけでなく、我までも愚弄するか」

「すまん、こちら根っからの民主主義国家で育ったゆとりのDNだ」

やべ、こいつの威圧感にちょっとビビっちゃった。

「退け、下郎。王の御前であるぞ」

確かに、こいつは王だ。

そう思わせるだけのカリスマと実力を兼ね備えた、下手したら姫様よりも王らしい王だ。

風格が違う、経験が違う、意識が違う、覚悟が違う、そして、背負っている物が違う。

こいつはそれだけの物を相手に感じさせることが出来る程の人格者だ。

なら、何故それだけの男が女に逃げられこんなところまで一人で来ている？

突然現れた訳ではなく、気配を隠し、ただひたすらに、彼女を求めて。

ここまでどうやって来たのか、それは戦装束の隙間から覗く細かい傷が物語っていた。

それだけ純粹に彼女を求めて置きながら、何故彼女に逃げられるようなことをしてしまったんだ、この男は。

それを、確かめる必要がある。
だから、

「退かない」

「・・・何？」

「退かねえつつってんだよ」

俺に退く理由はない。

「貴様・・・！」

「お前、王様なんだよな？」

遮る様にそう問いかけ、俺は進み出てきたそいつと額がぶつかりそ

うになる程近くで睨みあった。

俺の身長だと自然と見上げる形になるが、それでもあの地獄デスワークの訓練を乗り越えてきた俺には死すらも恐怖の対象になりえない。

王様の表情が抜け落ち、まるでそこいらの小石でも見るように俺に言い放った。

「退け」

膝打ちを俺にしかけてきた。

そのまま俺の鳩尾に叩き込まれた膝は俺の胃を潰し、俺は吐瀉物でなく血反吐を吐くことになるだろう。

数ヶ月前の俺だったらな。

ガキィッ！

木偶の坊でもとの戦いで修得した魔術の高等技術が一つ、瞬時展開。術式の発動、交換のタイム・ラグを極限まで削ぎ落とす技術だ。その練度は王様の膝を防ぐ俺の膝で分かることだろう。

「ほお、下郎の分際で王の名が聞けぬか」

「てめえが本当に王だってなら、女くらい力づくで奪い返して行けや」

「ほざけ下郎！」

同時に一步下がり、王様の攻撃を俺が捌くという攻防が数瞬続く。蹴りは起点を潰し、拳は身長差を生かして掻い潜る様に擦り抜ける。少なくとも格闘に関してはそうそう遅れをとる気は無い。

純粹な魔術戦になると考えんといけなくなるけど。少なくともこいつはツインテ程の脅威ではない。

それでもガチで殴りあうのは勘弁したい。

俺の体格と体重ではパワーファイトは分が悪いからな。

王様がそのデカイ足裏で前蹴りを叩き込んできた。

俺はそれを後ろに跳んでインパクトの衝撃を減らしつつ勢いを利用して距離をあけた。

「おい、話は最後まで聞けよ」

「聞く価値なし」

「決めつけんなよ、少なくとも驚くこと請け合いだぜ？」

俺が佳織をどうにかする中で一番最初に考えたこと、殴って説得、俺には結局これしか思いつかなかった。

だから、これに今は賭けるしかない。

この、どうしようもなく頭が悪くて分の悪い賭けに。

「佳織・フレ……嬢を……を要求する」

「……………何い？」

「佳織・フレデリカ嬢を賭けた決闘を要求する!!」

シンツ、と辺りが静まり返った。

「ちょ、クトウさん何言ってるんですか?!」

「ああ、ルカ子? 結構ガチの予定だからエキシビジョン的な感じで客集めという」

「あの人マルクス王国、佳織さんを召喚した国の王ですよ!？」

「んなもんさっきから解ってる」

「なら・・・!」

「ルカ子よ、分かってんだろ? 決闘だぜ? 無理だって、もう撤回きかねえし」

「そんなこと解ってますっ!!」

パンツ、とルカ子に思いつきり頬を張られる。

胸倉を掴まれ、私、怒ってます。と主張する涙目で睨まれた。

その表情に俺は今までの決意も何処に行ったのか思いつきり気まづくなり、とりあえず明後日の方向に視線を逸らした。

「クトウさん、私はあなたが心配です」

「ああうん、ごめん」

「決闘の意味が分かっているなら、なんでそれを選択したんですか」

「・・・・・・・・・・それしか思いつかなかったから」

「バカじゃないですか？」

バツサリ斬り落とされた。

ぐうの音もでねえ・・・・・・・・。

何か涙目のルカ子かわええ・・・・・・・・。

「クトウさん」

「はい」

「こうなったら決闘を引き下がることはできません。一国の王のメンツを潰すことになるからです」

「はい」

「だから勝ちなさい」

「はい・・・・・・・・はい？」

「良いですか？」

「はいっ！」

締める拳に力が入り、俺は反射的に返事を返した。

「よろしい」

ニコツと笑ったルカ子は俺の襟首から手を離れた。
今すげえこと言われたな、俺。

「話は済んだか？ 私の寛大な心にも限界があるぞ」

「まだ返事聞いてねえけど」

「愚問だな、貴様は我が手で叩き潰さねば気が済まん」

「だよな」

ゴキツゴキツと首を鳴らし、身体モチベーションを上げてゆく。
向こうも余裕の態度を崩さないながらも全身から迸るオーラは俺に集中してる。

今にも戦闘が始まりそうな中、誰からか声がかかった。

「立会人は私でよろしいでしょうか？ おじ様？」

「む、小娘」

「あれ、姫様じゃん」

「お久しぶりですね、マルクス王。今日はお一人いかががしまして？」

「ふん、こちらに我が妃が居るというでな。迎えに来たまでよ」

姫様はにこやかに、しかしマルクス王は苦虫潰したような顔で姫様を見ていた。

「それにしては随分と粗ぶっておられますね」

「貴様のところの救世主が邪魔してくれてな、即刻下がらせてほしいところだが」

「それはできませんわね」

「・・・なに？」

俺、ザ・置いてけぼり。

あれー？なんか王様同士のどろどろとした会話に発展していつてる希ガス。

「佳織さんは戦時中にモンスターに襲われていたところを、我がペ

ルムドン王国に正式に保護した身です。もし帰還がお望みならば、ちゃんとした規定を基に公式な手続きをしていただかなければ」

「むっ・・・」

おお、姫様すげえ！

言葉巧みにこちらのペースに引き込んだ！

王である姫様の言だ、それは向こうにも無視できないものがある。

「くっ、魔女め」

「お褒めに預かり光栄でしてよ、武王」

「・・・よかろう、今回は退く。公式の手続きを踏んだのちに妃を引き取る」

「あら、わざわざお帰りにならなくても大丈夫でしてよ。公式の手続きならこの場で済みますから」

「・・・うん、姫様がすごい悪い事考えてる顔になってる。

これは下手に口出ししない方がいいな。

ていうかホント何処に居たんだろうこの人。

「どういうことだ？」

「それなら先程家のと派手に始めようとしてたじゃないですか」

「……………なるほどな。とことん舐めてくれる」

「勘違いなさらないでくださいな。私は泣いてる女の子の味方でして」

「ほざけ、魔女が」

姫様、すごく楽しそうである。

え……っと、つまり国公認で決闘していいってことか？

そら助かったな。

こちらには正当性もクソも無かった訳だし、これで五分か。

「ここじゃ流石に邪魔になりますから、城の訓練場を使いましょう。お二方とも異論はありませんね？」

「とっととしろ」

「姫様の思う通りにした方がいいと俺は思った」

しかしこの姫、やり手である。

「立会人は私、ファルネーゼ・ペルムドンです。それではお二人とも、よろしいですか？」

「ああ」

「いいぜ」

何故か用意されていたコロシアムのような場所の中央に立ち、姫様が拡声魔方阵を使って俺達に準備の有無を聞いてくる。

移動までに既にウォーミングアップを終えた状態の俺は今か今かとその火ぶたが切って落とされるのを待っていた。

向こうも同じのようで、先程から眼光が怒っているのが分かった。

「それでは、救世主・マナベクトウと、マクルス王・ロウエル・パラガ・ジン・マルクスとの決闘を始めます」

それを聞いた俺は、クラッチングスタートとの体勢をとった。
マルクス王は俺に向かって手をかざさす。

「―――――始めっ！」

ドンッ！

例え死んでも退けぬと誓った決闘が、今始まった。

十三話 相変わらずバトルって考えるのがメンドイ（後書き）

とんでもなくご都合主義になる展開しか思いつきませんでした。

ほんと何だこれ W W W W W

後キリがいいんでここで切って次回！

十四話　ご都合主義だなあ、この話気に入らないなあ（前書き）

みなさんならどうします？

俺はこれで精一杯だ。

十四話 ご都合主義だなぁ、この話氣に入らないなぁ

「・・・・・・・・」

「佳織さん、大丈夫ですか？」

「『心配ないです。少し落ち着きました』」

「そうですか」

「『それよりも、クトウの方が大丈夫なの？いつの間にか決闘することになっちゃったけど』」

「大丈夫ですよ」

「『・・・・即答、ですか』」

「それ以外の答えを聞きたいですか？」

「・・・・・・・・」

「あなたもこの問題の中心の一つです。私達は私達で解決の手立てをしなければなりません」

「『具体的には？』」

「佳織さん、腹を割って話しましょう」

「・・・・・・・・」

「詳しい話を、教えてください」

あるものの幸福は、他のものの不幸を踏み台にしている。――――
――――ジャン・アンリ・ファール

「あ、やべこれ無理」

初っ端から交戦を諦めざる得ない状況に陥った。

これは逃げているのではない、戦略的撤退だ。

いきなり眼前を覆い尽くす程の魔力弾の雨に襲われたらそら逃げるしかないだろう。

避けながら突き進むなんて技量俺にはないし、そんな奴人間とは思えねえ。

ツインテとかならできるんだろうけど、身体のマチベーションが最高に達していても俺には精々、

「これくらいか」

緩急をつけて、ジグザグに、時には止まって、とにかく縦横無尽に動いて避ける。

あいつらとの訓練では避けることが中心になっていた。

どんな攻撃も、当たらなければ意味は無い。

その理論を身につける為に、身体の動かし方を習い、鍛え、練って、仕上げた。

避ける事は俺にとって自然だ。

ルカ子のレーザービームみたいな火柱に比べたら恐くない、と思う。しっかしなんだ、量量量・・・。

弾幕って言葉が正しい意味で表現できるな、これ。

機動重視の俺じゃあこれを突破する頃には蜂の巣じゃなくて跡形もなくなってるなこりゃ。

一発一発の威力が地面抉る程度とか恐すぎだろ。

さて、どうしたもんか。

「どうした、避けるだけか小僧！」

「だあてろ！このロリコン親父！」

まだ全力で避けきるだけの体力はあるが、このままではジリ貧。やべえ、いきなりピンチ何だが。

待て待て、ここは冷静に俺の手札をおさらいしてみてはどうか？ええっと、羅漢銭もどき、威力不足。

身体強化・部分強化、今のところ意味無し。

懐にしまつてあるルカ子謹製の罫魔方阵、仕掛けても吹き飛ばされそうだなこれ。

あとは・・・なし。

少なっ、俺の手札少なっ！

しょうがね、カンでいきますか。

うん、しょうがないしょうがない。

だって俺チートじゃねーし、魔力多いだけで使いこなせないし。

魔術適正だって結局全部試したけど身体強化だけだったし、魔導は覚える事多過ぎ、あれ趣味の範囲内でやるべきだ。

学問として学んでたら時間が足りねえ。

うおっとお！？

あぶねえ、当たりかけた・・・。

んゝ、魔法弾を観察してたけど接触して誘爆するタイプ、属性は風、速度も練られた密度も高レベルか。

・・・試してみっか、被弾覚悟で。

現在彼我の距離、40メートル。

せめて15メートルに近づかなきゃ意味が無いが・・・25か、キツイな。

「だがやるきゃねえ」

大きく深呼吸をして呼吸を止める。

集中を高め、術式の変更に移る。

身体強化・部分強化じゃない難いな、そうだな・・・身体強化・枝としようか。

・・・安直なうえに厨二くせえ。

今はそれどころじゃねえか、身体強化・枝、発動。

強化部位、脚力、腕力。

ドッ！

地面を踏み砕く勢いで先程のガゼル走りからチーター走りに変える。真っ直ぐ進むだけではいずれ弾幕に覆われるが、俺は弾幕で挟られた地面の窪みを利用して、急な方向転換を行う。

下半身への負担が大きいが、この際贅沢は言ってられない。

「ほう、下郎。よく避けるではないか。そら、もっと味わえ」

更に弾幕が増す。

くそったれ、どんな魔力保有量だ。

明らかに人間越えてるぞ、こいつもルカ子組、王様ってことか！

だが負けられねえ、負けるわけにはいかねえんだよおおおおおおおおおお！！！！

こちらにも更に加速するが、肺と心臓が空気を求めて爆発しそうな痛みが走る。

しかし目標の十五メートルまであと約14メートル。

弾幕さえ阻まなければ真っ直ぐで二、三步の距離。

このままでは遠からず足が鈍って弾幕の嵐、無理に強行しても同じ結末。

どうする・・・！！

くそっ、これしかないか！

地面を滑り、四肢で地面を引っ掻くようにして跳びあがった。

「空中にその身を曝すとは失策だぞ小僧！」

その言葉通り、俺は激しい弾幕に包まれた。

「貴様……何をした？」

「ぜえー……ぜえー……！」

服がボロボロに吹き飛んで地面に寝転がっていた奴が、同じく地面に転がって左腕を負傷させた俺が深呼吸している俺に聞いた。息を整える時間を稼ぐために、俺はあえてその質問に答える。

「んな……難しい事は……してねえ……ぜえ……！魔方阵を盾に……足場にして……お前に……石……投げた……ぜえ……ぜえ……！」

「なるほどな……」

あの一瞬、俺はルカ子謹製の罫魔方阵を発動させ、作動しないようそれを足場にして地面に降り立った。

その際左腕を盾にした為数発被弾するも、奴が勘付く前に小石を使って羅漢銭もどきを放って魔法弾を誘爆させた訳だ。

ギリギリの策だったが、生き残れたようだ。

しかも奴にダメージを与える事ができた、収穫は大きい。

しかし不気味なのは奴がまったく喋らないことだ。

「小僧、正直舐めていたよ」

そう思って身体を起こすと、すでに立ちあがった奴がこちらを見下ろしていた。

それに危機感を覚えた俺はすぐ身体を起こし、構えをとる。

しかしやつはそれを見えていないかのように空を仰ぎ見た。

その姿をチャンスと思うよりも困惑が先だった俺はその場から仕掛

ける事が出来ない。

やがて顔を下し俺を見据え、奴はゆったりと構え言った。

「ここからは拳で語り合おうか」

「っ!!」

わざわざ、奴は俺と同じ土俵に立った。

その意味に俺は、奴の顔を見て安い嫉妬は捨て去った。
明らかに奴は俺を確かめに来ている。

わざわざ俺の土俵に合わせて。

ならば、俺も確かめなくてはならない。

何故、佳織を犯そうとしたのか。

何故、これ程の男がそんなバカをしでかしたのか。

「っ!!」

「おおっ!!」

その答えを、拳で求めて。

「貴様あ！真面目にやる気あるのか！」

「今んとこない！」

「ふざけるなあ！」

今、俺は奴の攻撃を悉く避け続けていた。

え？拳での会話？

なにその体育会系な禅問答、俺どっちゃかっていうと理系だし。

男の会話って風呂で裸でするもんじゃないの？

つかまともに殴りあえる訳ねーだろこんなゴリラと。

体格が違いすぎるわ。

だから今は我慢の時、舌戦で精神力と体力を削りながらチャンスを待つ。

「実は今もフレデリカさんにキスしてえとか思ってたんだろ」

「そんな訳あるか」

「ダウトォ！今明らかに『侮蔑』が見て取れたぞ！あーあー好きなんだー！佳織ちゃんのが好きなんだー！」

「貴様あ！」

ふってえ腕を少し腰を落とし避ける。

体格差を利用して今んとこ危なげなく避けてる。

動揺もプラスしてるが。

だが俺の話術はこれだけでは終わらない。

「でもさ、実際佳織ちゃんかわいいよね。なんか静かな頬笑みがグツとくるっていうか」

「むっ」

「母性を感じるっつか、なんか包み込んでくれそうっつか。お前も解るだろ？」

「そ、それはそうだが」

相手を反発させたところにこの共通の話題による会話。

「アレだな、佳織ちゃんかわいいよな。嫁にしたいわ」

「むっ、それはならんぞ。彼女は私の妃となる女性だ」

「でも可愛いものは万国共通の遺産だろ？そんなものを一人占めつてずるくね？」

「ふん、我は王だ。世界一の女性を伴侶として迎える度量を持ち合わせるのは我以外いない」

「でも男は女の為にヒーローにだって魔王にだってなれるんだぜ？」

「だが、王には成れまい。王とは産まれ持つて王だ」

「ああ、確かに佳織ちゃんがキング・オブ・無口っ娘だ。その奥ゆかしさと慎みを持った可愛さは異常と言わざる負えないが」

「だが――――」

「しかし――――」

なんかあの人達、決闘そっちのけで佳織さんを褒め合い始めちゃったんですけど。

「『死にたい』」

「ま、まあ、愛されてるだけまだ救いがあるじゃないですか」

私なら公衆の面前であんなことされたら確かに死にたくなるが。

「『いっそ殺して』」

「まあまあ」

「『あんなことされたことないからっ』」

「そ、それは否定できないですけど」

「ルカ様こんちゃーっすです」

そんな微妙な雰囲気の中に、こちらを窮地に陥れた救世主ではない方の救世主が現れた。

「ネリアちゃん、ナイスです！」

「？なんのことです？それよりなんかあのバカが決闘するって聞いてきたんですけど、あれ何やってんです？惚気？」

「『がはっ！？』」

「吐血！？」

どうやら救世主ではなく事態を混沌にさせる魔王だったようだ。恥ずかしさの上限に達してしまったようだ。そのまま突っ伏してしまう佳織さん、しばらく会話は無理そうだ。復活してこない佳織さんを見て溜息を吐き、仕方なく私は決闘？を見守ることにした。

「佳織ちゃん／妃のコスプレの優先権をどちらが有するか・・・」
「！」

互いに睨みあい、そして嗤う。

・・・だが、俺は、俺達は、分かっていた。

「くくく・・・」

「ふふふ・・・」

そう、こんな風に馴れ合うのは、今じゃない。

「たく・・・お前結構いい奴じゃん。なんで佳織を泣かせるような真似しちまったんだよ」

「さて、な。言い訳は好きじゃない、ただ俺が悪かったのだよ。だが、彼女を諦める気はない」

「そっか」

全部この決闘の後だな。

これ以上は蛇足だ。

本当に、男って奴は・・・。

拳を構えて相對するが、俺はそういえば聞きたいことが残っていた

ことを思い出した。

「あ、そういやこれだけは聞いとかなとな。お前、あいつに惚れた理由くらい教えろよ」

呆れた表情で拳を下げかけるが、溜息つきながらもフツと寂しげに笑って答える。

「別に、ただ一度、微笑んでくれただけだ」

「お前………かけえな」

同時に殴りかかった。

十四話 都合主義だなあ、この話気に入らないなあ（後書き）

ごめん、やっぱ俺にはシリアス無理。

十五話 彼が本当に惚れた理由。(前書き)

別視点ってムズいな。

馴染んだ思考と違うってこれ。

十五話 彼が本当に惚れた理由。

私は今まで声を出すことを躊躇っていた。

日系ハーフとしてドイツで産まれ育った私は、中学生になるまではドイツで暮らしていた。

だけど母子家庭で私を育ててくれた母がクモ膜下出血で他界した。親戚の保護を受けて日本に渡り、元々喋る方ではなかった私は更に喋ることができなくなった。

日本語って難しい。

なんで一つの文の上に三つの言語を織り交ぜてるのかが分からない。

難解な日本語への苦戦や、日本人離れた容姿が原因だったのか、私は同性にあまり良い印象をもたれる事が無かった。

陰湿ないじめに抗う言葉という一番の術すら、私は持たなかった。引き籠りがちになり、日本での日々は苦痛だった。

そんな日々が続いていたある日。

私の前に光り輝く扉が現れた。

それがまともなものだとは当然の如く思えなかった私は、その場から去ろうとしたが、何かに引き寄せられるように私は扉に呑み込まれた。

『よく来た、救うものよ』

「?」

扉を越えた先には傳いた大きな男の人がいて、そしてよくわからない言葉で喋りかけられた。

『貴殿を呼んだのは他ならぬ事情があつての事、それでも許して貰えるとは思わぬが、どうか我と共に戦場を駆け抜けて欲しい』

「!？」

スツと手を差し出された大きな手驚いたが、私は少なくとも相手が友好的であると思った。

よくわからなかったが、オズオズとその手を取ると、男の人はとても嬉しそうに笑った。

『オウツ！女だてらにすばらしい勇氣だ！』

「ピッ!？」

大きな声を出されてビックリしてすぐに手を引っ込めてしまう。

『お主の名を聞かせてくれぬか？』

「ッ！」

なぜかよくわからないけど、私は彼の言っていることが分かった。

早く答えなければ、そう思って焦った私は必死に答えようとした。
今までのような出来事は、もう嫌だったから。
そして、頭の中でカチリと音がした気がした。

「お主の、名は？」

「か、佳織、です」

「カオリ、か。良い名だな」

その声から感じ取れる感情は、とても暖かなものだった。

私が救世主として召喚された後、分かった事があった。

相手の声音から、大体の感情が読み取れるようになったのだ。

救世主としての能力は、己が求めた“救い”^{トラウマ}から生じるらしい。

なるほど、私にピッタリな能力だと思った。

言葉の壁によって苦しめられた私は、言葉に関するいざこざに救いを求めたのか。

なのに、私が未だに口下手で筆談なのは何故なんだろう。

長い引き籠り期間ですっかり馴れてしまったのだろうか？

だけど、その能力は必ずしも私にプラスばかりを与えた訳ではなかった。

救世主としての能力は強力で言葉による壁だけでなく、人の心の壁まで取り払ってしまった。

考えてみればそれは当然だった。

言葉は自分の心の中を相手に伝える手段だ、それが本当か嘘かを別にして。

私は、その本当か嘘かが見抜けてしまったのだ。

私に話しかけてくる人達は皆嘘ばかりだった。

重ねて、繰り返して、挟めて、巧みに私に話しかけてきた。

その内、人が嘘を付く前、微妙に表情やしぐさが現れることに気がついた。

そうすると、見かける人見かける人が、程度は違えど全員嘘を付いているのが分かった。

そんな中、彼だけは嘘を付かなかった。

彼は私を召喚した国の王だった。

武官が権力を握る実力主義なこの国で、彼は間違いなく王としての能力者で人格者だった。

自信にあふれていた彼は、まるで自分を憚る事をしなかった。

それがカリスマ的な支持を得て、彼はこの国をうまく統率していた。でもそれは同時に軋裂を産むことにも繋がっていた。

ある日、彼に贈り物が届けられた。

私もその様子を眺めていると、祝言を上げる人の言葉に違和感を感じた。

その中身に対しての自信と、彼に対する敵意。

思わず私は声を上げた。

《ダメ！》

ビシッとその場で硬直する人々、彼でさえ、苦悶の表情を浮かべてこちらを見ていた。

「なるほど、絶対性を込めた言霊か・・・、世界の意志に相反する我らにとっては脅威的だ」

「あ、あの・・・」

「しかしの、助かったぞ救世主よ。この贈り物は親戚からでな、受け取らん訳にはいかなかったのだよ。もちろん毒は瀕死程度に抑えてあるので、その後で摘発するつもりだった」

事も無げにそう言い切る彼を私は理解ができなかった。

だけどそれが、強がりでも虚勢でもなく、彼自身の本音であることが私は分かった。

「・・・派手にやったものだ」

「・・・！！」

能力の重圧で殆どの人は気絶してしまった。

自分が手に入れてしまった力の危険性と、仕出かしてしまった出来事に否応なしに身体が震えた。

「・・・しかし、自分の為だと思いと悪くない」

「・・・・・・・・・・！」

その言葉はどこまでもまっすぐで、勇気があって、力強かった。
だから、ほんのちょっと安心して、思わず私は彼に話しかけてしまった。

「そう、・・・・言ってくれと、うれしい・・・・です」

「・・・・・・・・・・」

彼は心底驚いたという風に私を見て、自覚の合った私は茹った顔を隠すように俯いた。

「はははっ！なんだ！お主もかわゆく笑えるではないか！これは愉快だ！」

「・・・・・・・・・・！」

抗議の視線を彼に送るが、どこ吹く風暖簾腕押し床に釘と言った様子で爆笑を続ける彼に、私はますます顔を赤くして俯いた。

これが、私が彼を信用できた切っ掛け。

でも私は知らなかったんだ。

嘘を見抜けても、私はそれ以上の考えには至らなかった。

どうして嘘を付くのか、その理由が。

人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱うのは莫迦莫迦しい。重大に扱わなければ危険である。

――――
芥川龍之介

「おおっ!!」

「フンッ!!」

互いに気合いを入れて死地の領域へと足を踏み入れた。

ここから互いに射程範囲内、逃げも隠れもできない。

この場に踏み入れたという覚悟のみが、己を律する唯一の理由である。

後の事情は邪魔だ。戦闘において必要なのは敵への殺意と己の意地だけだ。

初撃、打ち下ろすようなローキックをその丸太みたいに太い脚に叩きつける。

逆に弾き返されるような衝撃を受けるが、それでも姿勢は崩さない。動きの止まった俺に突き刺さすようなタックル。

すばやく腰を下し、体勢を整えて腕を交差させる。

車でも衝突したのかと勘違いする程の衝撃が全身に駆け廻り、俺の身体を大きく弾き飛ばした。

バランスを崩したたらを踏む俺に、踏み込んだ奴は短く腰を回転し

右打ちおろしを顎に放った。

それをクルッと回転しながら後退して避ける。

しかし奴はさらに追撃を仕掛けるべく踏み込んでくる。

踏み込みで一瞬浮いた脚をスライディングで掃う。

お互いに地面に倒れ込み、すばやく立ちあがって距離を取る。

中々決定打を入れる事は出来ない。

双方ともにこの殴りあいにはそう長くは続かないと踏んでいた。

俺の左腕の負傷は大きく、血を流していて動かすことは出来ても拳を握ることはできないし、全力疾走が思いのほか体力を削っていた。奴も魔力弾の暴発に巻き込まれた為か、全身に裂傷を負い、動くたびに血が噴き出している。

どちらともすぐに治療が必要なレベルの状態であるが、闘志の漲るその瞳に、それを気にした様子は無い。

相手を打ち倒す。

それだけが2人をこの場に立たせていた。

奴を倒すにはやはり片腕では無理だ。

なので俺は服を破き、右手で無理矢理拳の形を造るとそれに布切れを固く締めていく。

中指と親指が折れていたのもものすごい激痛が走ったが無視した。

奴の方も今すぐ治療が必要な重要な部分だけ止血していた。

「待たせた」

「こちらもな」

再び同時に殴りかかった。

王族として生まれた私は、幼い時からその為に育てられてきた。武勇と実力を慮る我が国の王たらんと自らを鍛え上げてきた。人心の評価も、臣下たちの令も、民たちの祝福も手に入れた。しかし、私は何故か満たされることが無かった。

そんな時、グリムリバーが現れた。

奴等の軍勢はもはや伝説上になったバケモノ達だった。一個一個が我が兵よりも勝り、その軍勢ともなると力の差は不覚に

も我さえ眉を顰める程だった。

しかし奴等は群れはしても軍としての体勢はない、その点だけは我々に勝機が合った。

大局ではなんとか互角に渡り合えても、どうしても辺境の村の民たちまでには手が回らず、むざむざ犠牲にしてしまった者たちがいた。それを防ぐために、救世主などという存在に手を借りる事になった。帝国の救世主の小娘の説得されて初めて犠牲に気付くとは何とも情けない。

小娘の力は確かに強大だったが、それを御せぬ帝国の様をみると、同時に危機感も沸いた。

だが召喚した救世主は、ちょっこんとした小動物のような弱々しい雰囲気を持つ無口な少女だった。

彼女は兎に角無口だった。

会話する時は何故か筆談で、一切の声を聞いたことが無かった。こちらが愉快に話しかけても、オドオドとかしこまるだけ。

これが救世主で本当に大丈夫だろうかと、帝国の救世主とは違ったタイプの少女に不安を感じざる得なかった。

それほどまでに、グリムリバーとの戦いは熾烈を極めたからだ。

そんな時だった。

我のことを嫉む親戚のバカ共が、俺を暗殺しようとしている事を知った。

なんと贈り物に毒を混ぜるという。

アホか。そんなんで国を盗られるならいっそのこと我が亡ぼすわ。しかしめんどくさかった奴らとの関係を切るいい機会だと思った。なので部下に指示して、毒を瀕死程度に抑えたものと交換してわざとそれを口にして死んだぶりでもして奴等が尻尾を出すのを待つ予定だった。

そんな思惑は呼んでしまったことを後悔し始めていた救世主の手によって阻止されてしまったが。

まさか絶対性を持った言霊による世界の変異が可能だとは思わなかった。

この力に敵うモノや縛るモノはありはしない、まさしく最強の能力だった。

だが青ざめる彼女は、その力を扱うには余りにも優し過ぎた。自分の為ではなく、人の為に初めてその力を使った。

彼女が人をあまり好まないことは、監視させていた部下からの報告や会話などでおおまかに察していた。

なのに、私の為に能力を使う事を憚らなかった。

そのことは純粹に嬉しく思えたから、

「……しかし、自分の為だと思いと悪くない」

「………！」

そう伝えると、彼女は小さく微笑んで嬉しそうに言った。

「そう、……言ってくれと、嬉しい……です」

その顔があまりにも綺麗で、私は動揺を隠す為にあえて大げさも振舞った。

「はははっ！なんだ！お主もかわゆく笑えるではないか！これは愉快だ！」

「・・・・・・・・！」

こちらを恨めしそうに睨んでるのに、その視線が全く持って可愛らしく見えた。

それと同時に、自分が今までとは違った見方でこの救世主を見ていることが分かった。

「はあ．．．はあ．．．」

「ふー．．．ふー．．．」

立ち続けた。

「だ．．．あっ！」

「ぬう！」

殴り続けた。

「があっ!？」

「ぐっ!？」

意地を張り続けた。

「おお．．．おおおおおおおおおおおおおお
おおおおお!!!」

「るおああああああああああああああああああ
あああああ!!!」

互いの身体はもう限界だった。

顎が大きく開き、腕は上がらず、足元はふら付く。
だが、

「ふんっ！」

「ぬんっ！」

バキヤツ！

殴りあう。

ばやけた視界で、回らない頭で、今にも倒れそうな身体で、互いの
眼光は衰えることなく相手を睨み続ける。

すでに会話は無く、ただ肉を打つ音と、相手の喉元を食い破らんと
する咆哮だけがこの場を支配していた。

観客もただ固唾を飲んでこの試合を観戦していた。

一撃一撃ごとに震える大気に畏怖し、聞こえる意地の咆哮に驚嘆し、
向かうべき不予測の結末に歓喜した。

「ぜええ・・・！」

今俺が立っていられるのは奴の行動によるところが大きい。

おそらくルカ子級もの実力を持つ筈の奴が、俺程度にここまで苦戦

するはずが無いのだ。

ならなぜここまで追い込まれているのか。

それは奴が最初から付けていた生傷が原因であることは推測できた。戦いながら得た情報、奴の性格を大まかに考えれば、その答えは自ずと分かった。

探したのだろう、彼女を。

たった一人で、自分が王であることなど自失してしまうほど必死に己の身体一つで、ここまで彼女を追って来た。

そのことを人が聞けばバカじゃないかと思うだろう。

俺もそう思う。

いくらなんでも慌て過ぎだろう。

しかし、今も俺の拳に呻く奴の必死さは、決してバカにできるものだとは思えなかった。

だからこそ、その決意を俺は否定することが出来なかった。

俺はこいつを説得することはできない。

俺の目的を、彼女を守るという事を俺自身ができない。

決闘の勝敗は既に問題じゃない。

俺は目的を果たせない時点で、この勝負は根本的な意義を失っている俺の負けだ。

こいつは死んでも彼女のもとへ行く。

俺はそれを否定できなかった。

だから――

「おあああああああああああああああああああああ
ああああ!!!」

「がはあつ!!!」

この決着は、俺の負けで締めくくられる。

そう思っていたのに、

「クトゥフ!!!」

「ツッがっ！！！」

彼女の声が聞こえてしまう。

彼女の声で踏み止まってしまふ。

「あああつ！！」

「ぐうつ!？」

拳を握るのをやめない。

地面に倒れるのを拒否する。

意義は無いのに意地を張る。

男なんて、それだけで戦えるもんだ。

少なくとも、

「がんばれっ！がんばれっ！」

よくわからんが、佳織あいっも応援してくれてるみたいだし。
どっちにかはわからんが、この声援が続く限りは、奴も意地を張り
続けるはずだ。

んっと、なんなんだこれ。

いつからこんな戦いになったよこれ。
もしくは初めっからこんな戦いだっただのかもしれない。

よくわからんが、本当によくわからんが、

「お前より先に――――」

「貴様より先に――――」

「絶対倒れん！！！！」

決着の時は近い。

見つけた。

そう思った。

足りなかったもの、満たされなかった何かが埋められていく気がした。

彼女こそが俺が求めたもの。

これが、俺の求めた答え。

手に入れたいと強く願った。

しかし、王である我と、救世主である彼女では立場上様々な問題がある。

彼女と我が結ばれるには、それなりの理由で説得する必要があった。初めての恋と呼んでもいいだろう、この件に関しては我はもはや普段のような平常に努める事が出来なかった。

一国の王である我と、救世主という存在である彼女が結ばれる理由。我が国は実力主義な思考がある。

血というものを強く重んじているのだ。

つまり、彼女の力を示せれば、私の伴侶足ると示せれば、それが理由となる。

問題は無い。

彼女が一言しゃべれば、それが奴等を説得する答えとなる。
反対意見も封殺できるだろう。

この時点で気付くべきだった、自分が冷静でないことを。

すべての暴力の頂点に立つ我が、彼女を引き寄せれば、彼女が傷つくことを。

我はある日、彼女に誘われ城の庭園に来ていた。

グリムリバーとの戦いは奴等の消息不明により終息しており、予断は許さないが休息をとれる程度に余裕はあった。

花など女の趣味、もしくは揶揄としてしか愛でたことが無かったが、彼女が世話をしたという一輪の花だけは何故か他と違って美しく思えた。

その笑顔を見た時、我慢できなくなった。

「ムラムラしたんですねわかります」

うるさい黙れ、回想まで浸食してくるな貴様。

「そらお前、救世主ですから」

なんでもそれで済むと思うなよ帝国の小娘。

「はいはい、分かりましたよ。後はごゆっくり」

………いったか。

……まあ、わかるとおもうが、私はその時彼女を襲ってしまった訳だ。

若造のように情けなく、必死に、縋りつくように彼女を求めた。

そして、能力を使われ、あげくの果てには逃げられてしまった訳だ。どれほど彼女を傷つけたのか、彼女を泣かせてしまったのか、私は彼女が救世主と呼ばれる程強くないことを知っていたはずなのに。私は愚かだった。

悔いて悔いて悔いて、その後悔は焦りへと変わった。そしてこんなところに来てしまった。

今は目の前の小柄な男と殴りあっていた。

男はまだ少年と呼べる年齢だったが、確かに何かを守る為に戦う戦士の目をしていた。

修羅場を潜って来た者特有の目。

戦ってみてわかった。

男に才能は無い、技術も足りない、この場を劇的に変えるだけの能力も無い。

ただ、経験だけは、積み重ねた研鑽だけは、何度も叩き潰されてきた絶望だけは、我が国にも居ないほど、感じられるほどに在った。この国に来るまでに重ねた戦いを差し引いても、こいつの諦めの悪さは脅威的だった。

あのまま戦っていれば容易に勝てただろうが、最後にどのような寝

首を搔かれるか分からなかった。

今、我は倒れようとしている。

すでに消耗していた体力が限界を迎えつつあるのだ。

彼女を諦める気は無いが、これから我は彼女を傷つけないと保証が出来ない。

だから、この男に任せてしまうのもいいかもしれない。

そんな愚かなことを思った時だった。

「がんばれっ！がんばれっ！」

彼女の声が聞こえた。

それだけで、まだ立てる、まだ踏み止まれる。

互いに満身創痍、彼我の実力など、もはや比べるまでもなく無きに等しい。

残る差は、拳に宿る己の意地。

奴が踏み込むと同時に我も踏み込んだ。

「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！！！！」」

両者の拳が、互いを叩き伏せんと迫る。

そして遂に、この決闘は終幕する。

「・・・・・・はあっ！」

先に倒れたのは、俺だ。
奴はまだ立っている。
つまり、俺の負けだ。

「見事だった、小僧」

「ああ、そうかよ」

嫌味にしか聞こえねー。

「勝者、ロウエル・マルクス！」

そう、姫様の宣言が響き渡った時、俺の中に入り込んできたのは寂寥感だった。

終わっちまったか。

くそっ、俺は、負けたか。

歓声も何も聞こえなかった。
このまま眠ってしまいたかったが、どうやらもう少しだけ間がいるらしい。

「・・・・・・・・」

「大丈夫ですか？クトウさん」

「ああ？大丈夫な訳ねーだろ」

こいつらがなんかいるし。

「つか佳織よお、さっき叫んでなかった？労いの言葉とかねーのか

よ」

「『のど痛い』」

「ああそう。んじゃ、俺の方はいいからよ。あいつとちゃんと話してあつてこいよ」

「・・・・・・・・」

「大丈夫だって、もうあいつも経ってるので限界だから」

「『・・・・・・・・ありがとう』」

「ん」

佳織はあいつのところにいった。

ま、この先は俺の関わりとこじやない。

どうなるかはあいつら次第だ。

できればそれが俺の好みに合う事を。

因みに俺はハッピーエンドが好きだ。

頭の軽いハッピーじゃなくて、痛みも苦しみも乗り越えた後のようなハッピーだぞ、間違えんな。さて、と。

「クトウさん」

「ルカ子、ちょっと泣いていいか？」

ルカ子の言葉をさえぎってそう言った。

「……お疲れ様です」

「ああ……くそっ、負けちまった」

俺は、ヒーローになれないのか。

「それは違いますよ」

「……」

「あなたは見つけたじゃないですか、『殴って説得する』以外の方法を」

「詭弁だろ、それ」

「慰めになりませんか？なら、教訓です」

「はっ、厳しいな。師匠」

「はい、私は先生ですから」

そう言って笑うルカ子。
くそっ、マジで情けねえ。

「ちょっと、眠るわ」

「ええ、おやすみなさい」

これはもうパターンだな、そう思いながら俺は意識を落とした。

十五話 彼が本当に惚れた理由。 (後書き)

雑になったけど完成。

短編祭（前書き）

祭・・・それは狂宴。

楽しみすぎてついつい財布のひもを緩め過ぎてついでに股の方も緩くなってしまう魔の儀式。

さあ、そんな伏せられた物語の紐を解き明かそう。

そんな大した話じゃないけど。

短編祭

かっこいいセリフ

「失って、失って、気付けば何もかもが無常だったとしても、俺は戦う。それ以外は手に余るからな」

・
・
・
・
・

「長いな、もっとヒーローの本質に迫ってみるか」

・
・
・
・
・

「独善だって？ ああ、他人を救いたいという身に余る欲望だな」

・
・
・
・
・

「うーん、中々良かったが万人受けするかは微妙だな。こう、決め台詞的な」

・
・
・
・
・

「独^{きめうせいしめ}世者ではない、独^{ヒーロー}善者だ。間違えんな」

・
・
・
・
・

「いい！今のすごくいい！間違えんな、か。これ口癖に使えるな」

「・・・・クトウさん、何やってるんですか？」

「かつこいいセリフ考えてた！」

「はあ・・・・」

間部功刀、十六歳。

未だ厨二病から抜け出せないお年頃。

その日その日が一年中で最善の日である。
——ラルフ・ワルド・エマーソン——

初めてのおつかい

ある日のことだった。

「クトウさん、おつかいを頼んでいいですか？」

「あん？おつかいだあ？」

ルカ子におつかいを頼まれた。

「せっかくの休日くらいゆっくりしたかったぜ。でもまあ、街に出るのも久しぶりだな」

袋を振り回しながら街の往来を闊歩する間部くん。

彼はこのハイ・エウルのペルムドン王国に救世主として召喚された男の子。

シックスティーンにしては163と平均身長より結構低い小柄な、ヒーローを目指すオタク少年なんだ。

さあ、今日は彼の異世界での初めておつかい。

しっかりおつかいを成功させることが出来るでしょうか？

「えーと、リストリスト」

どうやら忘れないようにリストを持ってきているようですね。
えらいえらい。

「あ、俺のまだ文字読めねえじゃん」

あらら、間部くんは召喚されてまだ日も浅いから、どうやらメモを読むことが出来なかったようです。

「ま、店の人にリスト渡せば解決だな。さて、地図地図」

しかしアツサリ解決への道を思い付くと、今度は地図を眺め始めます。

「ルカ子エ……」

あら？どうしたのでしょうか？

「絵……下手過ぎ……」

え？……ゴホンゴホン。

せっかく書いてもらった人に失礼だけど、どうやら地図が読めないくらいひどい有様だったようです。

……そんなにひどいですかね？魔方陣ならうまく書けるんですが……ゴホンゴホン。

さて、初めてのおつかいの序盤でさっそく困難にぶつかってしまった間部くん。

どうやってこのピンチを乗り越えるのか？

「あ、ブライアンじゃん」

「お、クトウか？」

どうやらお友達を見つけたようです。

彼の数少ないお友達、ブライアン・ファクトル。

クネール教導隊の副隊長を努めるとても優秀な騎士です。

もとい、彼女の犬とも呼べる人です。

「どうしたよ、こんなところで」

「ああ、今週はうちが警邏の担当なんだけどさ。あいにく同行してた隊長がどっかいっちゃってさー」

「ああ、酒かつ喰らいに行ったか」

「多分な」

あらあら、お友達と仲良く世間話。
間部くん、とても楽しそうです。

「お前の方はどうしたんだよ」

「あん？・・・それがさあ、ん？」

おや？間部くん、何かに気付いたようです。

「あ、そうだよ。ブライアン、これ読んでみてくれ」

「え？何これ、買い物リスト？」

分からないなら、分かる人に読んでもらおうという訳ですね。
よくできました。

「あんがとなー。後姐さんならたぶん橋の下の居酒屋通りにいると
思うからよ」

「お、マジで？んじゃちょっと覗いてみるわ」

ちゃんとお礼もして、目的地へと向かう間部くん。

親しき仲にも礼儀ありですね。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

おや、やっと目的地へ着いた間部くんの顔が引きつっていますね。
一体どうしたんでしょう？

「なあんかやばあい人達が溢れるところにきちやったぞおう・・・」

どうやら目的地は裏通りだったようです。

大きな都市ではこのような場所があるのは仕方ない事なのですが、逆にこのような場所にお宝が眠ったりしているものなのです。

間部くんはこの如何にも危なそうな場所から無事おつかいを果たすことが出来るでしょうか？

「帰るか」

どうやら諦めてしまったようです。

がんばって！君ならできるよ！

「・・・と、いいてえがなあ。帰ったらルカ子怒るよなあ」

踵を返そうとして踏み止まる間部くん。

がんばったね！もう少し頑張ってみよう！

「泣き顔もそそるんだが、やっぱり女は笑顔だよな」

ひゃわっ！？

あ、ええっと、く、クトウさ、いや、間部くんはおつかいを再開し始めました。

「おっちゃん、この店しらねえ？」

「ああん？なんだ坊主、ここあおめえみてえのがくる場所じゃねーぞ」

「おつかいでさー」

「なるほど、なら坊主、ここのルールはしってつか？」

「しらねーけど、これで足りるか？」

そう言って懷から一枚の銀貨を取りだす間部くん。

「おう！中々分かる坊主だな。実際はそんなにいらねえ、酒を一杯おごってくれるだけでいい」

「今回は初回によりサービス、今後も世話になるかもしれんし、貰っというて」

「ハハハハハッ！歓迎しよう！」

「んじゃ、場所の情報ありがとな」

「……なんだかあっさり障害を突破していきますね。そうして遂に目的地に到着した間部くん。ちゃんと買い物できるかな？」

「これくださーい」

「あん？どれどれ……」

あっさり店員に頼る間部くん。

普段は女の人以外なら尻込みしない間部くん。むしろ苦手な女の人すらセクハラを働くその壊滅的なコミュニケーション能力からは想像もつかない程見事な対応です。

「これで全部だ。会計は金貨32と銀貨59になるよ」

「めんどろだなあ……紙幣とかありゃいいのに」

会計も済ませて買い物完了。

でも油断したらダメだよ、帰るまでがおつかいだからね？

「今日めんどろなことに巻き込まれちゃったなあ。訓練がないからしょうがねえけど」

元気にヒーローを目指す間部くんは、三人の師匠から厳しい訓練を

受けているんだよ。

お蔭で鍛えた体に無駄な脂肪は無く、引き締まった体はすでに同年代では完成に近いものになっているんだよ。

「運動がてらに走って帰るか」

運動しながら帰るのはいい考えだね！

「ルカ子の反応も楽しみだしな」

ぶふおっ！？い、いきなり不意打ちを……！

「……ルカ子、何してんだ？」

はっ……！悶えてるうちにすでに到着していた！？

「その水晶、俺が写ってんな」

「ち、違うんですよクトウさん！わ、私は別に心配だったわけでは……！」

「あ、うん。それより、ご指名の品だ」

「あ、ありがとうございます」

「ああ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

き、気まずい。

「なあ、ルカ子」

「え、はい・・・」

「嬉しいか？」

「はい？」

「いや、やっぱいいわ」

「はぁ・・・・・・・・」

「んじゃ、俺は部屋に戻って寝るわ」

そのまま部屋を出ていくクトウさん。
私はその背中を眺める事しかできなかった。

「ふう・・・なんとか誤魔化せましたか・・・」

自分ではまったく理解できない変化。

クトウさんに対する感情。

それを制御できない自分。

それらは私にとっての初めての感情で、おそらく聞けば十中八九同じ答えが返ってくるのだろうけど、私はそれを受け入れる覚悟が無くくて。

だけど日増しに強くなるこの感情は、私にも変化を与えていた。

今はそれを持て余すだけだけど、いつか、この想いを覚悟が持てるようになったいつかは――――――

「そんな権利、私には無いんですけどね」

男性陣の性癖―（誰得）

間部功刀・アナヌー、右手が恋人。

「ちょっとやり過ぎると漏らしちゃうんだけどな」

ブライアン・ファクトル ・床オナ派。

「僕になんか文句あつかおるあ」

グラハム・イエル・グウェスル ・女には困ってないのでセクロス派。

「え？性処理ってセクロスでするもんじゃないの？」

女性陣の性へ・・・バキヤゴキユメキメキメキ・・・！

ネ「全く、やるせかってんです」

クル「本当に無粋な企画だな」

ル「あ、危な〜」

ミ「そう？ 因み私はクリスト・・・」

ル「す、ストップーーーーー！！」

未来編のある日の出来事

「なあメタボさん」

「なんだいクトウくん」

「うんこしたいんだけど」

「垂れ流しなさい、ここは戦場よ」

「ごめん、おしっこもしたいんだけど」

「我慢しなさい、水分は貴重よ」

「後えっちしたい」

「俺もしたい」

下水

「手伝えます」

「断る」

「・・・・・・」

「ああ！すいません！だから指だけは！指だけは許して！！」

「最初から素直にそう言えです」

「くそっ。で、なにすんだよ」

「下水処理です」

「えっ」

よお、この開始も久しぶりだな、間部功刀だ。
魔法のある世界にも下水ってあったんだな。
道理で俺以外のクソッ垂れを見かけない訳だ。

中世っぽいのに誰も城の庭で野糞しないし、道端にはうんことか尿が自己主張していない。

この世界の科学技術がどれほどかは知らんが、どうやら俺が思ってたよりすごいっぽい。

そんな最新技術に異常が発生したらしい。

ツインテと共に下水の存在している暗い下水道へと訪れていた。

「勘弁してくれよ。昨日お前が飲ませまくったから二日酔いなんだぞ」

「ふん、あの程度で潰れるのが悪いんです」

「てめえ……その言い草は許されざるぞ。もう飯作らねえ」

「う……、そ、そうです、私が悪うございました……」

「おう。で？なんで俺を呼んだよお前」

態々俺が付き合う必要なかっただろう、この仕事。

「そ、それはあれです、あれ」

「あん？ハッキリ言えハッキリと」

「だから……ごによごによ……」

「あ？だから聞こえねえって」

「暗いところが苦手だからって言うてんです！」

「ほう」

ほうほうほうほうほう、それはそれは。

弄り甲斐が、あるんじゃないかい？

「へー、ネリアちゃんは暗いところが苦手なんだー（ニコニコ）」

「ぐう．．．！ルカ様達みんな仕事じゃなければこんな奴誘わなかったのに．．．！」

「あ、あそこになんかいる」

「?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

物凄い勢いで抱きついてくるツインテ。

あまりの衝撃に胃から上がりてくるものを来るモノを感じる。色気より先にこういった感情が先立つのは流石は俺とツインテの關係。

こいつに抱きつかれてもうれしくない、むしろ痛かったのでムカついた。

[illegible]

！」

「う……うっさ、い……です……」

……予想に反してかなりしおらしい反応。
この震えかた……本気で恐がっている。

あー……萎えた。

なんだよ、からかう気失せるじゃん。

こいつはもつと反発してくるのがおもしれえのに。

とりあえず痛いくらい服を握ってくるツインテの頭をポンポンと叩いて安心させてやる。

「その後、ツインテを見たものはいない」

「不吉なナレーションしてんじゃねーです」

脇腹殴られるが、震えは止まった。

その時、俺の上にのしかかっているツインテの向こうの暗闇に、何か蠢くものが見えた。

因み何故暗闇の中で目が見えるかというと、発光魔方陣を支給されてそれを使っているからだ。

魔方陣、もしくは魔法って付けときゃ大抵なんでも説明できる。超便利。

そんでもってその蠢く何かは、徐々にこちらに向かってきていた。

「……おい、ツインテ」

[illegible]

「おおい?! 大丈夫か!？」

恐怖がぶり返したツインテが恐慌状態に陥ったようだ。普段の様子からでは想像もつかない程うろたえている。このままだと埒が明かないのでツインテを抱きしめ、突如襲いかかって来た何かから跳びのき避ける。

ベチヨッ！と音のするそれを注視すると、プルプルと液体的なものが動いている。

見覚えのあるシルエットなそれは、ドラクエでは雑魚として扱われているが実際敵に回すと厄介気回らないモンスターの代表格と俺がひそかに思っている存在、スライムだった。

「すげえ！ スライムだ！」

「は？ って何抱きしめてんですか！ は、離すです」

言われた通りペツ、とそこら辺に捨てる。
尻もち付くツインテ。

「いたっ！？何するです！？」

「いや、離せつつたし」

「だっ、だからってレディーを放りだすなんて失礼にも程があるです！」

「レディーwwww」

軽口叩ける程度は回復したようだな。

ギョバツ！！

スライムが来たので避ける。

「んで、なんでこんなのが居んのよ」

「どうやらこのじめじめがお気に召したようです。下水の不調の原因は多分こいつです」

「んじゃどうする？」

「駆除するしかないです、放っておくとめんどうです」

「おっけ、がんばれ」

「え？」

「えっ」

すごく驚いた顔をするツインテ。
いや、俺には無理だろ。

「お前な、打撃が効かない敵を前に拳闘士モンクに何期待してんだよ」

「私も拳闘士モンクです」

「お前はモンスターだろうが、ビームだす拳闘士モンクってどこのサイヤ人ですか」

「んじゃ、体勢整うまでおとりよろしくです」

「へぁ・・・？」

即答でなんかすごいこと言われた。

「それくらいなら役に立つです」

「いやいやいやいや、あれでだぜ？」

指差す方向には下水道に集結してきた液状の物体。

逃げる場所も限られた状態であれをどうやって避け続けろと。

「気合い？」

「ざけんな、死ね」

「お前が死ねです」

「はあゝ・・・わかったわかった。やるからとつとやれよ」

「はいはい、です」

「ところでお前の役職って結局何よ。下水の調査とか下っ端の仕事じゃね？」

「んー姫様も教えてくれないんですけど、『ネリアにピッタリのお仕事』と言っていたのでそんなに疑問に思ったこと無かったです」

「・・・・・・・・」

ちょっと目頭押さえた。

そしてできるだけこいつの仕事を手伝ってやろうと思った。

「んじゃいきますです」

「おう」

結局ツインテが下水道にお空が見える程の穴をぶち開けてルカ子に俺ともども怒られた。

地球の品ってどうなったの？

ク「学校の放課後だったからそんな荷物なかったから制服と勉強道具と辞典とか後サボり用の同人誌が少々。後は、携帯とかそんなかな？」

服はどうしてるの？

ク「貰ってる。流石に毎日同じ服は着ない。因み寝るときは全裸派」

ルカ子のことはどう思ってるの？

ク「可愛い」

ネリアのことはどう思ってるの？

ク「死ぬ。でもあいつも苦労してんなあ」

クネールのことはどう思ってるの？

ク「結婚したい」

短編祭（後書き）

次回からは新章！

十六話 なぁ・・・誰か俺に恋愛の仕方を教えてくれよ（前書き）

恋愛ものの小説を読んできると死にたくなる。

学園モノは恋愛じゃなくてテンプレって感じがするからまだ大丈夫
だけど。

十六話　なあ・・・誰か俺に恋愛の仕方を教えてくれよ

本編に関わりの無いプロローグ

「なあ、ブライアン」

「あによ」

「童貞って神聖なものだよな」

「当たり前だろ、何言ってるんだお前」

「じゃああれ何よ」

「ああ、今夜の十時にな。わかってる、先に待っていてくれ」

「グラハムエ・・・」

「奴め、俺達の敵だ」

「よお、待たせたな」

「死ねえ！」

「うお！？何しやる！」

「このリア充が！義兄弟の誓いを忘れたか貴様！」

「え？あの似非三国志みたいなのか？守る訳ないだろ、童貞なんて」

「貴様ああああああああああああああああああ！！」

「大体子孫残せないならもう生物として終わってるよなwww」

「こいつ・・・ッ」

「言っではならないことを言っただぞ・・・！」

「まあ、お前達が思ってるほどセクロスっていいものじゃないぞ？子供出来たら責任とらなきゃならないから、それ目当ての女の子を見極めなきゃならないし。病気もあるし、後そんな気持ち良いってわけでもないしな」

「そういうこっちゃねえんだよ！」

「そうだそうだ！」

「ならそういう店で捨ててこいよ。その無駄な附属品」

「い、如何わしい店はダメだと思えます！」

「そ、そうだと思います」

「めんどくせえなあ・・・」

諸君は必ず失敗する。成功があるかもしれないけど、成功より失敗が多い。失敗に落胆しなさるな。失敗に打ち勝たねばならぬ。――

大隈重信

「おっす、来たぜ」

「ええ、今から事情を説明するわ」

よう、俺だ。

あれから二週間経ったある日、こうして姫様に緊急招集をかけられたのではせ参じた訳だが、そのメチャクチャ引き締まった顔に今回もなんかやばそうだな〜という不安がのしかかって来た。

「グリムリバーのモンスターが近辺に出没したわ」

「『またですか？今週で三度目ですよ？』」

因みに佳織の奴は未だにこの国に居座っている。
正式な書類云々抜きに、ロウエルと話し合った結果だそうだ。

詳しい事は聞かんかった。俺敗者だし。

「しかも今回は毛色が違うわ。早急に片付けないとヤバいことになる」

「数は？」

「一体よ」

「一体？ならすぐに済むんじゃないか？」

「今回は毛色が違うって言ったでしょう？そいつが面倒なくらいバカ強いだよ」

強い、の部分強調するくらいだから相当強いのだろう。
どんなモンスターなんだ？

「グルムドリアもこれに噛むことになってるわ。あなた達にはそいつの討伐をお願いしたいの」

「了解。死なない程度にがんばるわ」

「『わかった』」

「ルカトエーゼ達は今回は首都防衛や各主要都市の防衛で動けないし、スピード勝負だから少人数で動いて貰うから、行きの人数はあなた達含めて三人」

「あと一人は？」

「僕だ」

声の主はブライアンだった。

いつもの鎧とは違った装飾の重厚な鎧を着込み、礼を取ってから入室し俺達となりへ並ぶ。

こいつってクルーネ姐さんとこの副隊長じゃなかったか？
こんなところ居ていいのかよ？

「君達が心配なんだよ、隊長は」

「それにルカトエーゼ達もね」

「ああそう」

なんて反応すりゃいいのかね。

素直に心遣いを喜んでおくべきか、信用されない自分の力不足を嘆くべきか……。

ま、この前も負けたばっかだしなあ。

今回もキツそうだが、やれるだけやってみますかね。

「よく来たな」

「お、グラハムじゃん。なんでここに居るんだ？」

「私は中央に嫌われてるからな。これもさっさと死んでくれることを願われて、な」

「お前も苦労してんなあ」

作戦の前にグルムドリア側と合流することになっていた街に着いたら、出迎えは我がソウルブラザーズが一人、グラハム將軍だった。皮肉にもあの大軍を相手取った時と同じ街だったのは何かの暗示だろうか？

ペルフォニアだっけか？

その後といくらか談笑した後、早速作戦概要を話し合う為に部屋の

中に入る。

「今回の詳細は聞いているか？」

「まあ大体な」

馬車に乗ってる間説明された内容は、これまためんどくさそうなのだった。

前回の強襲から流石に防衛の為に国境の監視などを強化したグルムドリアは一隊を駐屯させていたが、ある情報を残したまま連絡を途絶したという。

その内容と言うのが『バケモノが現れた。まっすぐこちらの首都に向かっている』、とだけ。危機感を煽られたグルムドリアの上層部は、ペルムドンにも調査を依頼。

魔法技術によって安全かつ迅速に調査が行われ、結果はともども無いものだった。

一体の巨大なモンスターが真っ直ぐにグルムドリア首都へと向かっていた。

大陸中で活発に交換されているグリムリバーの情報によると、そのモンスターは今まで三つの国で救世主と戦いながらも逃げのびている強力な個体であることが分かった。

進行速度は徒歩の為遅いが、勝ち合えば甚大な被害を被ることは確実。

その為二国合同で、モンスターの討伐を測ることになった。

やばい匂いがぷんぷんするぜ……。

「大体は入ってるな。よし、もっと詳しく情報は？」

「後はモンスターの名前くらいかなあ」

「わかった。ではこちらの方に映像を用意してある、そっちを見てから具体的な作戦を練ろう」

「映像！？」

「『映像！？』」

そんなのこの世界にあったの！？

「ん？・・・ああ、お前ら救世主だったな。最近発明されたんだが、遠見の魔方陣を応用したものなんだ。ありや便利だぞ」

「マジかよ。盗撮は？」

「最近問題になってるな。女性の裸を盗撮されるという被害が出てきてるが、それでも一部の国じゃ研究してるぞ」

「一体何なんだよこの世界」

なんでも魔法ってつけりゃ・・・いや、それは科学も一緒か。
この世界にはこの世界の常識がある。
いい加減馴れようぜ俺。

「これが商業化されれば大分儲かるだろうな」

「あ、そこまで進んでるんだ」

ハイ・エウルパネエ・・・。

「マナベ、入るぞ」

「ダメです」

「いやお前には聞いてない」

グラハムがドアを開こうとするのを、割り込んで阻止する。

いや、わかってたけどさ。

救世主の俺と佳織が来てるって事は当然あいつも来てる訳で。

結局戦闘直前のアレから会ってないのは気にしていたのだが、連絡も一切ないのでどうなったのかはしらん。

自分で連絡すればよかったのだが、何となく今さら改めて会うのは気まずかったので放置していた。

というわけで、兄妹の再開は約一カ月ぶりになるわけで。

そういやもうこっちの世界に来てもうすぐ四カ月か、などと現実逃避しても、時間と事態は止まってくれず。

「その声は……兄さん!？」

ほれ見ろ、ドアが開かれていくじゃないか。

グラハムが開こうとするのを阻止していた為ドアの目の前に居た俺は、思いつきり顔を強打する。

痛みに悶える俺。

歓喜する妹。

オタオタする佳織。

突然の事態に付いていけないグラハム。

空気ブライアン。

作戦会議が開始されたのはこの十分後のことだった。

やべえ。

この一言に尽きた。

映像で見たモンスターの外見はそろそろ凄まじかった。

三メートルはあろうかという鎧に包まれた三つ首の巨体。

胴体も三つ、腕も三つ、頭も三つ。

一人は巨大な剣を、一人は巨体を覆い隠す程の盾を、一人は高き頭上より槍を。

このモンスター、ギリシャ神話のゲリュオーンのようだと思った。詳しく知りたい奴はググれ。

見てくれだけでも強そうなそいつが、映像の中で一人の剣を持った

少年と戦っていた。

少年はどうやら救世主のようだが、俺と違って正統な剣術を使った真っ直ぐな戦いを見せてくれた。

魔術や魔方陣も派手に使っているが、モンスターは巧みに武器を使いこなし一切の攻撃を寄せ付けない。

それでも食い下がった少年は、遂に渾身の痛撃を与える事に成功した。

崩れ落ちるモンスター、勝利を噛み締める少年。

しかしその一瞬の油断をモンスターは刈り取った。

致命傷には至らずとも、脇腹を槍で抉られ苦しそうな少年。

モンスターは追撃せず、傷ついた身体を引き摺りながら去っていく。映像はそこで終りだった。

ていうかこんなのどこから撮ってたんだ？

聞いてみたら少年を慕っていた王女様がその雄姿を納める為にこっそり撮っていたらしい。

……ちっ、こいつリア充かよ。

総合してみるとこいつは手強い。

特別な能力が無い代わりに兎に角タフで、その上動きが人間的だ。

強靱な身体、強固な鎧、強力な武器。

あるのはそれだけなのに、単純だからこそその強敵だった。

まともにやり合うには俺なら分が悪い。

ていうか準備期間さえあればもっと効率的な手が打てるのに毎回毎回なんでこんなにも急なんだ？

今回は俺もいろいろ用意してきたが、あれ相手だと効果ありそうな策は数えるほどしかなかった。

純粹な強者に小細工は通じない。

通るのは幾重にも重ねた戦略と戦術のみ。

今のところ俺にはどっちも欠けてる。

戦略を考える程の頭は俺にはない、悪くみはできるけど。

戦術は奴に通用する程の修練を重ねてるとは口を裂けても言えない。周りを見てみるとみんな結構深刻そうな顔をしていた。

家の妹を除いて。

「……おい美衣、お前なんか策でもあんのか？」

よくぞ聞いてくれました、とでも言うような笑みを携えた美衣は、椅子から立ちあがってこう言った。

「私なら、あれを三分もあれば倒せるわ」

「ペッ！寝言は寝ていえこのヒンヌーが」

「ちよっとお！？」

自信ありげだったのがムカついたので、取りあえずつばを吐き捨て罵倒しておく。

ここら辺の遠慮はいらない。なぜならあいつはMだから。

「ちよ、地の文で何勝手に人の性癖改変してんのよ！」

「地の文に突っ込んでくる貴様の方がなんなんだよ！」

「とりあえず、私の作戦を聞きなさい！」

「おう、言え」

「私が突っ込む」

「却下、座れ」

「何よ！私はあの時とは違うんだからね！あれくらい余裕よ！」

「おいグラハム、実際どうなんだ」

「………あるいは可能かもしれんな」

「……何？」

ガチでグラハムを睨みつけた。
もしふざけていたら殴る。
ブラザーでも殴る。

「いや、彼女なら可能だ」

「どういことですか？彼女はまだ召喚されて一カ月程度しか経ってないでしょう？」

今まで事態を静観していたブライアンがグラハムに問いかける。

「彼女の眼なら、おそらく可能だ」

「眼ですか？」

「ええ、私はこの能力の事をこう呼んでいるわ」

美衣が堂々とする姿に、俺はよくわからないが鋭い寂寥感を覚える。突然の感情に俺が戸惑っていると、美衣は自信の満ちた笑顔で静かに言い放った。

「ライトビジョンズ
俯瞰視考」

十六話 なぁ・・・誰か俺に恋愛の仕方を教えてくれよ（後書き）

次回は戦闘に入りまーす！

十七話 ボーイズビーアンビシャス！意味は特にない。（前書き）

最近学校行き始めたから更新がまちまちになるかも。

「うっせうっせ、近寄るな童貞！童貞菌が移る！」

「お前それやめろ最近クラスの子からそんな感じで避けられたことがあるんだからぶち殺すぞてめえ」

「プギャーwww」

「ていうか俺と同レベルで変態の癖に何一步先に行っちゃってんの」

「引き籠りだったけど、流石にこれだけ長い期間いれば馴れるよ、女性。人としても大体社会復帰するよ、普通は。性格はぶれてないけど、考え方くらいは適応するよ」

「私とは遊びだったのね！」

「誤解を生む様な発言はやめろ！つかない？むしろ問題は俺よりお前だろ？」

「あ？何がよ」

「お前はどれだけ地雷原の上でタップダンス踊れば気が済むんだ。何角関係だよ既に」

「いや、ちゃんと断ってるし」

「逃げてるの間違いじゃないか？」

「……………それでも俺は受け取れねえな」

「……………難儀な奴だな」

状況？何が状況だ。俺が状況をつくるのだ。

ナポレオン・ボナパルト

「それからどうした」

「モンスターの目の前だね」

「俺達の役目は」

「君の妹さんが一撃必殺の為の時間稼ぎもといおとり」

「そう、俺達は囷。兎に角全力でぶち当たってこいつの注意を引かなければならないのだが」

「だが？」

「帰っていい？」

「ふざけんな」

「だよね」

眼前に聳え立つ絶壁にも似た威圧感を放つ鎧を着込んだ戦士風のモンスター。

しかしモンスターの風貌は正に異形。

サイズからして桁違いなガタイの顔と腕と胴が三対ずつ、全てが重厚な鎧に包まれている。

そして丸太と呼んでも差し支えない太さの三対の腕にはそれぞれバカでかい武器を持っている。

四メートルはあろう大剣、身体を覆い尽くせる盾、そして一番海拔の高い腕には必殺の一撃を放つ重槍が握られている。

ボス、と思わず呼んでしまう程威厳を持ったモンスターに尻込みせざる負えない。

いやー無理じゃね？無理っぽくね？

俺の拳が届く前に身体が砕け散っちゃいそうだよ。俺の勝ち気は既に小康状態だが。

横目でブライアンを見ると、眼を瞑って何かに祈っていた。

だよね、お前も不安だよね。

ポンポンと肩をたたいてやると、ブライアンは苦笑して礼を言った。

ていうかさつきから目の前にいるんだが、一向にモンスターが攻撃してこない。

一体どういう事だろうか？

このままなら良いのだが、心成しか兜に隠れた三対の目線が降り注がれているような気がする。

とりあえずブライアンと溜息つきながら構えると、モンスターもゆったりとした動きで武器を構えた。

どうやら俺達が戦闘態勢に入るのを待っていたらしい、妙に律義なモンスターだった。

ゴッ！と耳鳴りを感じる。

左の剣は俺が、右の剣はブライアンが受け止めていた。

ギリギリ、と物凄い力で押し込まれ始めたので俺とブライアンは剣を潜り抜けるようにして受け流した。

同時に剣が地面を揺らす、その威力に顔を引き攣らせながらも俺は身体強化・容脉ようみやくを解き、爪を元の形に戻した。

身体強化・枝を更に部分的に限定することで強化と言うよりも特化と言える進化を遂げたのが、身体強化・容脉ようみやく。

ようはエバーミングのフランケンシュタイン達を参考にした新しい身体強化魔術なのだ！

先程の大剣は、容脉ようみやくで特化し変形させた爪で防いだのだよ！

俺も無駄に日々を過ごしていた訳ではない。

こういう中二的な技を日夜考え研究しているのだよ。

今んとこ考案した中で完成してるの容脉ようみやくだけけど。

しかしこの技、結構問題がある。

例えば爪の変異特化は比較的負担は少ないが、他の部位だと体力喰うんだよなあ。

やはりあれはフランケンシュタインという肉体改造を施してある個体が使うからこそ扱えるのであって、普通の人間には荷が重過ぎる。だから現在俺が問題無く使用できるのは皮膚特化の爪の変異のみなんだよね、十分すぎる程戦いの幅が広がったが。

それでも剣、盾、槍の三連撃は厄介だな。

こちらに攻撃する隙がまるで生まれない。

しかも一つ一つの攻撃が重く、まともに打ち合っていれば三連撃の三週目あたりで潰される。

今は枝で脚力と腕力を強化し避けているが、ここまで近づいていれ

ばいずれは動きになれて攻撃を的確に当ててくるだろう。そうになったら問題になってくるのはどう攻撃を防ぐかだ。

何度かは防げるが、そう何度もあるの攻撃と打ち合う事は出来ない。一応ブライアンとの連携は一通り話し合っていたが、こいつに対しては小細工と呼べるものでしかない、効くかどうかは微妙だ。

なら、一旦距離を開けるか？

しかしこいつに生半可な攻撃は通らない、映像で見たタフさは脅威的だ。

先程から避けるのがギリギリになって来た。

剣速も上がり、動きにムラが無い。

どうやらこちらの動きになれてきたらしい、これ以上はこの距離を保つのは危険だ。

一回くらいなら大丈夫か・・・！？

考案した技の中で一番危険度の高いが、その分の見返りもまた大きいものを思い浮かべた。

初めあれを使った時は全身筋肉痛で三日は動けなくなったが、今なら二分は動ける。

それに、命あつての物種という奴だ。

すべこべ言ってられない。

術式を構築し、ブライアンに目配せして指で離脱を合図する。

「身体・・・特化！」

心臓が大きく跳ね、身体中に熱い血液が流れ渡ってゆく。

視界も、思考も、身体も、俺と言う存在が急激に加速していく。

その時、全ての動きが停止したような錯覚を覚える。

もちろんそれは錯覚で、モンスターの重槍は俺を挟み取るべく迫っているし、ブライアンは俺の変化に目を見張っているのが分かる。しかしそれらの動きはひどくゆっくりなように感じた。

俺はモンスターから距離を取るべく、未だに驚く顔のままのブライアンを抱きかかえてモンスターから背後二十メートルほど距離を開ける。

そして術式を解いた瞬間、身体に重力と時間がドツと戻ってきた。俺は荒い呼吸をどうにか抑えようと深呼吸しながら膝を付きブライアンを手放す。

「イテッ！」

「ふうー・・・ふうー・・・！」

二分と言ったが、もしかしたら一分持たなかったかもしれないなと思ひ直し、あの技はしばらく封印することにした。

「おい、今の何だ。ギュバツ！ってなったぞ」

「ああ？・・・ああ、あれだよあれ。ギア2ギア2」

「今著作権的に危ない事言っていないか？」

「著作権の概念があったことにおらあ驚きだよ」

ア！！！！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！？」

俺の動きを止めようと羽交い絞めにしていたブライアンの拘束を解いて巴投げの要領で投げ飛ばす。

砲弾と化したブライアンはそのままモンスターの三つの頭に全身でぶつかり、そのまま仰け反らせて大きな隙を作った。

「今だ美衣！」

「まったく！無茶し過ぎよ！」

いつの間にか隣に現れた美衣に叫ぶと、美衣さんは猫のように身体を縮めたかと思うと地面と大きく挟りながら猛ダッシュを開始。真っ直ぐにモンスターへと向かっていく美衣の背中を、俺はどうしようもなく沸き上がってくる気持ちを押さえながら見守る。

ああ・・・、あいつ、かっけえな。

昔はよく泣いてたのになあ。

行っちまうのか、美衣。

なら、もう俺は必要ないな。

あーあ、俺が持ってたもんが、またすり抜けていつちまったぞ。どうしたもんかねー、これ。

とりあえず、今日はグラハムたちも巻き込んで飲むか。

そんなことを考えながら、どういう原理なのか剣の一突きでモンス

ターを轟沈させた美衣を眺めていた。

母ちゃんが亡くなってから、あいつは毎日泣いてたから、俺が代わりに笑顔でいたのに。

あいつはいつの間にか、俺を越えた。

実力的な意味でも、精神的な意味でも、俺を。

もうずっと昔から、泣いていたのは俺で、笑っていたのはあいつかもしれない。

あいつが救世主として呼ばれたと聞いた時、ほんの少し、依存されることへの期待があったのかもしれない。

だって救世主としての能力は、自分の救いから来ているのだから。
トラウマ

けどあいつは、俺が居なくてもそれを成し遂げた。

だからもう、俺は必要ないのかもな。

仰向けに倒れ込んだまま空を見上げる。

雨雲があるのに中途半端に晴れ渡っている、今の俺の気持ちのよう
な空気を呼んだ空だった。

十七話 ボーイズビーアンビシャス！意味は特にない。（後書き）

終わったどー！

十八話 加速度的に自虐的

本編に関わりのないプロローグ3

ブ「女って何で出来てるんだろう？」

グ「胸」

ク「オ○ンコ」

メ「ふゝ君たち解ってないね」

ク「こういうことだよメタボさん」

メ「いいかい？女が何が出来てるかなんて決まっているじゃないか。
・・・鎖骨、だろ？」

ブ「レベルの高い発言きたー」

メ「あの浮き出てる感じとか擦りたくてムズムズするよね」

ク「擦ったことあんの？」

メ「・・・・・・・・・・」

ク「てめえ！」

ブ「こいつ敵だ！敵だぞ！」

メ「まあ待て負け犬共、それより話題を戻そうじゃないか」

ク「殺してーこの余裕ぶってる感じ殺してー」

ブ「抵抗も許さずにぶち殺してやんよ」

メ「グラハム君、君は胸って言ってたけどサイズの的にはどうなの？」

グ「あ、俺？・・・っだなあ、やっぱちっぱいかなあ」

ク・ブ・メ「お前は何を言っているんだ？」

グ「は？何がよ」

ク「お前な、現代生物学では生物が本能的にでけえおっぱいに引かれるのは必然なわけだよ」

メ「そんな世界の真理に反逆する君の思考はまともだとは思えない」

グ「いや、だってさ。エッチする時にこうプクッ・・・って乳首が膨らんでくる感じとかが堪らんのやけど」

ク「分かんない！分かんないよお！？」

ブ「何それ！何それえ！？」

メ「あー・・・今日はこれまで」

グ「また今度な」

生とは永久の戦いである。自然との闘い、社会との闘い、他との闘い、永久に解決のない闘いである。闘え。闘いは生の花である。――

大杉栄

はぁーどうすつかねー。

よおっす、間部功刀だ。

俺は今、訓練をサボって街を抜け出し、広大な樹海の中を当ても無く歩いていた。

理由は前回を読んだ皆様はお気づきの通り、自分を支える立脚点の一つが見事に崩れ去ったことによるだろうしもうもない寂寥感だ。

あの後は会話もそこそこに俺はブライアンと佳織よりも先に還って来ていた。

え？佳織も居たのかって？居たよ。

グラハムと一緒に作戦立案の方に回ってたけど。

あいつの能力について説明を受けた時は何それチートか思ったん

だが、今はその力を自分でセーブしていることが分かった。
なんと、俺がこの世界に來た時ルカ子たちと普通に話せたのは佳織のお蔭らしい。

言霊を無自覺に使って、この世界にいる住人全ての言語を統一したそうだ。

とは言っても元々の住人達は言語は共通語を使っているので、この効果が発揮されたのは俺達救世主という異世界からきた住人のみ。
ありがたいっちゃありがたいが、世界を理を曲げるのは相当負担になるらしく今はそこまで強引に理を曲げる事は出来ないらしい。

なので今回はグラハムと後方で待機してたわけだ。

ま、そんなことより問題なのは、

グルルルルルル・・・

・・・どうしようかね。

森の中を彷徨っていたのはいいんだが、まさかベアーな奴等の群れに囲まれるとは・・・。

ありえねー、幸運スキルがEとかそこらへんか俺は。

じゃないとこんな状況ありえねーよ。

グガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

そうこう言ってる間にベアー達が一斉に襲い掛かって來た。

はあく、まったく。初期の頃の俺なら死んでたぞこれ。

「ま、運が悪かったなてめえら」

俺は今、虫の居所がワリイんだ。

「ふいゝ結構掛ったな、時間」

殴り倒したクマー達の山の天辺にドカリと腰を下した。

「あー・・・飯も何も持ってきてねー・・・腹減ったわー・・・」

既に日が暮れかけていた。

ブライアンの甲冑勝手に借りてきたからまだ位置は割り出されてないと思うが、結構に派手に暴れたからなー。

まだあいつらの顔を見るのは嫌だな。

そう思って移動することにした。

「お兄ちゃん、だあれ？」

「あん？」

そんな俺の背に、誰かの声が振りかかった。

こんなところに誰が？

自分の事を棚に上げながら不信任を募らせた俺はバツとその声のした方向に構えをとった。

だがそこに居たのはぬいぐるみを抱いた少女だった。

黒曜石のような黒い髪に、全てを呑み込んでいくかのように黒い瞳、夕陽に反射するのではないかと錯覚するほどに白い肌、日本人とはまた違った整った顔立ち。

そんな少女がぬいぐるみを抱いて裸でこちらをじっと見ていた。裸でこちらを見ていた。

大事なことなので二回言った。

うーん確かに綺麗な子なんだけど、銭湯で見かけるちっちゃい子みてる気分で欲情するかどうかと言ったら微妙と答えるしかない。だって隠す気ないしあの子。

○ンコとモロ見せだし。

恥じらないのないうエロはただの露出だと何度言えばry
そんなわけで俺の性欲の対象としては不合格だ。
俺はシスコンであってロリコンではない。

「おい、取りあえずこれでも着てろ、さみーだろ」

「・・・・・・」

俺が投げ渡した上着をひょいっと避ける少女。
当然の如く地面に落ちる俺の上着。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

ほうほうほうほうほうおいおいおいおいおいおい
おいおいおい。
お兄ちゃんちよつとカチンと来ちゃいましたよ。

「はっ!？あれ・・・ここどこだ」

ムクツと起き上がるとそこは森林で囲まれた草原だった。
マジか、本当に何処だここ。

「あ、起きた」

「あん？」

少女、この少女は確か、ん？ぬいぐるみ?・・・あっ!

「・・・・・・・・」ジリジリ

「・・・・・・・・？」ススッ

「・・・・・・・・」ジリジリ

「・・・・・・・・？」スススッ

「あの、そんな近づかないでくれますか・・・」

「？何故？」

「いやだって」

ぬいぐるみ・キラ～ン！

メツチャ視線感じるんやけど、こいつ・・・・・・・・やっぱ生きてやがる。

ぬいぐるみ「・・・・・・・・」

俺「・・・・・・・・」

ぬいぐるみ「キラ～ン」

俺「ビクッ!？」

少女「クスッ……」

ちくせう。

なんなんだよこいつら一体。

「お兄ちゃんだれ？」

「人に名前を聞く時は自分から名乗りなさい」

「？私の、名前？」

「うん」

「私、名前無いよ」

「……ふーん」

事情は知らんがこの少女にもベビーな人生を送って来たっぽいな。
こんなモンスターだらけな樹海の中で一人で生きてきたのか……。

なんか……親近感だな……。
名前がない。ふむ、名前ねえ……。

「フォアリーベ」

「？」

「ドイツ語の選択って意味だ。まっさらなお前さんには的を射た名前だろうよ」

「名前？」

「ああ、名無しじゃ呼びにくいからな。俺はお前にフォアリーベっつー名前で呼ぶぞ」

「・・・」

「おい黙ってんなよフォアリーベ感想くらい言えよフォアリーベ」

「嬉しい・・・？」

「何故疑問形」

「うん、私、嬉しい・・・」

「そっか・・・」

小さく微笑みながらそう言ったフォアリーベの顔があまりにも可愛らしかったので、思わず頭を撫でてしまった。

ぬいぐるみにぶん殴られるかなーっと思ったけど、意外とフォアリーベの腕の中で大人しく抱かれていた。

「んで？ここはどこだ？」

「今日の、寝床」

「もろ野宿っすね」

つか木の幹だ、ここ。

空には星が瞬いており、彼女の顔が判別しづらいので視力を強化して暗視を可能にする。

これ以上の行動は危険だな、いくら暗視可能といってもペルムドンの樹海は未だ未知のモンスターとかいるらしいし。

下の方で犬っぽいのがうるさいしな。

・・・・・・・・・・・・・・・・あのまま気絶してたら
と思うとゾツとしねえな、おい。

「まいつか」

「？」

「こっちの話だ」

「そう」

そう言ってフォアリーベちゃんは懷から果物っぽい物を取り出すと、俺に一つ放り投げた。

「あんがと」

「?」

「感謝しますってこったよ」

「感謝?」

「嬉しいから、そのお礼って事だ」

謎の果物を口に運ぶのは中々スリリングな思いだったが、腹に背は変えられないので、一応服で磨いて一口かじる。

味に関してはノーコメントだ、すげー独特な味だった。

辛いのか酸っぱいのか微妙なラインを行ったり来たりしてる感じ、腹には堪るけど。

今すごいすぶい顔してるはず。

すぶいⅡすっぱいⅠすぶい。

閑話休題。

そしてそんな俺の顔をじーっと見つめるフォアリーベ。

今さら返してくれと言っても返さんぞ、俺んだ。

え、違う? そらすまん。

「あなたは、感情を知ってるの?」

「ん? 知ってるな」

「さっきのも、感情?」

「感謝か？感情だな」

なんでそんなことを聞くのか知らないが、俺はすぶい果物を口に運びながら何となく答えた。

「もっと教えて、感情」

「あん？今飯食ってんだけどなあ……。ああ、ええっと、今の俺の顔がうっとうしいって感情な？」

「そう」

「そうそう」

「なぜ、うっとうしいの？」

うわ、天然な癖に中々グサツとくることを言うな。

……。ま、他人だからこそ言えることがあるよな。

愚痴だ、愚痴。

「嫌なことがあったからかなあ」

「どんなことがあったの？」

「……。そうだなあ」

気付けば、俺はつらつら喋っていた。

なんか、虫の居所が本当に悪かったんだろうな。

俺は、潤滑油でも飲んだのかってくらい、目の前の少女に洗いざらい喋っていた。

こりゃ、相当参ってたな、俺。

流石に全部じゃないが、さわりの部分は大方語っていた。

この野生児に全て理解できるとは思わないが、それでも語っていた。

「クトウはどうしたいの？」

「護りたい。護れなかった奴にいつか届くかもしれないから、そのために手を伸ばしたい」

「護れなかった人がいるの？」

「・・・昔、2人な。俺は、その二人の為にヒーローになりてえんだ」

「失われたものは、戻らないよ？」

「そうだな・・・。俺の願いは形だけだ、容カタチが無い。そんなんだけど、護れる奴は護りたい」

「そう・・・」

「ああ・・・」

次第に、眉が下がって来た。

たぶん、今日は動き回ったから眠いんだろうな。

あれ、てか何かあいつ喋り方急に流暢になってね・・・？
でもねーわ。寝よ。

「ん・・・ああ？んーあう・・・」

起きました。

「ん？あれ？あいつどこいった」

朝日がのぼつとるが、昨日俺の今思い出すと恥ず過ぎる暴露話を聞いてくれた俺がフォアリーベと名付けた少女が居なくなってた。

「……んま、また会えるだろ」

昨日話をしたからか気分もいくらかマシだ。

ルカ子たちに心配かけてるだろうし、そろそろ帰るか。

それに、確かめたいこともできたしな。

自分を見つめ直したって事なんだろうかね、これ。

「……あんがとよ、じゃあな」

そう言って俺は来た道に戻っていった。

ただ……、その道程には大量な狼モンスターが付いてきたという惨事があった。

十八話 加速度的に自虐的（後書き）

明日には終わると思います

十九話 この手のひらに残る物

「クトウか、昨日は見かけなかったがどうしてたんだ？」

「クルーネ姐さん・・・え？」

「ん？聞こえなかったか？昨日は訓練休みだったんだが、何して過ごしてたんだ？」

「あ、えー・・・ちよつと森林浴を」

「あー確かに心洗われるよな、大自然は」

「ええ、そうっすね」

「だが程ほどにしとけよ、ここの森はガチで危険だからな。モンスター多いし」

「・・・・・・・・」

「おい、なんで泣くんだ。なんだ、本当に襲われたのか？」

「まあ・・・二回程・・・」

「それは運が悪かったな」

「・・・・・・・・」

「だ、だから何故泣くんだ」

「いえ・・・ホントに・・・なんでもないっす」

「な、なんかすまんな・・・」

「あ、それで姐さんお願いがあって来たすよ・・・」

「ああ、なんだ？」

「ちょっと決闘してくれないかなって」

人を誘惑することもできないような者は、人を救うこともできない。

——— 出典・誘惑者の日記 著者・

キルケゴール

「いいんですか？」

「ルカ子、その質問は野暮だぜ」

取りあえずかっこを付けるのが俺流。

冒頭より数刻、城内部にある演習場に俺とクルーネ姐さんが対成すように立っていた。

観客はまだ夜が明けてないからカルカ子と相部屋の佳織しかいない。

両者既に戦闘準備を終えており、姐さんは甲冑を着込んだフル装備、俺は既に容脉・爪甲を発動していた。

冗談抜きのカチの決闘。

「クトウ、正直に言うとは嬉しいぞ」

「・・・そっすか」

「ああ、だがお前の様子は常軌を逸してる。私も師匠として、貴様を見定めねばならん。だからなクトウ—————」

ビュン！、と腕を振ると、その手には転送させた剣が握られていた。種別的にはグレートソード、間違っても重量的に片手で触れる代物ではない。

甲冑の力で地力を底上げした状態でこそ可能な芸当だ。

盾はどうやら召喚しないらしい。

両手剣では盾は振り回すには邪魔だからだろうし、ハンデの意味合いもあるだろう。

彼女の技量なら問題無くその二つを扱いこなせるだろうからな。

それもそれに応えて両爪甲をぶつけて闘争の意志を示す。

ルカ子は躊躇いがちに片手を上げて、そして決闘開始の合図の声と共に振り下ろした。

「始めっ！」

互いに近接戦闘主体、初手は必然的にぶつかり合う事になった。

「どうした？この程度か？」

「いや、これからっすよ」

やはり地力が狭まっても経験と技量に差があり過ぎた。
やっぱ無理か、五回ぶち殺されても多分余裕でお釣りが来るな。
だけど、これだけじゃない。

「身体・・・特化ッ！！容脉・心臓機能拡張！！！」

「ほう・・・！」

全身を駆け廻るマグマのような血液、血管が大量の血液によって膨らみ、過剰な脈動によって心臓が悲鳴を上げる。
今の体力を削られた俺ではそんなに長く持たない。
その短いタイムリミットをさらに他の技を重ね掛けすることで削っていく。

かなり刺激的な状態だ、例えるなら自滅と切断による両方の敗北を似たクで迫られている感じだ。

もちろん俺は、武士の最後は自決と決まってる。

別に俺は武士じゃねーけど。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！！！」

「ぐう!？」

俺の拳が姐さんの鎧を穿ち、殴り飛ばした。

これが、今の全力だ。

そして、電池切れだ。

「ゴホッ!？ゲホツガハツゲホゲホッ!！」

「・・・全く、まさか一撃入れられるとはな。鎧が無ければアバラ逝ってたぞ」

多少ダメージを負った様子でゆっくりと俺の方に近づいてくる姐さんを、俺は血反吐を吐きながら見つめる。

血液を特化して循環させるという事は、心臓その他循環器官にも相応な負担を強いる事になるため、正に全身がボロボロになる。

身体特化は今の俺にはドーピング以外の何物でもない。その上にさらに普通の状態でも負担が大きい葉脈を重ね掛けしたのだ、当然の結果だった。

ここまでしなければ届かない存在、ここまでしても踏破成し得ない理不尽、ここまでしても、弱い自分。

「わかっているのか？貴様がそんな闘い方を続ければ・・・」

「それでも、護れない物がある。こうでもしなけりゃ俺の護りたいものが落ちてくんだよ、むしろ足りねえ・・・!」

フラフラと、震える膝で立ちあがる。

無茶だろうし、無謀だろうし、無知だろうし、無価値だろうし、無意味だろうけど、無茶で無謀で無知で無価値で無意味なものが漢は好きだろう？

俺が今立つのも、そんな感じ、ただの意地。

虚勢でも張って無ければ倒れてしまいそうだから、折れてしまいそうな牙でも突き立てるのはやめない。

既に身体強化すら不可能な身体を起こし、拳を構える。

「クトウ……。私は貴様の考えは否定しないよ、護れない物が、私にもあった。だがな、そんなものいつかはすり抜けていくんだよ」

「な……に……」

「親鳥に育てられているひな鳥も、いつまでも巢の中に留まるわけじゃない。いつかは巣立っていく。私達はな、護ってるんじゃない、護られてるんだ。」

その言葉は、正しく捉えれば問題無かったのだろう。

だが、今の俺には決定的な言葉だった。

自らの根幹を揺るがされているような、そんな言葉。

俺が、護られていた？

じゃあ、俺が護ろうとしたものは、零さないようにとした今までの想いは。

すべて、無駄か？

ああ、なるほど。

元々俺の願いはそんな感じだったな。

せめて手のひらの中の人達は護りたいのに、その手の主である自分
は護れなくてもかまわない。そういった傲慢な願い。

形はあるのに容カタチがない。

張りぼてで出来たガランドウだ。

ああ、なるほど。

俺の求めていた物は初めからなかった。

どうやっても手にできない霞を掴む様な徒勞の行為だった。

ヒーローにはなれない。いや、そんな存在すら初めからいなかったのかもしれない。

だって、その願い自体が形を成さないのだから。

俺は、彼女たちとの約束を果たせない。

《転んでも、また立ち上がりなさい。泣いても、また笑いなさい。これが正しいと、言える勇気を持ちなさい。そして、誰かの為に強くなれる人になりなさい》

《やっぱり、ヒーローがいいとおもうよ!》

「あああ・・・あああああ・・・うああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああ！！！！！」

様子ではない、存在の改変と呼んだ方が正しいかもしれない。
明らかに、先程までとは格が違っている。

そんな奴に存在の圧力がさらに増す、そこでようやく思考が戻って来た。

「ルカトエーゼ！結界だ！急げ！」

「ッ！はいっ！」

周辺被害はこれでいいとしても、こいつの気配に何人が気付いたな。

「何事です！？」

こいつとかな。

おそらく屋根から跳んできたのだろうが、空から落ちてきたような錯覚を覚えるような登場だった。

「見ればわかるだろうが、クトウの封印が解けた」

「はぁ！？なんでそんなことになってるんです！？」

「ああすまん、多分私の一言が止めに入った気がする」

「ちょ、なにいったんです！？今は置いとくですけど！」

「ありがたい」

勘違いしてる奴を突いて灰汁^{アク}抜きしてやろうと思ったんだが、まさかここまで溜めこんでるとはな。

これは抜いてやるしかあるまい。

「うわ、すごいあくどい顔です」

「ははっ！そう褒めるな！」

「ええゝ・・・」

「結界張り終えました！」

「御苦労だルカトエーゼ」

「で？どうします」

ルカトエーゼが奴を見てそういう。
そんなもの決まっているだろう？

「とりあえずぶん殴る」

「殺す」

「止めましょう」

む、なんだルカトエーゼ、その不満顔は。

「私は能動派であって頭脳派ではない」

「考えるのって苦手です」

「はあゝ・・・」

深くため息をつくるルカトエーゼ。

しょうがないな、これは。うん、これはどうしようもない。性分だし。

「わかりました。こっちでなんとかしますんで、足止めお願いします」

「了解」

「応、です！」

同時に、クトウの改変も終了していた。

十九話 この手のひらに残る物（後書き）

キリがいいんでここで止めます。

うわーどうしようこれ。

二十話 思えば遠くに来たもんだ

本編に関わりのないプロローグ

「帰って来たな」

「ああ帰って来たね」

「今回は俺とメタボさんだけか」

「そうだねクトウくん。むしろ僕達だけだからこそその危険度だね」

「さて、今回はTRPGについて語り合おうか」

「あー・・・僕興味はあったんだけど友達いなかったから詳しい事は知らないんだよね」

「むろん、俺と作者もだ」

「なにその矛盾した企画」

「なんでもこの前まで引き籠ってた作者が学校で友達を作る為の苦肉の手段として考え出したのがTRPGだそうだ」

「作者エ・・・」

「ええっと、TRPGというのは会話とダイス（サイコロ）によって進行していく非家電型のロールプレイングゲームだ」

「非家電型って」

「数人で集まってプレイヤーは架空のキャラクターを作り、ゲームマスターの用意したシナリオにそってゲームを進める」

「あ、それなんか面白そう」

「ゲームであり物語でもあるのがTRPGの特徴だ」

「おお！で、どうやってやるの」

「まず必要なものはルールブック、これは必須。ダブルクロスとかソードワールドとかアサルトエンジンとかな。次にダイスと電卓とメモだな、ゲーム内のシナリオはこれによって動かされる。後はさっき言ったシナリオ、自分で作ってもいいしリプレイを参考にしてもいい」

「こうしてみると結構手間かかるな」

「ルルブからしてたけえモンな。一つ大体4000くらいするし」

「マジかよ」

「しかもここは異世界だからルルブ自体ねえ・・・」

「くそっ、なんでこんな娯楽の乏しい世界に・・・！」

「こうなったら、この世界の娯楽の命運は俺達の手にかけてる」

「必ずや、必ずやTRPGをメジャーな遊びに・・・！」

「まずは俺達でルルブを作るんだ！いくぜメタボさん！」

「おう！」

俺の田舎にもTRPG人口が増える事を祈って・・・！

多くは覚悟ではなく愚鈍と慣れでこれに耐える。

———
ラ・ロシュフコー

「ネリアちゃん！足止めをお願いします！」

「はいです！」

先程の荒ぶりようとは逆に不気味なほどの静けさを保ったクトウさ

んの視線がこちらを向いた瞬間、ハツとした私はネリアちゃんに指示を出します。

この状況で指揮は高等魔導管理官である私に委ねられます。軍で言うところの佐官の地位に当たります。

「それで？私はどうする」

「それは今から説明します」

やや不満そうなクルーネさんに苦笑しつつ、私は愛用の杖をギュッと握りしめ深呼吸して気持ちを改めた。

「いつかこういう状況になることは想定していましたが、こうも早く破れるとは思わなかったのでぶっつけ本番です。うまく行く保証はできません」

「前置きはいいい、とっとと指示を寄こせ」

「はい」

そこまで重く受け止めてないような態度をとるクルーネさん、流石です。

「その前に、佳織さん」

「『何?』」

「私はクトウさんの事の対処にあたりますので周辺への呼びかけや姫様への報告ができません、任せてもいいですか」

「『わかった』」

僅かに躊躇いを見せた後、頷きながらボードを見せる佳織さん。視線で一度クトウさんを見てこちらに視線を合わせる。意図を察し、私は手短に答えた。

「任せておいてください。私、クトウさんの先生ですから。それと、結界をでる時はこれを使ってください」

「・・・・・・・・・・! (コクツ)」

頷き、走り出す佳織さん。

即興で造った結界だったので構成が甘いのが幸いだった。もし本格的なものだったら自分でも出せないところだったから。

「さて、指示でしたね。やることは簡単です、クトウさんの下に今から私が造り出すものを送り届けてください」

「なんだ、戦闘じゃないのか」

「十分に楽しめると思いますよ」

ネリアちゃんと交戦に入っているクトウさんの動きを見ながら言う。
クネールさんもそちらをみるとニヤリと嗤う。

「なるほどな、了解だ。それまで待機か？」

「ええっと、そうですね、剣を一本頂けますか？」

なるほど、と思った。

確かにこれならクルーネさんのあの評価もうなずける。

今のバカ弟子の動き、救世主の力を解放されただけで私達の地力を越えている。

その上今までの訓練で培った戦闘技術が組み合わさってこれだけで脅威的なレベルの戦士に仕上がっている。

もし最初からこの地力があつたら今のように育てる事は無理だっただろう。

しかし、それだけだったら難しいだろうが三人がかりでボッコにできるのだ。

いくら地力が上がってもこいつのスタイルはインフライト格闘戦が主体だ。私とクルーネさんで抑えてルカ様がトドメ。

これで十分鍛えられた。

この能力さえなければ。

腕を掴み強引に組み伏せようと服を引っ張る。

が、まるで霞でも掴んでいたようにいつの間にかすり抜けられていた。

これだ、この謎の回避。

これで三度チャンス逃した。

いくら地力が高くとも経験と技術の差では勝っている。

将来的にはわからなくなるとしても今の奴でも負ける気はしなかった。

なのに、この私が、近距離戦で闘いにおいてクルーネさん達とも遅れをとらないと自負している私が、この現象を理解できない。

さらに、こいつさっきから避ける行動しかとっていない。

ゆらりとした印象があるのにいつ間にか移動している不思議な動きだ。

目に追えない事はない、動きも読めない事もない、攻撃を当てられない事もない。

しかしどうしても視界から外れる時一瞬だけ行方を眩ます。

こちらの猛攻に防戦一方なのか？

いや、あの動きがあるのなら攻撃も可能だ。何より自分を攻撃してくる存在に何故こいつは避ける以外の抵抗を示さないのか？

どちらにせよ、私の役目は時間稼ぎ。

ならば倒して動けなくしておいても問題無いはず！

リミッター
手袋を外し、こちら本気モードへ移行した。

「これから簡単に逃げられるとはおもわねーこってす」

「・・・」

向かいあった状態、から一気に距離を詰めて懐に入る。

「ッ!？」

「しばらく眠ってるです」

タメも勢いも全力で乗せた掌抵を鳩尾に打ち込む。
直撃を確信した時だった。

腕がバカ弟子の身体を貫通した。

「なっ!？」

「・・・」

バカ弟子を殺してしまったのかと一瞬動揺するが、すぐに違和感に
気付いた。

触れた感触が無い？

腕は確かにバカ弟子の身体を突き抜けているのに、まるで幻を前に
しているようにバカ弟子には存在そのものに触れていない。

一体どういう事なのか。

多少バカ弟子を殺しかけたかもしれないというショックとこの謎の
現象に困惑して動けずにいた私の腕をバカ弟子がそっと触れた。

「っ!？」

ゆっくりと、己の身体から私の腕を引き抜く。

やはり、バカ弟子が掴んだ手には血も何も付いてなかった。

戦闘中に関わらず思わずホッとしていると、バカ弟子は今度は引き抜いた？手を自分の両手で包み込むように掴んだ。

「ちよっ、な、なにするです！離すです！」

「……」

少し罪悪感があつたので抵抗せずに抗議するが、バカ弟子は聞こえた様子もなく握った手を見つめ続けている。
その態度に無視されたような気がしてムカついたので、一発ぶん殴って無理矢理手放させやろうかと思った時、

「お前、綺麗な手だよな」

そんなことをバカ弟子が口にした。

「なっ、ななななななななななななななな！？」

「……」

と、突然何を言い出すですかこのバカは！？

「まあ、ケツの方が綺麗だけどね」

「は？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ？

無表情から突然ににやけ顔に移行したバカ弟子は、バカにしたように私をこき下ろし始めた。

「てめえがいつも屋根伝って移動してんの見てたんだぜえWWW
そら見えるようWWW見たことあるようWWW
ごちそうさますWWW
プゲラWWW」

「はあ!？」

「お前は確かに魔法少女だったWWW
パンチラWWW
うはっWWW
みんなWぎWってWきWたW」

「・・・・・・・・」

突然のバカ弟子の壊れ具合に呆然とするしかない。

一体何が起こってるのか私に説明してほしい。

「すみませーんWWW
パンチラサービスおねがいしてもいいですか
WWW」

「ダメに決まってるです。あんま調子に乗ってつと握り潰しますよ」

「握ります W W W 自慰で W W W W」

あ、なんかこいつをまともに相手してたらダメだな、と理解した。
ていうか酒飲んでテンション上がった時のこいつもこんなだった
なと思いだした。

「さて、まじめな話でもしうか」

「最初からその気ですか、やりにくいです・・・」

「こっちの口調の方がいいか W W W W W W W W W」

「真面目にやれです」

「うっす」

やれやれ、こいつの奇行には毎回振り回される。

もはや諦めの境地だが、まさかここまでアホだとは思わなかった。

「まず言っておこう、俺は正気じゃない」

「いや、んなもん普段の言動で把握済みです」

「違う違う、主人格の方が変態だって事じゃない。俺の話だよ」

ザワツ、と空気が軋む音がした。

「どういう事です」

「俺とあいつは別々だ。ヒーロー独善者ときゅうせいしゆ独世者の意識、その二つが俺の中で眠っている。俺がきゅうせいしゆ独世者の方だ」

「あいつ二重人格だったんです？」

「いや、別れたのはこの世界に来てからだ。救世主の誰もが埋め込まれている世界の意志、『救え』という強迫観念に共感した俺が別人格として奴の中に産まれた」

「今までは封印で出てこれなかったって訳です？」

「ガチガチに固められてんのにあいつは気が付きもしなかったがな。そうして産みだされた俺の存在意義はただ一つ、俺の求めた『救い』を行う事」

「へえ、どういう『救い』です、それは」

「『理不尽と暴虐から彼女たちを護る』、これが俺の求めている『救い』だ。誇大解釈すれば『女性に対する救い』と言ってもいいかもしれない。救世主の力の比例する理由を知っているか？」

「バカにすんなです。えーと、『世界を救う可能性が高い願トラウマい』でしたっけ？」

「そうだ、俺のは世界の約半分を救うと見てもいい。そのお蔭で存在自体の強さは救世主随一だと思うぞ？」

「ちょっと待つです、そこまで言うならあの透過スキルは何です？存在が強固なのにもまるで・・・」

「簡単な話だ。元となった願い^{トラウマ}からして叶わないし己^{………}自身の中身が無い。形があるのに容が無いんだよ、俺には」

難しい言い回しに首を傾げる。

私の頭は自分で言うと言けない事この上ないのだがそこまでよろしくない。

しかし、わかった事が一つ。

彼女達？

それがバカ弟子の救世主としての根幹か。

それを否定されればそら救世主の人格とやらも出てくるだろう。

よくわかりませんが、取りあえず話はこのバカふん縛ってからでもいいです。

「どうする？救いの対象であるお前に俺は戦闘する意思は無いぞ」

「難しい事はルカ様のお仕事なので私がとるわけにはいきかないです。というわけで当初の予定通りおめーをボコってルカ様のやりやすいようにします！」

「わーお W W W W」

「死ねバカ弟子！パンツの記憶抹消してやるです！」

「やーだぽーん W W W W やーだぽーん W W W W」

「なにをやっているんだあいつらは」

「・・・クトウさん」

「これ、放っておいていいんじゃないか？」

「ダメですよ、あのクトウさんが本当に救世主の人格だとしたら不味いです。救世主の人格のクトウさんが表に出てるとしたら、クトウさんがそれを望んだという事です。という事は、今クトウさんは世界の意志に引っ張られている状態です。そんな状態が続けば元の人格の崩壊すらあります」

「マジか、放って置いたらだめだな」

「そういうことです」

佳織さんの能力は『言霊』、クトウさんの能力は『幻身』と言ったところでしょうか？

そのまんまですけどね。

形があるのに、実は容を成していない。
姿だけの張りぼて。

「やっぱり良いケツだよな、他はスレンダー（笑）なのにな」

「うにゃ！？どこ触ってやがるですか！？」

触れるものは自分で選択できるみたいですね。

存在の有無を自由に操れるなんて、どんだけですか。

・・・ふむ、やっぱりそういうことですか。

「で、大丈夫なのか？お前の対策案は」

「・・・若干の修正が必要ですけど問題ありません」

「概要を聞いた時は呆れたが、今のクトウにはちょうどいいかもしれないな」

「ここまで魔力の総量が多いとは思いませんでしたからね」

救世主として解放されたクトウさんの魔力の総量はこの場に居る誰よりも多い。

ネリアちゃんの軽く五倍程度に感じるくらいだ、おそらく総量とはんでもないものになるだろう。

これだけのマナの量があれば初級の魔術でも相当の力になるはずだ。なのにクトウさんが魔術を使わない理由は、彼自身が原因となっている。

クトウさんに魔術の才能は無い。

魔術は基礎すらでんで使いこなせない上に、今でも膨大な魔力の制御しきれない程だ。

しかし身体強化だけは、彼が文字通り血のにじむ努力で練磨したあれだけは違う。

全ての魔力を身体強化だけに注ぎ込んで、操るだけの術を、彼は勝ち取っている。

存在を操れる今だからこそ、身体が壊れる事を気にせずに戦う事のできる今だからこそできる戦い方を見つけ始めている。

それは苦戦？ しているネリアちゃんを見れば一目瞭然だった。

もはやまともな方法では彼を元に戻すことはできない。

今の彼はその存在を限りなくマナに近づけた、量子体と霊子体の両方を行き来する能力を持った救世主だ。

物理攻撃も魔術も魔導も触れられない、究極の防御を持つ者。

ならばどうやって彼を元に戻すのか？

それが可能な存在を、今から呼び出す。

「時間も推してるので、さっそく作業に取り掛かりますよ」

「ああ、わかった」

魔方陣の敷き、ナイフで傷つけた血を垂らす。

そして、儀礼をとり詔を捧げる。

「我、契約の下に置いて汝に命ず。汝、顕れよ。汝、降臨せよ。汝、捧げよ」

魔方陣から炎が噴き出した。

私は最後の詔を捧げる。

「顕現せよ、創世の魔神。契約の下に置いて汝に命ず！」

いっそう大きく炎が噴き出した後、炎で象られた人形ひとがたが現れた。

彼の名は創世の魔神。

この星の誕生と共に生まれ落ちた最初の精霊の一人にして、破壊と再生を司る魔の王。

そして、今回の騒動の収集の鍵だ。

「ヨルヒムの弟子か、この前と言い今回と言い。そんな適当な詔でよくもまあ俺を呼び出せるものだ」

「すいません。今回時間が無くって」

「まあいい。で？俺は何をすればいい？」

そして、今回の騒動で一番可哀そうな事になる人だ。

二十話 思えば遠くに来たもんだ（後書き）

ちよーどいいんでここで切りまーす！

二十一話 予定ではここまで長くならなかったんだけどなあ・・・（前書き）

ご都合展開使ってもこのありさまよ。

なんだよ、独善者と独世者の意識って、バカか俺は・・・！

二十一話 予定ではここまで長くなかったんだけどなあ・・・

本編には関わりのないプロローグ5

「メタボさん、驚愕の事実が判明した」

「・・・なんだい？」

「うんこ漏れそう」

「貴様あああああああ！！！！俺がハンバーグ食おうとしてる今この場で言うか普通！？」

「うん、今降りてきてる・・・経験から言うとこれは下痢だ」

「知らないよ、死ねよ」

「なあ、メタボさん。俺は、皆の為に何が出来るかな？」

「トイレに行け」

「了解。さあ、始めようぜ！俺とお前だけの果てのない闘いをツ・・・！」

「なんでトイレ行くだだけで一々小芝居入れるんだよwww」

「耐えろ、俺の肛門耐久力あ！！」
リミットプレイヤー

「W
W
W
W
W
W
W
W
W
W
」

「今、行くぞ！！！」

「はよ行けやW
W
W
W
W
」

ある日のクトウとメタボさんの会話

すべて、初めは危険だ。しかし、とにかく始めなければ始まらない。

——
ニーチェ

ここで一つ、昔話をしよう。

俺は中学の頃まで、母子家庭で育った。

親父は早くに死んで顔も覚えてなかったし、働いた事のなかった母は水商売で俺達を養っていたが、俺に色んな事を教えてくれる人だったしそんな母が妹ともども好きだった。

だが、中学に上がりかけの頃、母は病気で死んだ。

親戚が引き取ってくれるはずだったが、母の働き先の店長が保護責任者になってくれて俺と妹がバラバラに暮らすのをとめてくれた。母が自分の治療費も削って溜めた貯金は、俺達が働けるまで十分な額になっていた。

そんなこんなで、俺と妹は天涯孤独になった。

俺は大分荒れた。

非行に走る程分別がないバカじゃなかったのは、母の教育が良かったのだと思う。

だが精神的に荒れた俺は、夜徘徊したり当てもなくブラブラしたりと、母の死を受け止める事が出来なかった。

そんな日々が続いたある日、公園で一人の少女を見かけた。

彼女は楽しくて堪らないという風に笑って、公園の中で遊んでいた。年は妹と同じくらいだったと思う。

しかし、その笑顔は奇妙だった。

笑っているのに、どこか空虚なものを思わせる寂しさが匂っていた。だからなのだろうか、気付けば俺は彼女に話しかけていた。

「おい、お前そんなブランコ漕いでってパンツ丸見えだぞ」

「へ？」

しばらくの間、彼女と公園でたまに会うようになった。

「お兄ちゃん、ヒーローってどう思う？」

「あん？ うーん・・・ヒーローねー・・・」

基本的には相手の事を詮索しない会話。
それが暗黙の内での互いのルールだった。

「・・・孤独な奴かな」

「え？」

「怪獣とか倒すのに、感謝だけされていらなくなったらポイントだろ？ そんなんじゃないよー、喜びも苦勞も分かち合えねーじゃねえか」

「でも、強いよ。みんなを守れるよ」

「ヒーローになりたいのか？」

「うん……。だって、そうしないと……。皆に見つけて貰えないもん」

「……………」

「そうしないと……。私、知らない子だもん。だから、ボカーって悪人をやっつけて皆に……………」

「……。そうだよなーほめてほしいよなー……………」

「うん！ だから、『悪人をやっつけたい』」

「でも兄ちゃんはさ、まずはお前自身から守って欲しいな」

「な、なんで！ 守るよ！ お兄ちゃんもお兄ちゃんの妹も！ 私が守るよ！」

「お兄ちゃんにはな、見えない敵がいっぱいいるんだよ。そいつらにいつつも追いかけてんの」

「それもたおす！ 見えなくてもたおす！ 私強いもん！」

「投げナイフまだ隠し持ってたのか・・・いや、兄ちゃんの敵は、兄ちゃんのが倒さなきゃいけないんだ。お前じゃ倒せないの」

「そんなぁ・・・」

この会話は、今でも明確に覚えている。

何せ、俺が立ち上がるきっかけにもなり、

「だからさ、お前がお前の敵を倒して、俺がまだ自分の敵を倒せなかった時、俺の事を助けてくれよ」

「でも、私お兄ちゃんの敵倒せないよ？」

「いいんだよ、仲間は後ろにいてだけで、それだけで助けられるものだからな（キリッ!）」

厨二病のまっただな中でもあった。

「だから、次会う時は、自分の敵を倒すことが出来た時な」

「うん！わかった！」

彼女は少しだけトーンの下がった声で返事をする、手を振って帰って行った。

その日以降、俺は彼女に会う事は無かった。

ようやく立ち直りかけていた俺に、その事は深く突き刺さった。

彼女は求めていたのは敵を倒すことのできるヒーローになることではなく、敵を倒してくれるヒーローであると、あの時の一瞬見せた彼女の寂しそうな表情で気付くべきだったのに。

俺は、なんて愚かなことをしてしまったのか。

だって仕方がないじゃないか、他人の事情にそうそう踏み込めるものじゃないだろう!?

だって仕方がないじゃないか、俺に一体なにが出来たというのだ!?!
だって仕方がないじゃないか、じゃあどうすればよかったっていうんだよ!?

そんな言い訳をして、逃げてしまおうとした。

だけど、彼女と母がダブった。

どちらとも、俺が救えなかった人たちだ。

理不尽や無常の中に、消えていった人たちだ。

『人を助ける事の出来る人になりなさい』

『ヒーローって何だと思う?』

ヒーローなら、彼女達を救えたのか?

ヒーローなら、彼女達に報いる事が出来たのか?

ヒーローなら、彼女達が平和に暮らすことも可能だったのか?

分からない、けど、分かる。

こんなことは言葉遊びだ。

誰誰の意志を継ぐ、誰誰に変わって、誰誰の為に。

自分の中身のない張りぼての意志だ。

だけど、それでも俺は、この時の俺は、見つけてしまった。

再び立脚点を失った俺が、立ち上がる為に必要なもの。

ヒーロー。

俺が、彼女達を救うために、必要なもの。

俺が、守りたいものを守る者。

俺の、大切なものを奪う敵を倒すもの。

いいだろう、やってやる。

それがどんなに空っぽでも、意味が無くても、偶像でも、俺はヒーローになる。

彼女との約束を果たす為に。

俺はヒーローになってやる。

そんなことを思った、愚かな男の昔話だ。

始めクトウさんからパンツの替えを要求された時は、『どうしよう、とんでもない人を召喚してしまった・・・！』と思ったが、正しく第一印象通りの人だった。

どこそこ構わず奇行を始めるし、よく漏らすし、どこそこ構わず歌い始めるし、よく漏らすし、どこそこ構わず漏らすし、よく漏らすし。

描写がないだけで彼のパンツをいつも届けに行ったり買いに出かけるのはいつのまにか私の役目になっていた。

女の子が苦手な癖に、強気でセクハラをする。

本当はすごく謙虚なのに、常に態度は大きい。

思い付きで行動しているようで、その実気を使っている。

掴みどころがなくて、いつも虚勢を張っているような人だった。

目を合わせるといつも三秒以内に目を逸らす、テーブルマナーは最

低限知っていて、考える時は顎をさする癖が合って、エッチな事が好きな癖に迫ると慌てて常識的な発言をしたり、いつの間にか、私の知っているクトウさんの癖は結構な数に上っていた。

自分がここまで人に興味を持ったのは初めてだった。

一緒に居るときどき酷い目にあうけど、どこか暖かくて笑いの絶えない場所。

それがクトウさんが求めるもので、彼自身が作った居場所。

その輪の中に、いつの間にか私も含まれていた。

研究と業務ばかりで知り合いの少なかった私が、色んな人にあいさつされるようになった。

それだけの変化だけど、それでも私は驚愕した。

それに気付いた時、クトウさんの事が更になり始めた。

彼の事をもっと知りたかった。

キュッと胸が苦しいのに、暖かくなるこの感情を、私は初めて知った。

この感情を質問すれば、十中八九同じ答えが返ってくるのだろうか、私はそれを受け止める自信が無かった。

私は彼に対して責任がある。

本来関係のない事情でこの世界に救世主として戦いを強制してしまった。

家族を残した状態で。

不幸中の幸いだろうか、彼の唯一の家族である妹も救世主として召喚されてしまったが。

そんな罪悪感にも近い気持ちがあるから、彼に踏み込むことが出来なかった。

でも今、彼は泣いている。

いや、もしかしたら私達の気付かない所でずっと泣いてたのかもしれない。

踏み込んでいたらどうにかなったわけじゃない。
そこまで私は傲慢ではない。

だけど、踏み込むことを、もう躊躇わない。

だから帰ってきてください。

あなたに伝えたい事があるんです。

クトウさん――――！

ああもうっ……！

まったくまったくまったくまったくです・・・！

「この大馬鹿弟子！！」

「うお W W W W やば W W W W 幻身ちよつと遅れた W W W W W W」

この馬鹿、飄々と騙って、フラフラと落ち着き、恐々と笑う。
すべてを偽りひた隠す、虚勢を張って毛皮を被る。

そこまでしてゐるくせに、別人格なんてものを作り上げる程笑ってるくせに。

「なんで、そんな無様に笑^{泣いて}ってやがるです！！！」

「そらお前 W W W W 俺達の目的はヒーローだからな W W W W」

「くだらないです」

「うは W W W W バッサリ W W W W プギヤー W W W W」

気に入らない。

こいつはとにかくムカつく程笑っている方がいいのだ。

私が見たこいつはそれだけだ。

他のこいつは知らない。でも、こいつが抱えている大切なものを切り捨てる事になったとしても。

私は、今のこいつは気に入らない。

笑っているのに、泣いているのだ。

偽ってるのに、素を曝すのだ。

器用な癖に、不器用なのだ。

そして何より、自分の目的さえ偽っている。

ヒーローを目指すのは別にいい。

バカ弟子が何になろうがバカ弟子の勝手だ。

けど、その為にバカ弟子自身が失われていくのは、気に入らない。

妙に小器用な奴等からみたら、私の選択はどれほど醜く見えるのだろうか。

まあ、そんなこと私のしったこっちゃないが。

私は頭が悪い。

だから、選んで後悔もするし嘆きもしよう。

だが否定はしない、否定もさせない。

なぜなら私はネリア・ブロン・クイッシュローゼなのだからして。

「おらあっ!!」

「いてっ W W W ちよっと掠ったいてえ W W W あ、でもパンツはいけ
ーん W W W W W」

「もっぱつ貰っとけです!!」

「いやん W W W W W W」

なので、私はこいつを元に戻って貰いたいという事になる。

あの変態で、傲慢で、ええカッコしいで、氣い使いで、助兵衛で、謙虚で、どこまでも矛盾して、だけどとても自然で、自分を力強く立たせてるくせに哀しいまでに不安定なあのバカ弟子に。

自分で氣付いた。

どうやら、私はあんなバカ弟子のことが、嫌いではなかったらしい。

「・・・しょうがねえやつです」

氣付いてしまったら、もう無視はできない。
こいつも私の友人という事になるのだろう。

なら、友人としてぶん殴ってやろう。

「だからとつと元に戻りやがれです!!」

霞みがかった幻のように、見えはしても触れられないクトウを元に
戻す方法。

解答は単純明快、その元となる力を奪ってしまえばいい。
その存在がマナに近いなら、それを維持できるだけのマナを奪って
強制的に封印する。

これがあの高等魔導管理官が考え出した作戦だと思うと少し唾然と
した。

なんとまあ強引な方法だ。

その為に、まさか創世の魔神を剣に宿らせるとはな。

創世の魔神、その存在は神とも言われているし、星の一部だとも言
われている。

とにかくとんでもない程の力を持った存在なのだが、

「あだだだだだだだだだ！！？無理矢理こんなものに俺を押し込
めようとするな！狭い狭いっ！！？」

「すいません、我慢してください」

こうして見るとどうもありがたみが薄れる気がするな。

しかし、流れ込んでくる力の大きさは底が見えない分流石と言える。こんな剣で耐えられるのかと不安になってくるくらいだ。

理論上は大丈夫らしいとルカトエーゼは言っていたが、残念ながら私にはその理論がさっぱり理解不能だ。

だから全てはルカトエーゼに任せてるしかなく、私が悩んでいても無駄だ。

私は私の与えられた役目を果たせばいい。

「あー・・・それで、まだかルカトエーゼ？」

「ちょっと待ってください、もう少しで・・・出来ましたっ！」

「・・・もうどうにでもしてくれ」

「ま、少しの間我慢してくれよ。創世の魔神」

「早くしてくれよ？無理矢理宿らされたお陰でマナが枯渴しかけた」

「ああ、すぐに連れて行ってやるよ。特大の餌の下までな」

剣に創世の魔神を宿らせる。

言ってみるのは簡単だが、ルカトエーゼ以外が口にすればもれなく消し炭だろう。

それが可能なものたぶん、彼女の師匠であるヨルヒム殿のお蔭なのだろうが。

星の一部にも近い存在をただの切れ味のいい名剣に宿らせるために、限界までその存在を削って低位であるを剣の存在まで引き下げた。それが、剣を握って分かった。

こいつは餓えている、自分の失ったマナを求めている。

すべての命の源であるマナを存在ごと吸い尽くしても足りんとばかりに餓えている。

その欲求を満たせるであろう対象を冷や汗混じりに見やる。

大丈夫か？これ。

ま、こうでもしないとクトウは元に戻らんだろうが。

ん？あいつの問題に対して思う事は無いかだと？

あいつの問題は結局あいつ自身で解決するしかないしな、私がどうこう言う事じゃない。

他の二人程私も若くないのでな。

画面の前のガキ共、貴様らに一言言っておく。

お前の、持論は、勘違いだ。

さて、現実逃避はこれくらいにして、そろそろこれを持っていかないとやばいな。

だからクトウ、早く戻ってこい。

こいつらには必要なかったんだ。

誰もかれもが結構ヘビィな過去を持ってやがる癖に、そいつを乗り越えてみんな生きてる。

家のヒロインはヒロインってガラじゃねえ、どちらかと言えばあいつらの方がヒーローだ。

俺は、そんな輪の中に無理矢理自分を押し込んだだけ。

そうだとっても、例えば俺が異物であっても関係なく、あいつらは俺の事を受け入れてくれた。

ルカ子も言ってたしな、『ヒーローにして見せる』って。

そうだったな。

俺の願トラウマいは、いつのまにか俺だけの物じゃなくなってたんだ。

そんなこと、もっと早くに気付いてしまえばよかった。

俺は、一人で目的を追ってきたけど、一人で生きてきた訳ではなかったのだから。

「それでも目指すんだろ、ヒーロー」

よう俺、調子はどうだ。

「お前ボコボコにされ過ぎ、身体中いてえよ」

ああ、そりやすまん。

で、ヒーロー目指すかって？

そりやお前、当然だろ。

それが確かに俺の中に中身として自覚できたのだし。

形があつて容が無くても、確かに在る。

なら目指さない理由は無い。

「おう、もし腑抜けた答えだすようなら自害してるところだぜ」

わりいな、身体の主導権貰っちゃって。

「別に、元々俺とおまえは同じだったんだ。それに、俺は余計だろう？」

ばっか、何くせーこと言っただよ俺の癖に。
調子に乗んじゃねーよあほ、お前も俺には必要だ。

「・・・正気か？二重人格なんてうまく行くわけねーだろ、どっちかが消えといった方がいいだろうに」

うーん・・・ならアレだ、統合しようぜ。
元々一つなら問題ねーだろ。

「おいおいおい・・・流石俺だぜ。迷いなく危険なキナクせー賭けに出るとは」

褒めんなよ。

ま、お前が封印されんのもかわいそーだしな。
俺の身体、共同でよければどうだ？

「喜んで、乗らせてもらうぜ」

それでこそ俺だ。

「よろしく頼むぜ、俺」

「クトウさん、大丈夫ですか？」

「おーいバカ弟子ー生きてるですー？」

「すまんクトウ、手が滑ってな」

「お前らいっぺん死にかけるべきだと思うよ」

現状報告、死にかけ。

「うむ、救世主か。こやつなら我が宿主として最適であろうな」

「てめえ……. どんだけ吸い取りやがった……! 殆ど魔力残ってねーぞ……!」

原因は以下の通り。

姐さんの隙をついた奇襲により何故か触れられないはずの俺に剣の腹が直撃↓接触の際ゴツソリと魔力を持ってかれる↓軽く走馬灯な上に別人格の俺とコンタクトまで測れた心霊体験↓何とか意識も戻って問題無い程度に回復↑今ココ。

「吸収ではない、譲渡といえ譲渡と」

「ほぼ変わんねえだろうが、つかお前なんだよ」

「む、宿主。そういえば今の俺は剣だ。名前が無い、契約として名前を貰っておこう」

「ああ!?! その前に魔力返せや」

顔の横を通過する業火。

「そうだなー炎の魔剣ならやっぱあれかなー」
フレイムタン

そして屈する俺。

「レヴァンティンだな、うん。よろしく」

「ああ、しぶしぶだがな」

謎の魔剣と一応の決着を付けた俺は、この原因だろう師匠共の方をむく。

「ルカ子、これなに」

ずいつ、とレバ剣を突き出すと、困った顔で微笑むルカ子。
ごまかせてねーぞ、なごんでねーぞ。

「えーっと、新しいリミッター兼封印処理です」

「あ、そう」

そう言われると何も言えない。
だってそれが俺の為にしたことなんだと、その困りつつも嬉しそうに緩んだ顔から解るから。

「全く、手間掛けさせんじゃねーです」

「……………ん、心配かけて済まんかった」

「まったくです」

ツインテもいつもより険が無い気がするしなあ。
調子狂うぜ。

「姐さんもありがとうございましたっす」

「うむ、今度酒でも奢れ」

いつも通りなのは姐さんだけっす……………。
普段通りなのを喜んだ方がいいのか悲しんだ方がいいのか微妙だ
けど……………。

さて、何はともあれ今回の騒動はこれで終わ……………。

「……………なあルカ子、お願いがあるんだが」

「え？なんですか？」

仰向けの状態のまま、俺の顔を覗きこんでくるルカ子に言った。

「うんこ漏らしたからパンツ持ってきて」

オチは下ネタお空は快晴。

お後がよろしくなくともこれで今回の締めはツインテの踵落としによって締めくくられたのであった。

二十一話 予定ではここまで長くなかったんだけどなあ・・・（後書き）

姐さんパート読んで思った。

この人パネエ。

今日の短編集（前書き）

いやっほう！

今日の短編集

男性陣が集まったら

「野郎共！短編だ！オープニングだ！うんこすっぞ！」

「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！！」」」

「は？やるわけねえだろうんことか、常識的に考えろよ」

「てめえ・・・っ！」

「クトウくん！？」

「貴様の変わり身の早さには殺意すら覚えるな！」

「そんな事よりもさ、なんか暇潰そうぜ」

「なんかねえ・・・」

「あ、あれなんてどうだ？」

「ブライアン、言ってみろ」

「あれだよ、この前お前らが教えてくれたしりとりってあれ」

「しりとりか・・・」

「しりとりってなんだ？」

「いいかグラハム、今手本見せっから座っとけ。いいか？メタボさん」

「じゃあ僕からいくよ、の、よ」

「よ、よ・・・よう、久しぶりだな、なだブライアン」

「な、何しにきやがった」

「ただ、君を迎えに」

「にゃんだと！？」

「唐突だが、結婚しないか？」

「か、勘違いすんなよ、別にお前のことが好きだとかそういうんじゃないんだからねっ！」

「寝たい、君と一緒に」

「にゃに恥ずかしい事言ってるだよっ！」

「なるほど、語尾をとっていくのか。にしても、よくこんなのポンポン思い付くなwww」

「縁をつないで、愛し合おうじゃないか」

「カルロス・・・」

「カルロス誰だしw w w w w」

「とまあこんなもんだ」

「クトウくん、君は相変わらず唐突に展開を作るの得意だね」

「カルロスw w w w w」

「カルロスw w w w w」

「うっせ、行くぜグラハム。俺のしりとりは百八式まであるぞ」

「いいだろう、こちらも全力を持って相対しよう」

「いくぜ野郎共!!」

「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!!!」」」

「深夜に騒がないでくださいね」

「「「あ、すみません」」」

恋は人を盲目にするが、結婚は視力を戻してくれる。
——リヒテンベルグ

兄妹の会話

「お兄ちゃんお兄ちゃん」

「なんだよ。つか頭の上に顎乗せんな」

「セックスしようよ」

「お前が妹じゃなくなったらな」

「むー少しは動揺しなさいよ」

「お前、リアル妹のどこに欲情する要素があるんだよ」

「こことか、こことかに？」

「丸出しの胸とか○ンコみてもなあ・・・」

「えー男なら反応しなさいよー」

「・・・何が言いたいですこの裸人」

「ふふふ、べえつにー？」

「よろしい、ならば戦争です」

「お前ら仲いいよな」

あの少女の行方

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「なんでお前ここに居んの？」

「感情を、教えて」

「いや、そらいいけどさ。その前にお前、服着ろよ」

「？」

「そこからかー・・・・・・」

まだ暑さの残る残暑の時期、俺が救世主の能力を暴走させてから三日後の朝。

俺の布団の中に、森で出会った少女、俺がフォアリーベと名付けた少女が懐に入っていてこちらを凝視していた。

何を言ってるのかわからねーと思うが俺も何かなんだかry・・・・！まあ慌ててもしょうがない、そう思って話しかけてみた訳だが・・・・。

このマイペース少女は前に会った時のように全裸だ。

そして俺は寝る時は全裸で寝る派なので俺も全裸だ。

・・・・・・解ってる、フラグだって言うんだろう？

誰かがこの神掛ったタイミングで現れて、俺とフォアリーベ・・・・めんどいからフォウが裸な状態を勘違いして俺がアボンなんて事を一瞬で妄想したんだろう？

ふっ……正解だよ。

「……………」

「……………」

開かれたドアから現れたその人物は、俺の師匠にして魔法関連のスペシャリストで身の丈よりでかい杖を持っている。
うへーいこりゃあ中々へビーな展開だぜえ……。

「何を……してるんですかクトウさん……？」

「ルカ子、違うんだ。お前の今の思考は派手にすっ飛んで勘違いだ」

まあ、俺の言い分は聞き入れられるとは思えないんだがな。

「感情……」

「おう、フオウ。ちょうどいい、いいか？あのお姉ちゃんがあらわしている表情が————」

布団の中から俺より少し離れた場所へフオウを移動させると、それを待っていたかのようにルカ子が一枚の魔方陣をとりだした。

「――怒りだ」

「――――というわけだ」

「そうですか・・・」

少し焦げた髪をいじりながら状況を説明、もとい尋問に応え、ルカ子は少し神妙な顔をしながらフォウを見る。
フォウもルカ子に興味があるのかその視線に真っ向から相対し、じ
っとルカ子の顔を俺の膝の上から眺めている。

何これシュール。

魔法少女と野生少女の謎の対決。

因みにフォウは最初服を着るのは嫌がったのだが、それが感情であることを教えてやると、楽しむように素直に着用した。

といっても俺のシャツ一枚だけだが、男物のシャツは十分にフォウの身体を包み隠していた。

まあ、なんというかその方がエロかったけどもな。

ルカ子は一度視線を外し深く考え込むように目を瞑る。

こいつをどうするか考えているのだろう。

俺的には野生児として遅く育ってほしいものだけどな。世話？できるわけねーだろ、俺まだ十六だぞ。

だからあんまり感情移入しないようにしてるし、判断もルカ子に委ねる。

俺はあんまし頭よろしくないしな。

この作品の作者がアレな時点で少し心配だが。

やがてルカ子が目を開けると、真剣な顔で言葉を紡ぐ。

「普通、孤児の子は自立が可能になるまで孤児院に預けられることになるのですが、クトウさんはどうしたいのですか？」

その問いに答える事は決まっていた。

俺だって真面目な会話の時は真面目に考える。

俺なりにだけど。

「野生に戻すなり施設に放り込むなり勝手にしてくれ、俺が保護責

任者って訳じゃねーし」

「・・・いいんですか？」

「ああ？何がよ」

「あ、いえ・・・」

ん、少し冷たいかもしれないが、この先こいつとどう付き合うか考えれば、ルカ子の判断が一番妥当だろう。

俺も救世主って立場があるし、そんなポンポン拾いものできる程俺が背負える範囲も広くない。

フォウは残念ながら俺的な優先順位はそこまで高くないのだ。

せいぜい公園でえさやったことのある猫くらいの好感度だ。

「だからボハッ!!!？」

「クトウさん!？」

いきなり頭に衝撃を受け、備えつけてあった俺の部屋のベッドに破壊しながら突っ込んだ。

軽い脳震盪に陥るが、それよりも謎の衝撃の正体を知るためすぐに身を起こす。

「誰だこのやゲハッ!!!？」

起きあがった瞬間に再び人中に衝撃を叩き込まれ今度は壁にぶつかり、反動で床に転がった。

い、一体何が起きてやがる・・・？

痛みに呻きながらもなんとか目を開ける。

するとそこにはふわふわしてそうな丸い手に、抱き心地良さそうなサイズの身体、つぶらな瞳に描かれた半月の開いた口。

そういえばこいつを見てなかったな、と思いだした瞬間俺の中で軽いトラウマになった無生物。

そう、フォウのぬいぐるみがドアップで俺の視界を埋め尽くしていた。

「よう、久しぶり」

自分でも震えていると分かりつつもそう切り出すと、当然の如く返事を返さない奴は、無言でその物さえつかめるのか怪しいドラえもんのような手を振り上げると、そのまま俺の顔面に降下させた。

結局あのぬいぐるみの介入のお蔭でグダグダになったあの場の結論は、姫様に報告してまた話し合うとのことだったので、それまでの間は俺が面倒を見る事になった。
マジであのぬいぐるみ何なんだよ。

俺もあのルカ子でさえぬいぐるみに振り回せる形で俺は今回フォウを預かることになった。

ちよつとばかりかかなりこいつのこと警戒しといたほうがいいよな、実際。

俺のコミュニティに訳のわからぬぬいぐるみの存在はこの上なく危険だ。

だが・・・、フォウに、フォアリーベと名付けてしまうほど、共感してしまったのも事実なのだ。

こいつを放っておくべきか・・・それとも・・・。

モブモグと手づかみで果物と肉類をほうばるフォウを見ると、なんとなくこのまま放りだすのも罪悪感を感じない事もない。

別に俺の責任って訳じゃないし、こういうことに関して結構シビアな現実浸って来た自分としてはあまり軽く考えたくないという言

い訳もあるが、それでもこいつの今後が少しだけ気になった。

めんどくせえ……。

「そういや、なんでお前俺の居場所が分かったんだよ」

「この子が、教えてくれた」

「ぬいぐるみエ……」

こいつマジで訳がわからん。

「それに、あなたが居なくなって、わかった」

「あん？」

「寂しい、あんたが居ないと、嫌」

「………そっか」

耽々と、そう告げるフォウ。

俺もそっけなく返すと、フォウは一度コクリと頷き再び食事へ戻った。

あーあ、ダメだわ、俺。

既に食事を済ませた俺は溜息を吐いてから席を立った。
するとフォウも立ち上がり俺の後ろをトコトコとついてくる。

「あー・・・ちょっと糞してくっからそこで待ってろ」

「？糞？」

「ケツからひり出す不純物だ」

「？わかった」

俺の言葉の意味は分からなかったようだが、待ってろという言葉は理解したのか再び席に着くフォウ。

そして俺はある人物にようがあるので、その人のいる部屋まで歩くことにした。

で、結局。

「・・・言い分は解ったけど大丈夫なの？」

「ああ、妹だって支え支えられてきたんだぜ？俺の家族力を舐めんなよ」

「そう、そこまでいうならいいわよ。別に私はどうでもいいし」

「ん、あんがとな」

「ルカトエーゼからも聞いてたけど、結構入れ込んでるのね」

「まあな、あいつに自分を重ねてる事は否定しねえよ」

「そう、それが解ってるんならしっかり面倒見なさいよ」

「お前も本当はそんな年ごろだろうに」

「私と彼女とじゃ立場も求められるものも違うもの、当然よ」

「ま、辛くなったら誰かに頼れよ」

「うん、
わかったわ」

今日の短編集（後書き）

こんなもんで、適当だけど。

習作としてこれ書いてるけど、まだまだだな。
てかひでえな、自分で読み返しても。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5852x/>

俺、不器用ですから

2011年11月20日17時06分発行